

愛を見つめる雑誌

SUN & MOON

SUN & MOON

⑥

● 縛絆特報

渡部好美特写行記

●



第 6 号

サン・アンド・ムーン

SUN & MOON

限定3000部・定価1200円

少数派のSM誌 SUN&MOON



月刊 愛を見つめる雑誌

◎定価千二百円 送料百円

五号	四号	三号	二号	一号
残部僅少	残部僅少	品切	品切	品切

サン・アンド・ムーン 姉妹グラフ誌

ザ・ビーコン No.1 ￥1500

被虐妖精・陶醉希求の影像・マゾ化馴致



ザ・ビーコン No.2 ￥1500

調教部屋①被虐性の涵養・ロマン派生吊責め



SUN & MOON 第1巻 第6号 発売元 エド・プロダクツ

昭和52年12月15日 発行

編集・発行人 世田介一

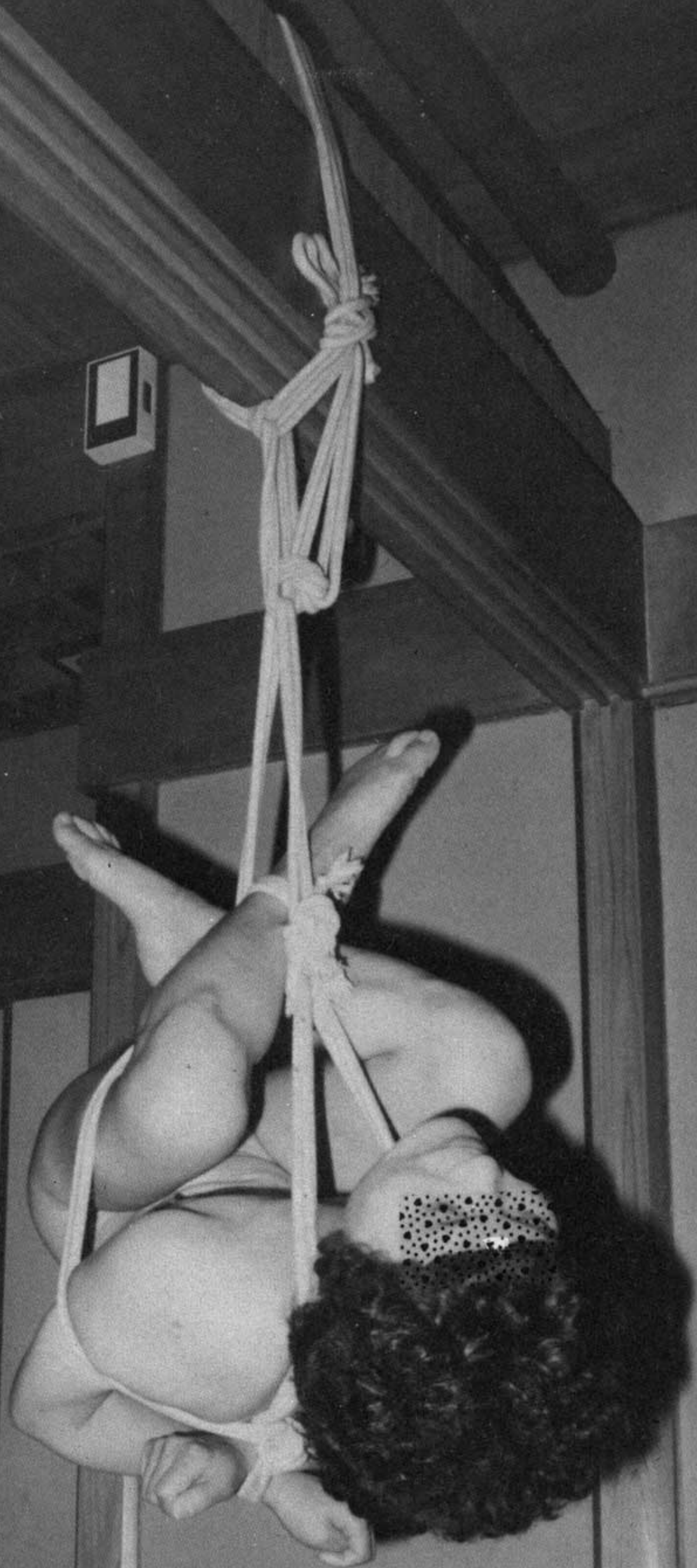
発行所 日月舎

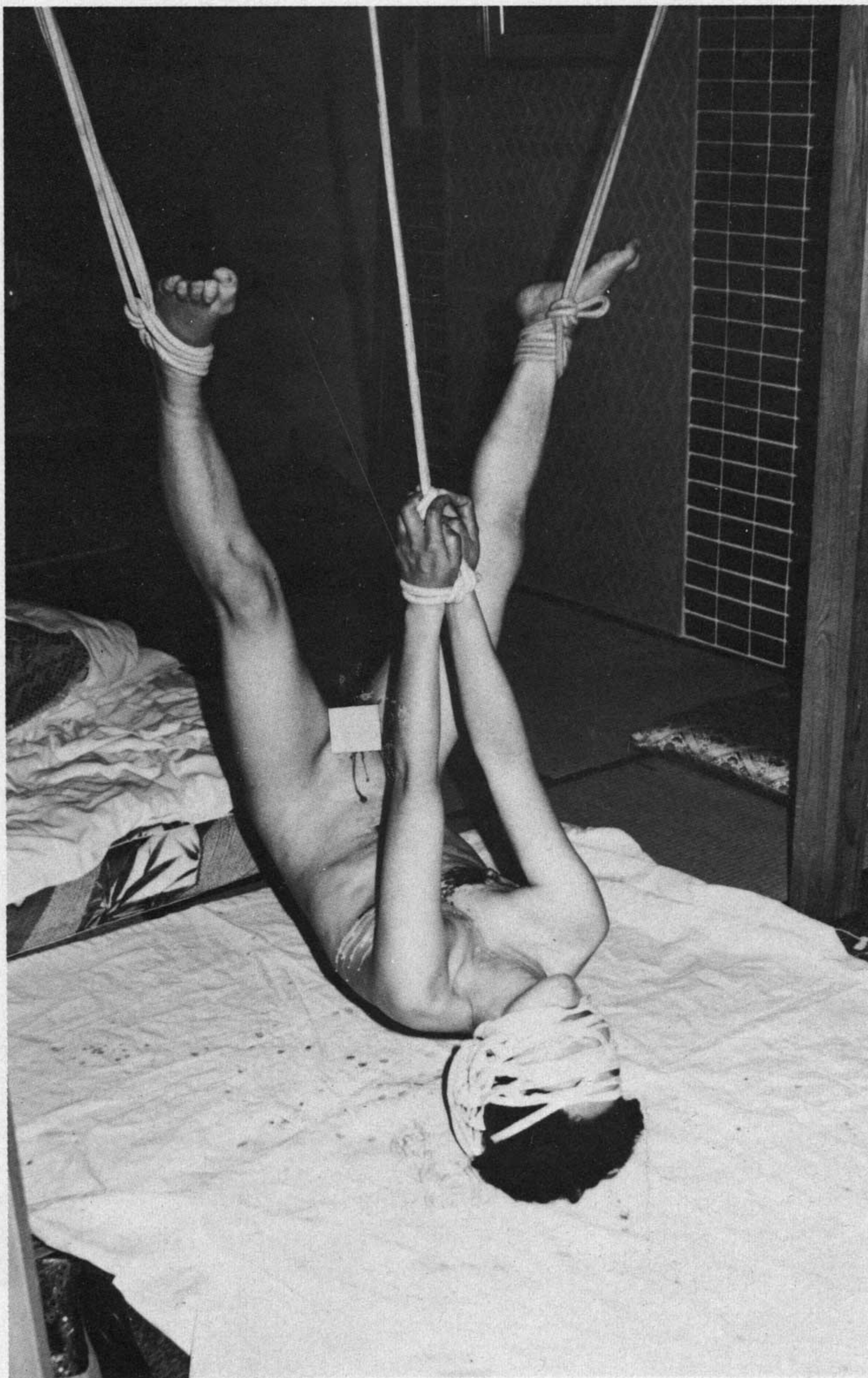
〒101 東京都千代田区西神田

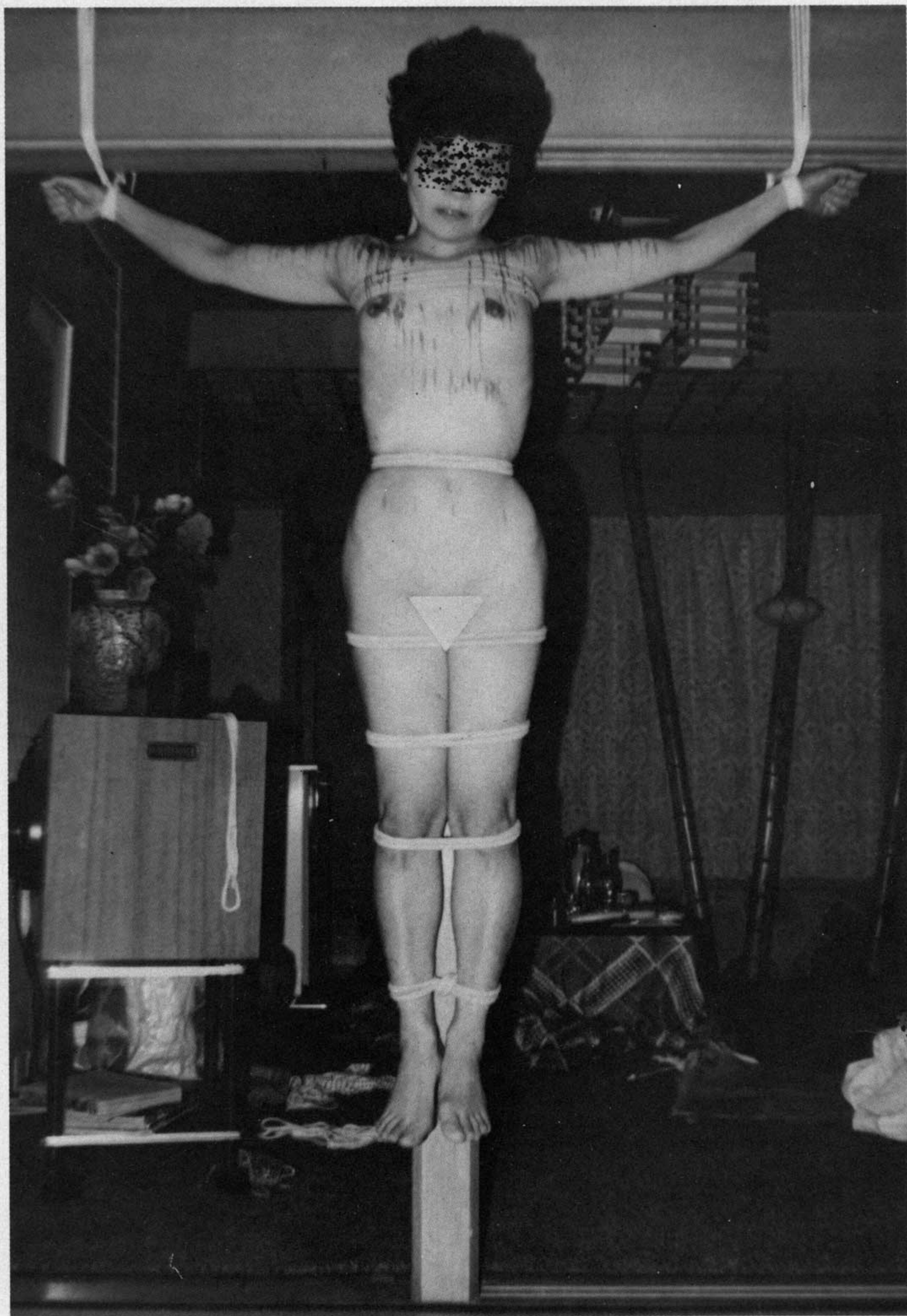
1-4-13 新神田ビル

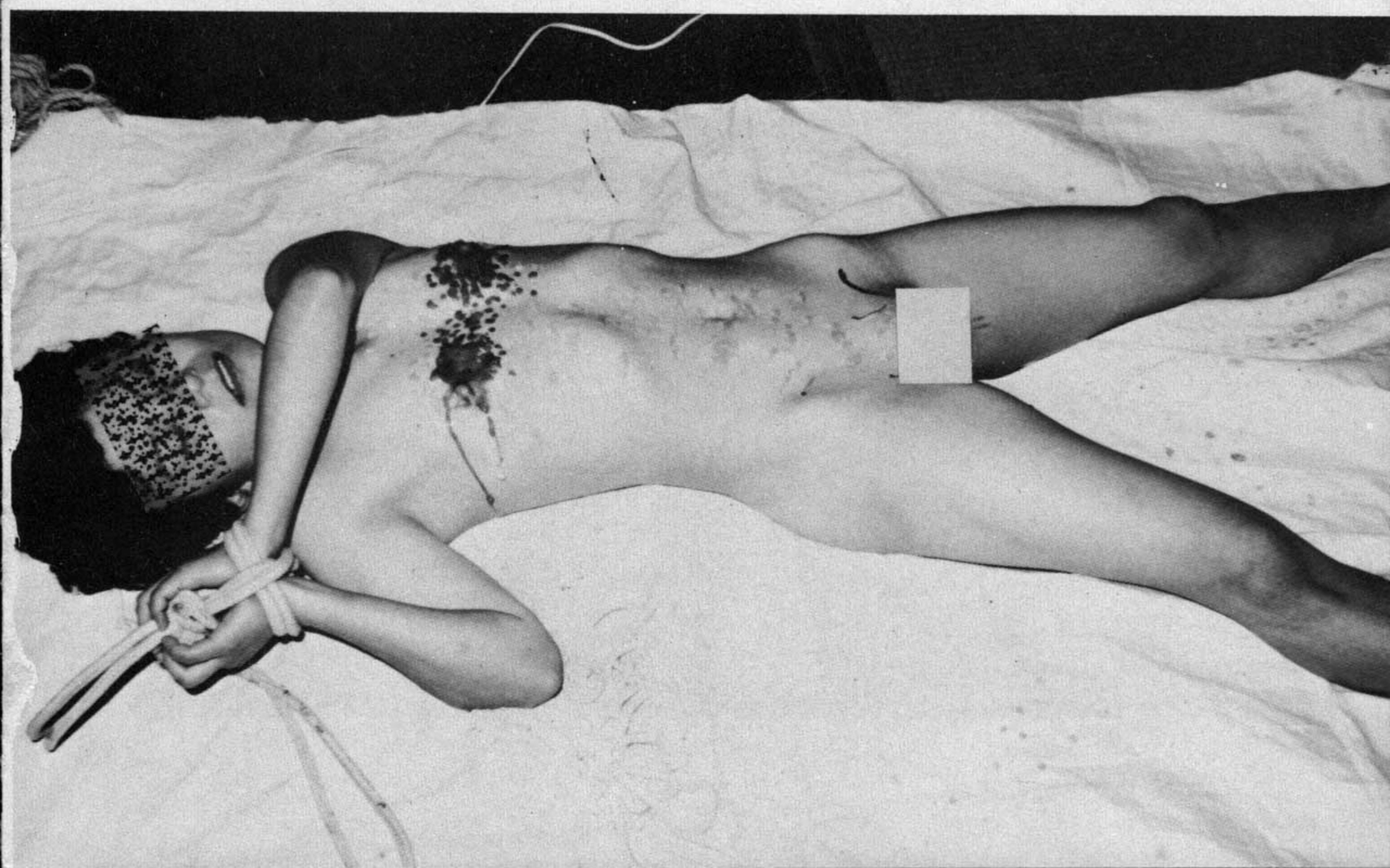
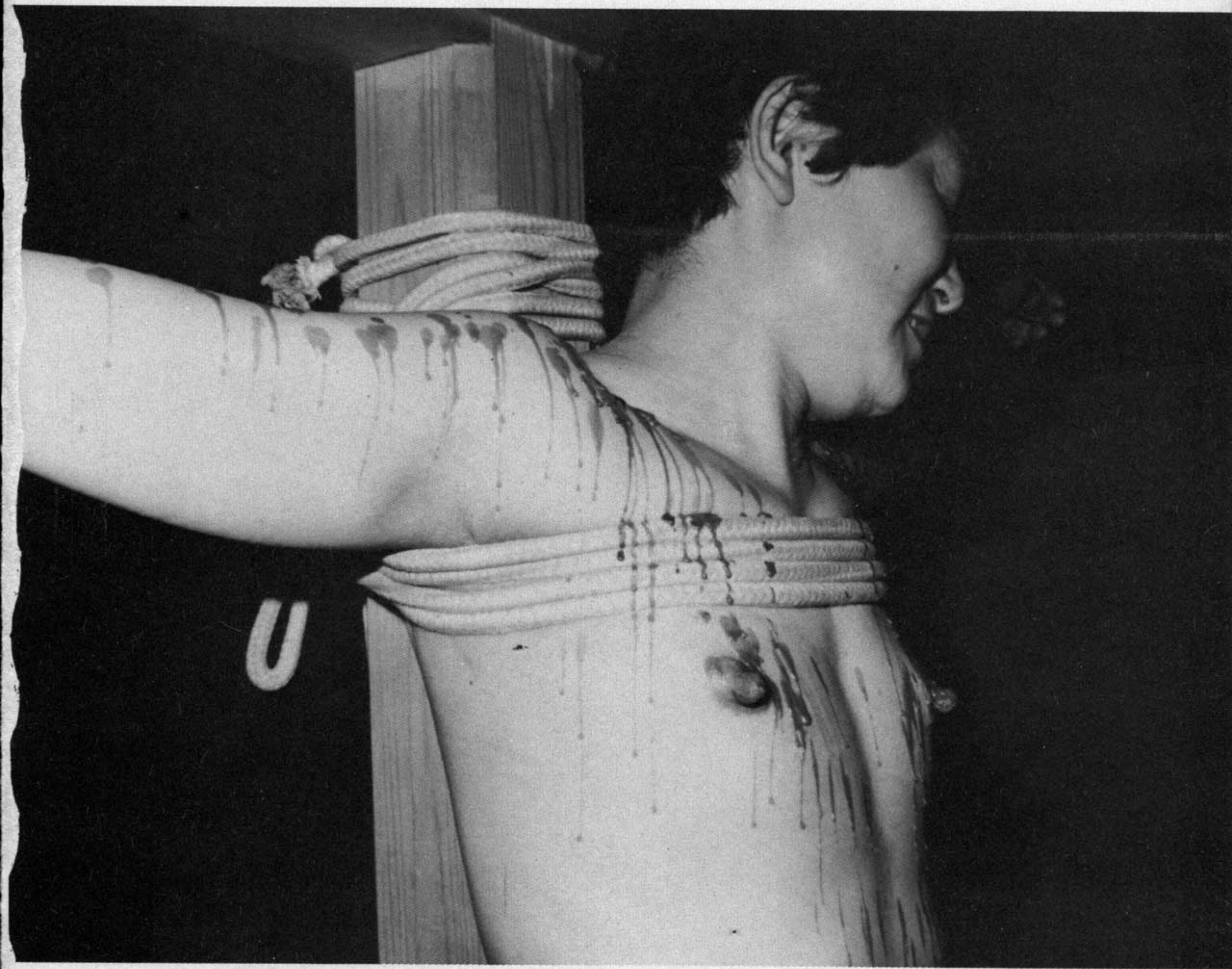
☎ 03-293-0741

渡部好美特写









○目次●

渡部好美特写記……………	浦戸宏	9
S Mプレイルールの構想……………	多貫欣	26
S M映画作りのことなど……………	浦戸宏	30
愛のかたち……………	川辺征也	44
役畜づとめに服す悦び……………	一の瀬真由美	46
タヌキンの遊戯具アイデア……………	多貫欣	71
私のS Mプレイテクニク③……………	ロマン派生	72
尿道自慰・異物挿入……………	睦月笛一郎	78
性奴記・其の一……………	鈴井是雄	83
メス豚M女初縛体験記……………	戸田重行	91
美しき乳房への弄玩惹起想……………	志摩紫光	99
まちの中のエコー……………		108
オーロラ……………		116
変収興起……………		118

◎写真頁

渡部好美特写……………	3
ロマン派生氏縛猟記録……………	55
雁のように北から来た夫人……………	59
一の瀬莊志・縛絆愛虐の記録……………	61
M女は肥えている方がいい……………	63
ペット・ミコ……………	66
谷川清フォト・レポート……………	67
S氏夫人の深夜露天責め……………	70

イラスト||らんまどう 東京C生

表紙のおんな 彼女の名は直子
彼女との出会いから六ヵ月ほど
M女として馴致した女性である
が、突如消息を絶ってしまった
六年前のことである。
(U)

読者の方々へのお願い

本誌『サン・アンド・ムーン』は大人のための愛を見つめる雑誌としての編集方針を掲げておりますが、**公刊誌として現今の法の下における自覚と自粛も同時に要求されています**つきましては右の点を御理解の上、今後とも御支援の程をお願い申し上げます。

尚、本誌に寄稿されました玉稿・フォト等を掲載させていただく場合にも、右の主旨によりまして一部加筆、修正させていただく場合がございますので合せて御理解、御了承くださるようお願い申し上げます。

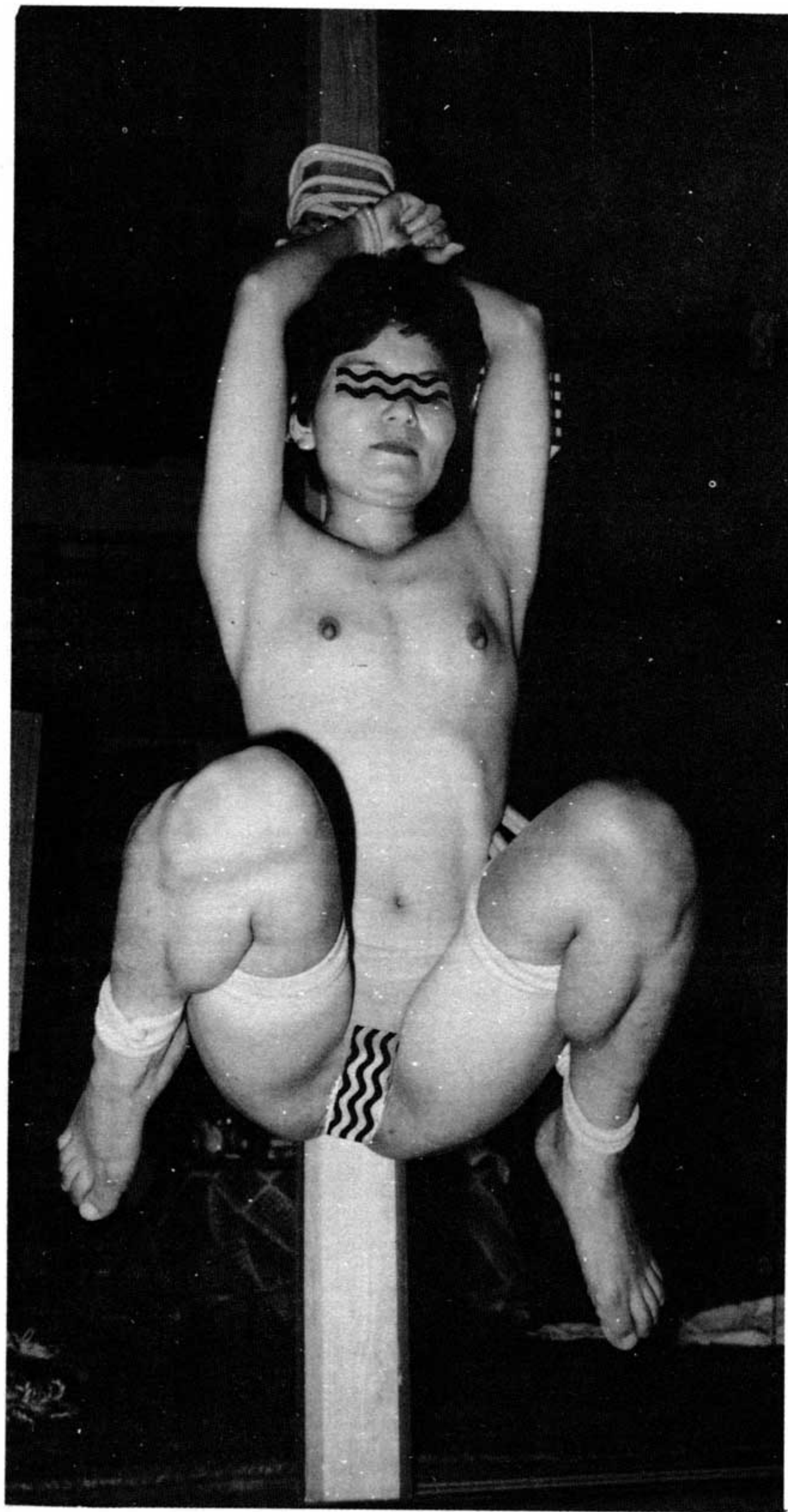
サン・アンド・ムーン

渡部好美特写記

蠟攻めに喜悅した渡部好美

カメラ
ロープと文

世田介
浦戸宏一



去る十一月二十二日、世田介一と私(浦戸)は新幹線で京都へ向かった。

朝九時に東京駅出発の予定であったが、そのためには七時半にはそれぞれ家を出る必要がある。世田も私もそんなに早く家を出て、ラッシュの国電に乗ることが普段は殆んどない。

一時間出発を遅らせ十時発にした。

それでも最小限の撮影機材を入れたバックと手さげ袋を手にした世田と、ロープや照明器具など入れた手さげ袋を両手に持つ私とは時差出勤のサラリーマンにもまれ、国電で先ずは東京駅へと向かわねばならなかった。

世田の手さげ袋には関西の同士たちへのお土産として『サン・アンド・ムーン』のバックナンバーが入っていた。

二人は新幹線の座席に一先ず落ち着き、列車が走り出すと、京都への思いをはせながらも、車内売りのホットコーヒーを求めた。

京都での約束の時間は午後二時である。私たちはそのために「こだま」を選んだ。十時に東京を立てば四時間、ちょうど午後二時頃着くのである。

この四時間は二人にとって格好の対談時間である。本誌の月刊化、一般書店販売へのル

ートを開くための雑誌作りに、毎日一度の電話連絡、二日に一度は顔を合せている仲ではあるが、これからの四時間は全く同一目的地に向かう密着した「特写行」の旅である。

普段でも顔を合せて談合を始めると時間を忘れてしまう。二人の間にビジネス上の話がそんなにあるわけではないが、話し始めると二人とも際限なく話題が出る。それらは本誌『サン・アンド・ムーン』の将来への展望であつたりお互いのS像、M像についてのテツガクであり映像ゲイジツツであり、女の話、男の話である。

「本誌の読者がどんな反応を示すか、われわれの話をテープに記録して置き、全頁それで埋めてしまおう」

という冗談とも本音とも判然としないことを時々口に出している。今後のことも含めて、こういう私たちに對して、挑戦状を叩きつけるような読者からの強烈なアタックが、実はほしいと常々二人は口に出している。

こういう本誌の弥次喜多コンビにとって、東海道をこだまで京へと上る四時間は退屈するどころか、喫茶店で日ごろ駄べっているのと同じである。

世田と私は奇しくも昭和一ケタ、同年の生

まれである。世田は若かりしころ、新劇の舞台演出家を志したのを振り出しに、種々、豊かな経歴の持ち主である。私はと言えば別項『SM映画作りのことなど』でも記したように、映画作りへの憧れ、詩人、小説家、すべて皆妄想としてユメ見つづけた後、第一次安保闘争の年(一九六〇)から、この世界に足を踏み入れた。

二人とも過去は様々だが、世田は自分の胸にあたためていた『サン・アンド・ムーン』を旗上げして、その四号から私を招いてくれたのである。

今回の京への特写行も、世田が自からの手で渡りをつけて、

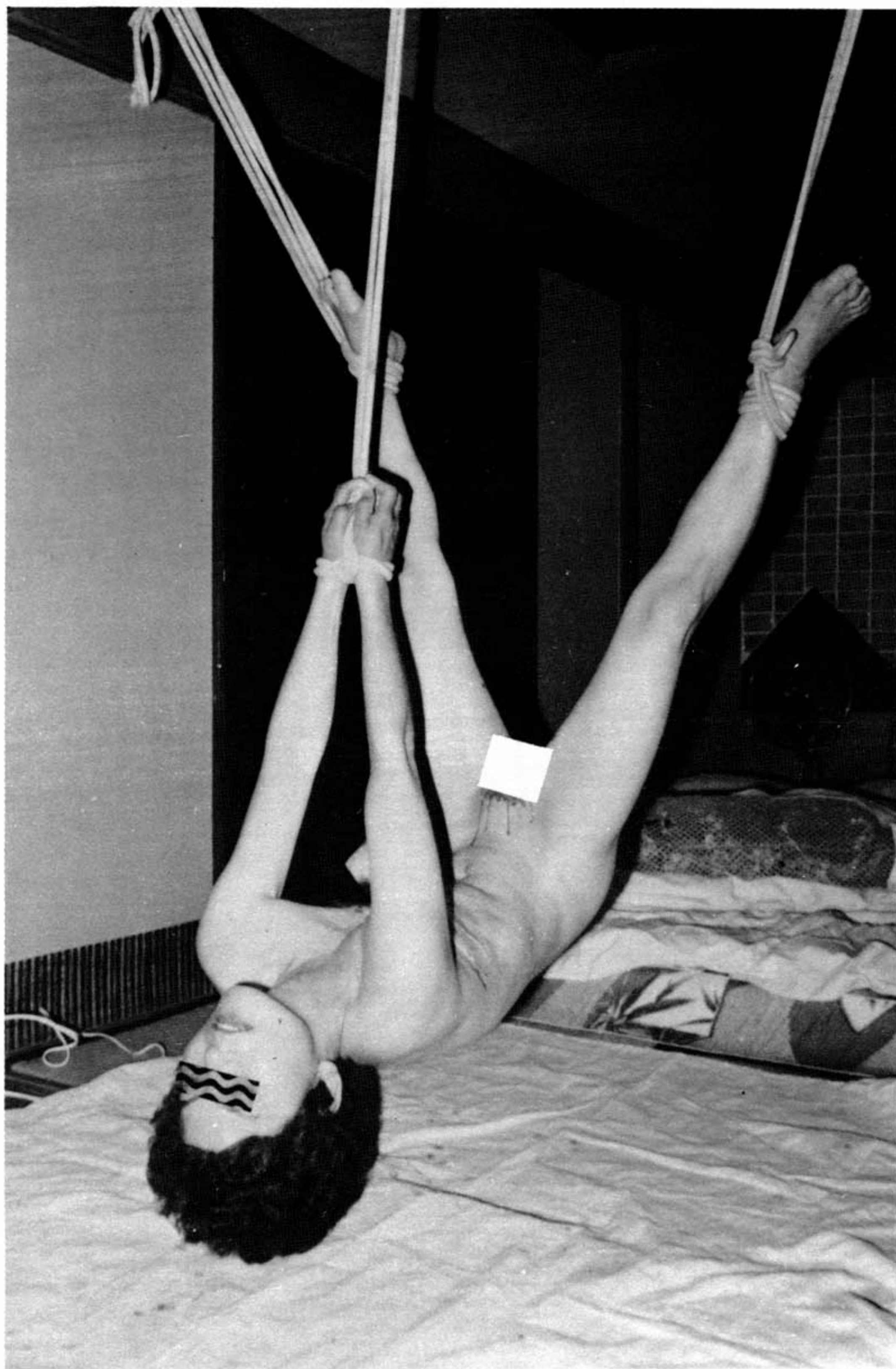
「おい、行くぞ。カメラはおれがやる。ロープはお前に任せるよ」

ということになったのである。

私は十数年来、この世界に片足を踏み入れてきたけれども、世田介一のような人間には出会えなかった。だから私は、いつも片足しか足を踏み入れる気持ちにしかねらず、もう片方の足は別の世界へ掛けていたのである。

人間は孤独である。だが、孤独であるだけに己れを理解してくれる人間を求めている。

私にとって世田介一とは、そういう一人であ



り、しかも、この世界にまるで古ダヌキのごとく昔から眠っていた男だったのである。

「おれはカメラのことしか考えておらん、お前さんは好きなように、コンテなり、ロープなり勝手にやるんだな」

事前にそんなことを世田は私に言っていたけれど、私も前もってコンテやロープ（縄の打ち方）を考えはしなかった。

（行けば、一枚や二枚、古ダヌキのカメラに収まるロープができるだろう）

と、今を盛りとばかり店頭を賑々しく飾っているSM誌の編集者が撮影を前にして、あれこれ考えるような作りごとは、このさい一切無用と腹をくくっていたのである。

新横浜駅で世田がシュウマイ弁当とお茶を二つ求めた。タマゴ類は一切口にしない男だが、シュウマイ弁当は好きだという。

「昔、演劇の仕事で汽車の旅に出るとき、駅弁とこのお茶、それを買うのが楽しみでね」と世田が昔を振り返る。

「このプラスチック製のお茶の入れ物、まったく面白くないな」

二人とも朝めし代りにシュウマイ弁当にハシをつけ、お茶を飲みながら、旅の昔ばなしが始まる。

「こいつも、昔は土器だったよ。しかも駅、駅によって器が少しづつ違うのだ。随分、家に持ち帰ってコレクションしたものだよ」

世田がこう言うのに私も同じ体験があり、話がわかる。

「SM誌だって同じよ、プラスチック製じゃ面白くない。手作りの土器でなくちゃあ」

と、弁当をつつき、プラスチックの器に入れた日本茶をすすり、言いたいことを口にする。

「この列車に、おれたちと全く同じ目的で西へ向かっている人間がいると思うかい？」

「そういう人間が、もし乗り合せているとしたら、日本はもともとと住みよい国だということは間違いないな」

「同感だね」

隣の野郎二人はよくしゃべる客だ、と隣席の乗客が私たちを見ているかも知れないが、二人の会話の中にSだのMだの、女だの、男だの、芝居だ、演劇だ、映画だ、日本だ、世界だと、話が宇宙にまで広がってしまうので、まともに耳にしていいたら、ついては来られまい。私が内心、ロープマンだと自称しているのに対して、世田介一は左の腕一本をエロストレーターだと自称している。

実は彼のエロストレーターの左腕を、あるとき某誌で眼をつけたときに、

（この、アイデアの持ち主に一度会ってみた）

と引かれたのである。

今のSM商業誌の編集部には、その寄稿家の住所や連絡先を問い合わせても、先ず教えてはもらえない。寄稿家の方で読者との直接の接触を避けている場合もあるが、そうでない場合でも先ず教えてはくれない。

（この、アイデアのタヌキに会ってみたい）
と、思っていた私も、半ばあきらめていたのだが、天は我れに味方したのか、全く偶然のチャンスから世田介一とめぐり会った。

「私は何事においても少数派でしてね」

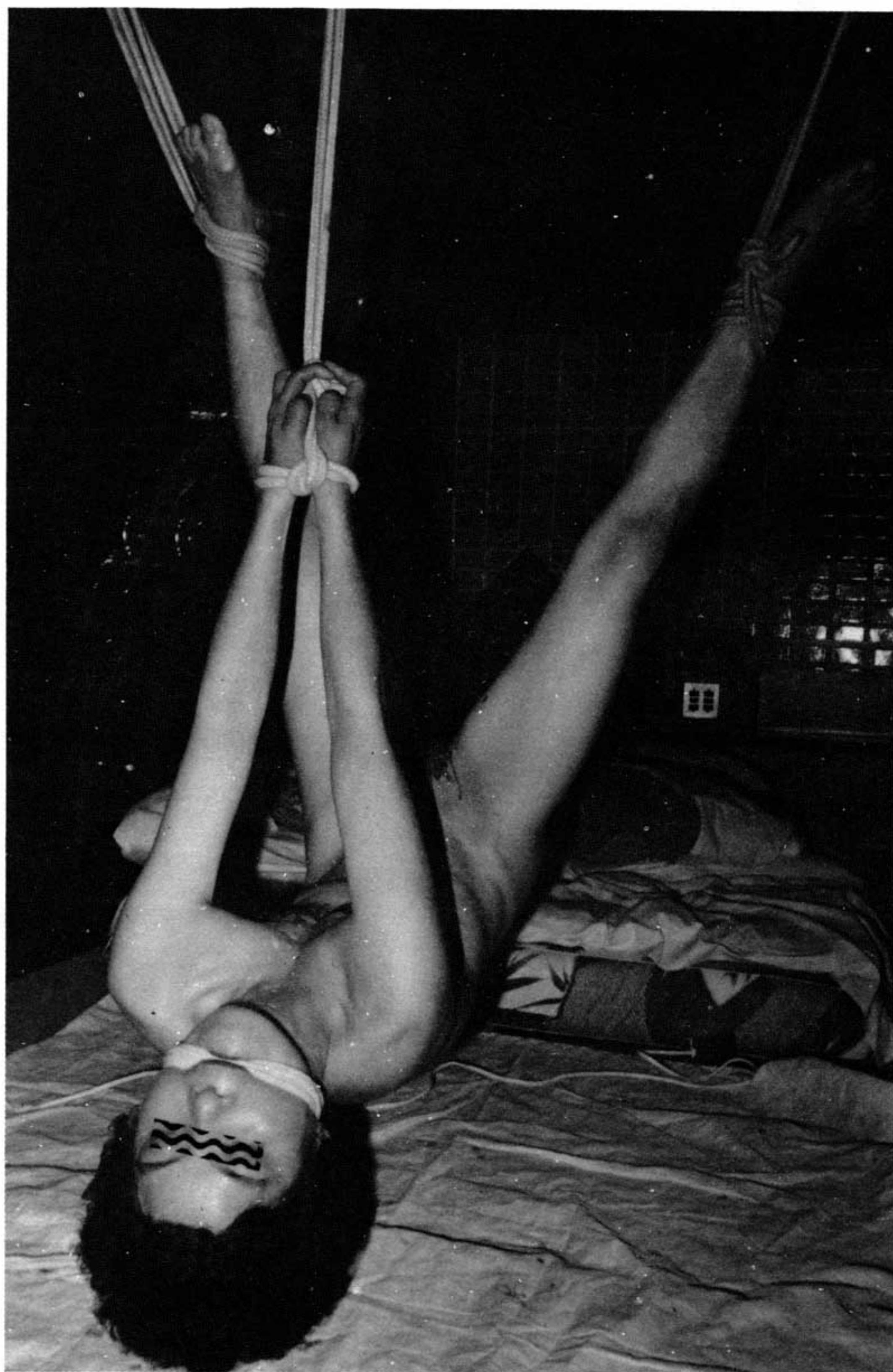
という挨拶が何よりも気に入った。

少数派がここにも一人いたのか、という思いを私はしみじみ噛みしめたものである。

「京へ行くなら大阪にも、そして神戸にも、足をのばそうじゃないか」

日月舎は一人二役どころか、三役も四役も演じなくては始まらない段階であり、チャンスは最大限に活かさねばならない。

「関西には関西の、関東にはは得難いものがある——」



私はそう考えていた。

一人での旅なら、三時間、四時間の新幹線の旅でさえも、退屈で、長すぎると思う今日だけれど、弥次喜多コンビの二人にとってはその間、退屈するどころか、先述したように喫茶店で駄べっている延長のようなものである。

「蠟燭攻めが好みらしい」

世田が話題を転じた。

「なるほど……」

私が相槌を打つ。

（一つ、梱包してしまった上で、蠟燭攻めに徹するか……）

ふと私は京のことを頭に浮かべる。かつて京都には三度ほど一人で旅したことがある。二度は維新前夜に活躍した脱藩藩士たちの史蹟探訪であった。ちょうどまる十年前、私は出版社の独営を始め、郷土史家の著作でそれまで絶版になっていたものを改訂復刊したことがある。その関係で百年前、京の都で活躍した浪士たちの跡を自分の眼で確かめるためである。

二月の小雪のちらつく寒い日であった。

祇園界隈を歩いているとき、葬式場にめぐり会った。そこで眼にした多勢のきれいどころの喪服姿がひどく印象に残り今でも臉に灼きついている。

三度のうちの一度は、子供を持つ女性との逢引きである。彼女は文学好きで私よりも本を読んでいた。その逢引きも、さる寒い冬の京であった。

ホテルで一夜を語り明すだけでもいい、と思っていたのだが、同じ部屋で枕を並べていると只では済まないのが男と女の仲である。京都の夜に至るまでは、殆んど電話でのデイトの繰返しだった。だから彼女がM性の持ち主であろうなどは、特に考えもしなかった。「吉行淳之介の小説に、女が縛られるのがありますわね」

彼女は何気なく口にしたのであろう。ちょうど、その小説が話題になった翌年ぐらいだったと思う。

「そうだな、そういう作品らしいね」

私は読んではいなかったけれど、それについて知っていた。

「縛って見ようか？」

と私もさりげなく言った。彼女は、いいとも、いやだとも返事はせず黙っていた。勿論

私にそんな好みがあるなど、彼女は知らないのだし、知らないからこそ、その小説のことを口に出したのであろう。

「大したことじゃない、ちょっと手を貸してみな」

私は自分の浴衣の腰紐を解くと、彼女の両腕をその紐の長さで可能な方法により、後ろ手に縛ってみた。

「足も縛って見よう」

今度は後ろ手に縛った彼女の寝巻の紐を解き蒲団の上に伏せにして両足首を一つに縛ると、その紐を後ろ手に縛っている両手首にからめ、逆海老固めにしたのである。

それでも彼女は一言も口では抵抗しないで、私が下の方に手をのばしたとき、初めて、

「いや、やめて……」

と小さくもらしたが、私の手の触れたところが既にひどく濡れているのを知り、私の方が逆にショックだった。そのために一夜だけの京の逢引きが二夜となった。彼女は四国に、私は東京、この距離的な問題と、お互にそれぞれの事情があつて、半年ほどの交際で別れざるを得なかった。

（彼女は、どうしているかな……）

久しく忘れていた過去に、ふと思いをはせ

ていた私は、

「おい、まもなく京都だぞ」

と時計を見る世田の言葉に眼が覚めた。

渡部光雄・好美御夫妻を記憶している読者は多いと思う。かつて奇譚クラブ誌上に御夫妻で登場されたこともあり、好美夫人は辻村隆氏のカメラ・ハントでも紹介されている。

その渡部好美夫人と会うために私たちは京都へやってきたのである。

中央改札口で——と好美夫人から出会いの場所を指定されていた。再び手荷物を下げた、余り風彩の上がらぬ弥次喜多コンビが、その改札口を出ると、既に夫人は私たちを待っていた。

「初めまして——」

と先ずは、挨拶を交したけれども初対面だという気がしない。共通の世界をお互に持っているということであろうか。

京都へ着いたら、どこへ行くかなど、はっきりした場所のメドがあったわけではない。

「このさい、場所など、どうでもいいや。要は渡部夫人に会うことだ」

こういう気持だったのである。



タクシー乗場で大型の車を選び、世田が運転手の横に、夫人と私が後席に腰をおろす。

「北へ、やってください」

愛想のよくない老運転手が無言でスタートする。

私はすぐ隣に坐っているのが、渡部好美だということに、次第に気持のたかぶりを覚えた。京都に着くまでの列車の中では覚えのない心のたかぶりである。

渡部好美に縄を打つ、それを目前にしての興奮ばかりではない。とにかく現実、こうして会うことができた、という実感である。

「京都は、やはり空気がきれいですね」

私はそばの夫人にささやいた。それも実感である。好天気ではないが、雲間から薄日がもれる、そんな日であった。

ホテル街も静かである。サービス精神の悪いこと甚しい老運転手は、私たち三人連れをうさん臭い眼で見ているのがわかる。適当な当りをつけて、界隈をタクシーでぐるぐるひと廻りして近くで降りた。

「うちは御同伴専用ですから、三人では……」
最初のホテルで先ず断わられてしまう。

「よし、国鉄か公社指定のホテルへ行こう」
世田の言葉で今度は目先を変える。

「宿泊されるお客さま以外、時間貸しはいたしておりません」

と、ここでも受けつけてくれない。だが、一般の宿泊客相手のホテルだけに応対に出た女中は私たちを見て、

「もし、御同伴専用の所でよろしければ、この先にK荘がございます、そちらを訪ねられてはいかがでしょう」

と親切である。

「ありがとうございます」

世田の古狸が深々と頭を下げ、教えられたK荘へ両手に荷物を一杯かかえ、白昼のホテル街を行く。訪ねたK荘では、

「三人様でもよろしいですけど、お蒲団は一組しかございません。それに三人様分の料金をいただきますが」

「けっこうですよ。蒲団なんかどうでもいいのです。私たちは取材という商談ですから」

ということ、三度目にして辿りついたK荘であった。

案内された部屋に入って、先ず私の眼に止まったのは寝室と居間との間仕切りの襖を取りはずすと、一本の柱が自由自在に使えるということであった。そして鴨居に手をかけてみると、丈夫である。

(申し分ない、いい宿だ)

最近のラブホテルの作りが、派手な部屋作りやベッドばかりに主眼が置かれていて、ロープマンには役立たないのが多いのを見ると、このK荘の作りがひどく気に入った。

寝室に一組の蒲団が敷いてあるほかには余分なものがない。それに防音設備にも気を使っているようで、先ずは申し分ない。

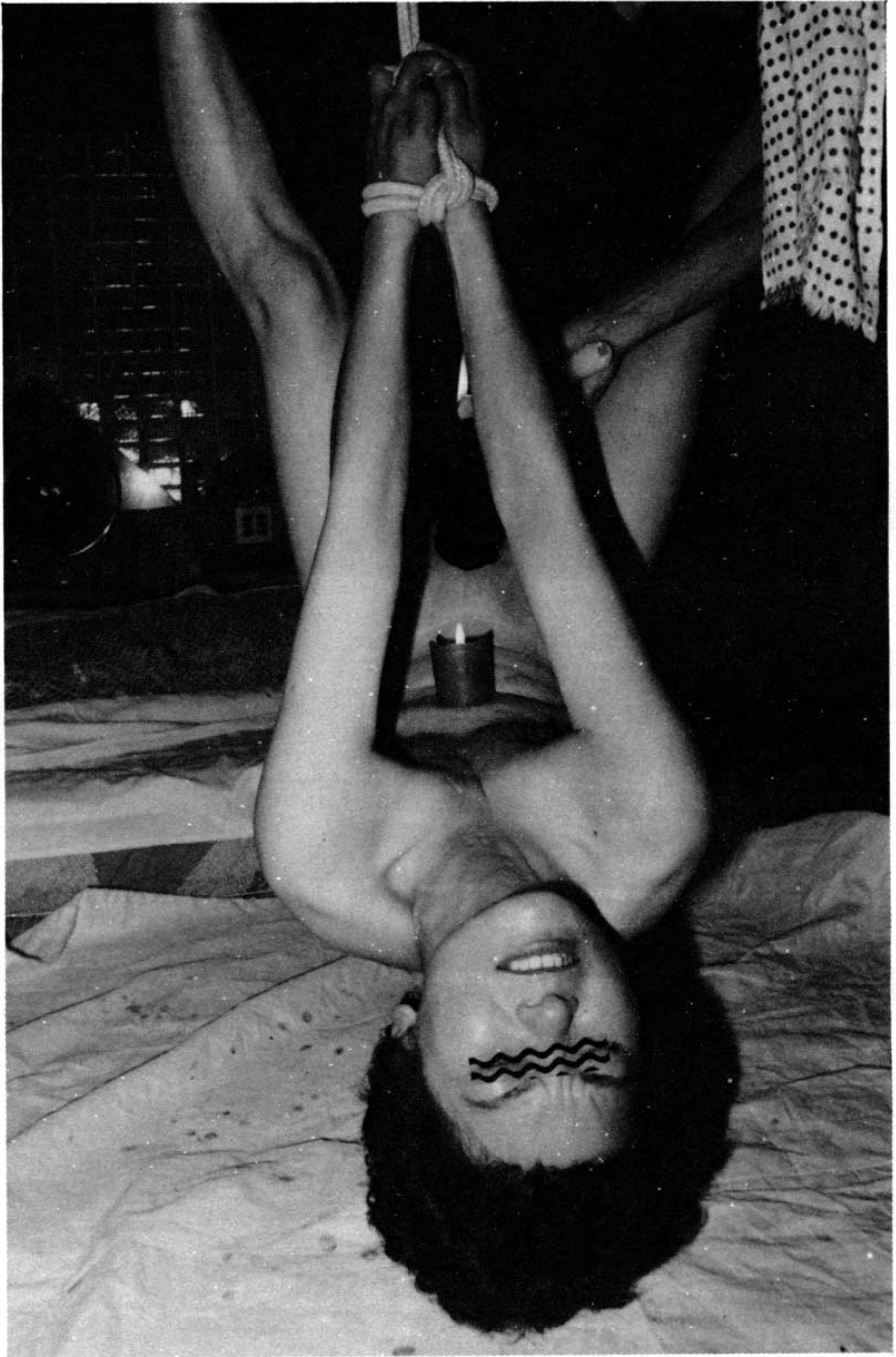
K荘に旅装を解いて三十分ほど、お茶を飲みながら渡部夫人と話す。先ず私たちがたずねたのは少し健康を害されているという御主人・光雄氏の近況だった。

「おかげさまで、このごろはずっとよくなりました」

という夫人の言葉に安心する。

「御主人にもお出いただいて、四人なら、いっそう私たちの望みも果たされるのですが、それは今後のおつき合いの中で、ぜひ実現したいと思います。お二人で上京される場合があったといいし、また私たちの方からこちらへやってきてもいいのです。とにかく末長くおつきあいください」

「ありがとうございます。渡部もこういう機会を与えてくださったことを本当によろこんでおります」



好美夫人の言葉は静かである。

特写時間は四時間ないし五時間という約束である。家庭を持つ夫人だし、私たちもその辺は心得ていた。

「じゃ、始めましょう」

と世田の言葉に、

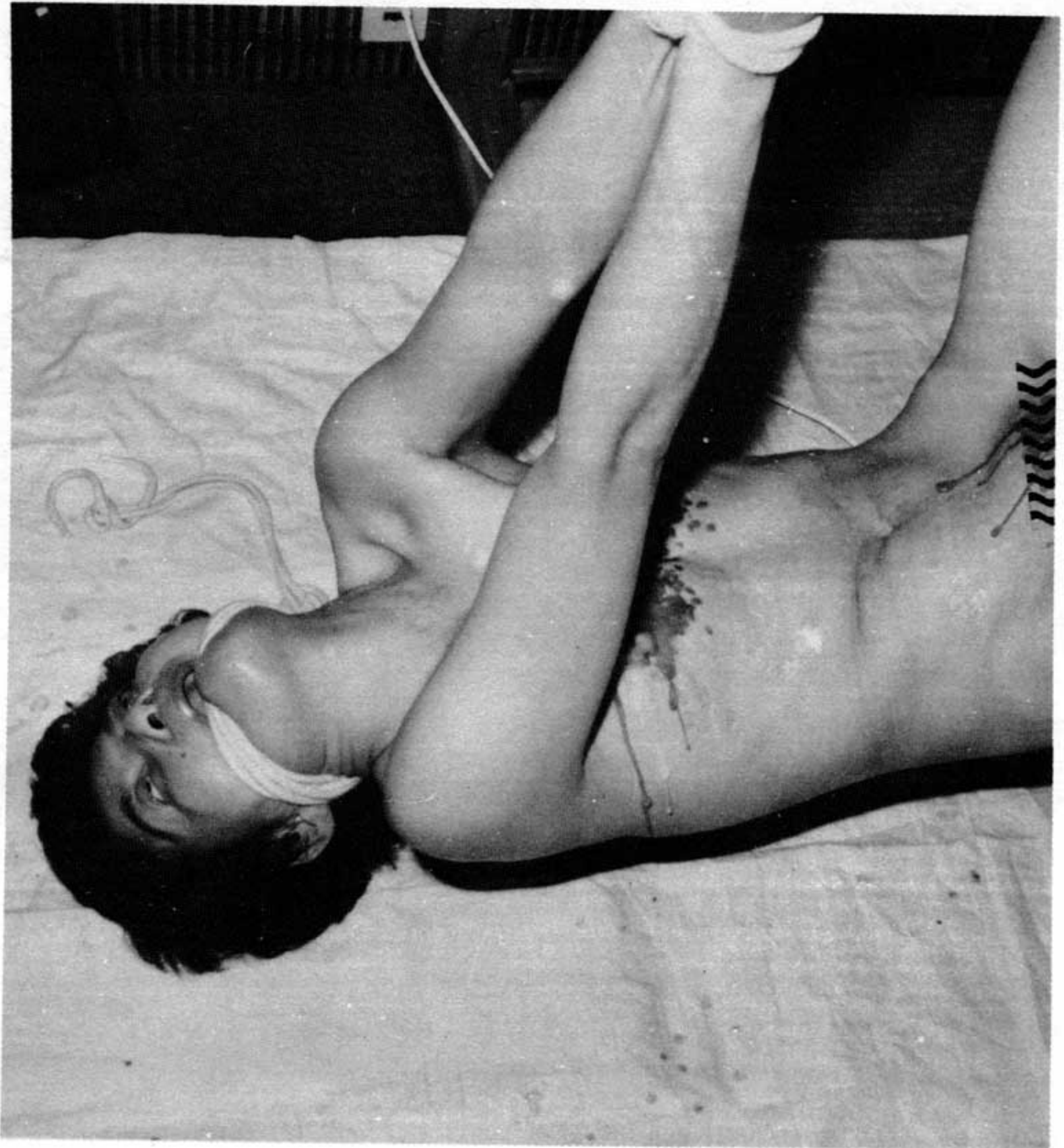
「お風呂に入って参ります」

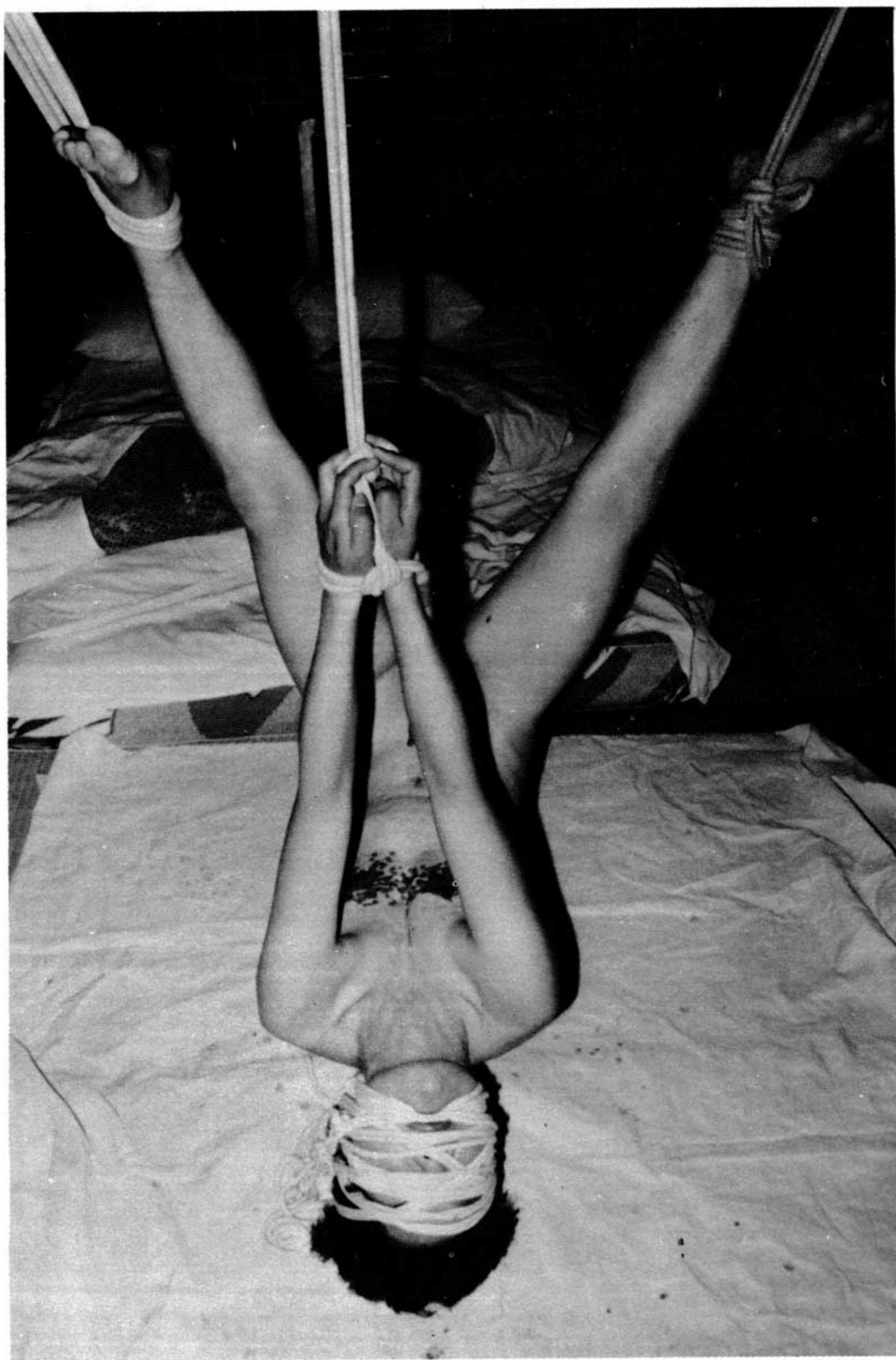
と夫人が浴室へ入る。その間、世田は撮影機材の点検と準備、私はロープを取り出し、襖など取りはずしてしまう。

プレイの体験者ではなくても、女は男を前にして肌を磨く、体を洗っておく、これは一つのたしなみである。流石にその辺について渡部夫人は気持がいい。あるとき私は、ギャラを払って事をおこなったとき、女がいきなり眼の前で裸になろうとしたので、

「おい、先に風呂ぐらい入って肌をきれいにせんかい！」

と、怒鳴りつけたことがある。これは私が潔癖性から言ったのではない。このごろの若い女は、くだらない衣服や表面上の飾りには金と手をかけるけれども、体の手入れという女本来のたしなみや心掛けはゼロである。そういう女どもを平気にさせている今日の若い男どもがだらしなしい、腹立たしい。





いかなる場合も、女は男のためにあるものというのが、わたしの持論の一つだ。

私たちが準備を完了すると、渡部夫人が風呂から上がってきたのは、殆んど同時であった。

「おれは勝手にシャッターを押すだけだ。好きなようにやりな」

これが世田の態度である。お互に相手のやることに口出しするなど、ずっと昔に通り返してしまった、そういう二人である。

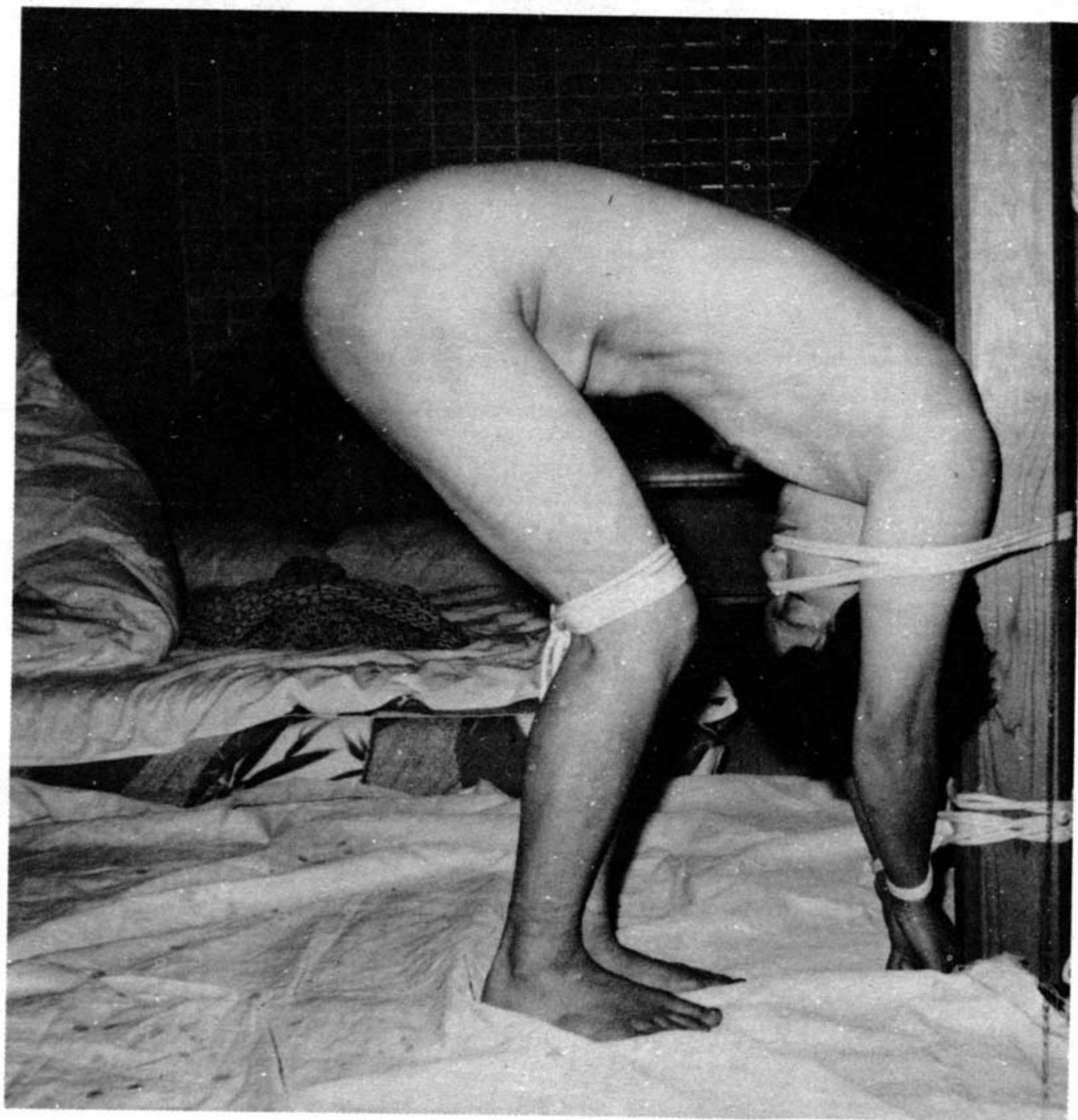
（渡部好美を梱包してしまいたい）

私の今日のロープは、これしか、念頭になかった。あとは成りゆき任せである。

それに蠟燭が好みだと耳にしていたので、梱包してしまった彼女を蠟攻めにする、これで攻めのバリエーションをつける、このようなコンテを咄嗟に描いたのである。

渡部好美・特写記——この稿をここまで記して、一体、私はこのあと、どのように読者に伝えればよいか、ふと考え込んでしまう。

従来、奇ク誌上はじめ、また今日の商業SM誌上に、カメラ・ハント、カメラ・ルポ、撮影同行記、等々、この種のルポ風の記事を眼にしている。



それらの殆んどが、辻村隆氏などの先駆者の手法を踏まえたものである。しかも、体験者なら、どこまでが本場で、どこからが勝手な作り話であるか、おおよそ見当のつく誇張や嘘（フィクション）までを堂々と記している。

このことは長年奇ク誌上に連載されていた辻村氏のカメラ・ハントでも、私はしばしば感じた。だが辻村氏独特の筆力によって読者はその世界にはめ込まれていたし、また部分的に虚構が入り混っけていても、それを一々気

にする必要などないだろう。

読者は勝手に読み、勝手に想像力を働かせて自己満足にひたればよいのであり、その素材さえ提供すれば十分なのかも知れない。私もそう考えてみる。

そうだとすると、この後のことは読者の勝手な（自由な）想像力に任せっぱなしで、私が渡部好美に縄を打ち、世田介一が勝手に撮りまくった特写フォトを誌上に提示するだけでもよいのである。

本来、カメラ・ハントなどのタイトルでルポするものは、そのいきさつまでを記せば、それで十分なのである。ロープマンを内心自稱している私は、殊にそう思う。

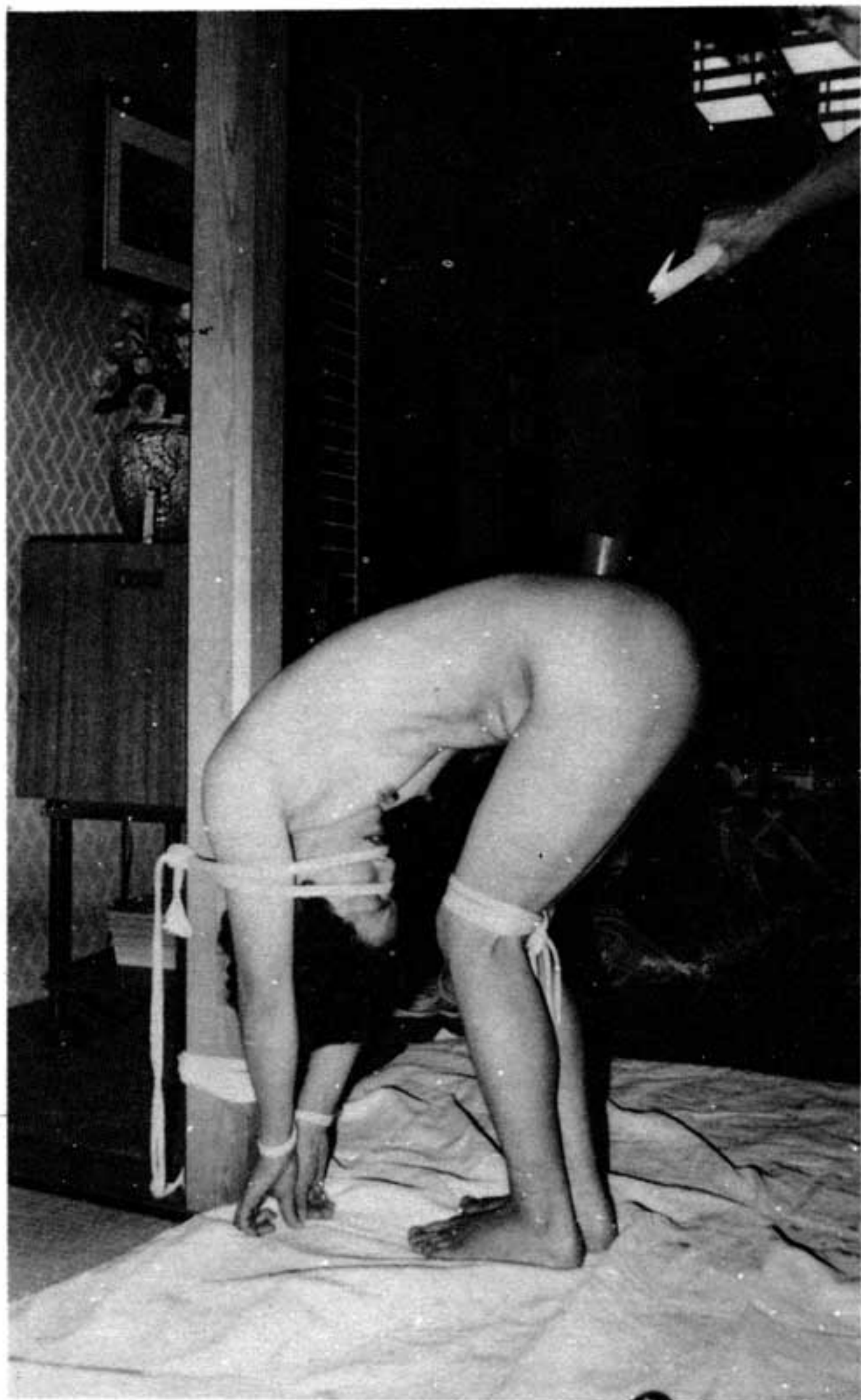
（縄の打ち方を見て、勝手に想像してくれ、それ以上のことを、事こまかに報告する必要性など持たぬ）

これが率直な心情である。

ただ一つ、日本の今日の下況下では誌上公開するフォトに制約がある。その制約を勝手に破棄して発禁処分を受けるぐらいなら、最初から『サン・アンド・ムーン』など創刊しなければよいのであり、公刊誌としてつづける以上、制約は制約として受けとめて、その中での可能性を模索するしかない。

（制約の中での可能性は何か？）

それはロープ（縄の打ち方）によるしかない、その試行として私は、私なりに縄の打ち方と蠟攻めを渡部好美にこころみしたのである。このこころみに対して、渡部好美がどのような反応を見せたか、読者に伝えるとすればこれしかないのである。



一般的な例を上げるならば、男と女がホテ

ルの一室に入るとする。そこで、彼らが何を始めるか、他者にとって想像できることは記す必要はない、それを記すとすれば駄足である、と私は考える。

「何をしたか」の想像の範囲内でわからない陰の部分提示するとすれば「どうであったか」ということであろう。

世田介一がカメラを、私がロープを、そして渡部好美は知る人ぞ知る——こういう三人が、ほぼ密室にひとしいホテルに入ったのであるから、大方の読者は、誌上公開のフォトを見れば「何をしたか」は殆んど想像がついてしまうわけである。もし想像のつかない読者がいるとすれば、その方は余程、想像力に乏しい方だということになる。

一つの結果（結論）から先に述べるなら、本号で誌上公開する『渡部好美特写フォト』は、特写のほぼ三分の一、その中から紙幅の範囲で選んだ一部分である。残りの三分の二は、次号からの誌上公開となる。

これら三分の仕分けはほぼ「縄の打ち方」により分類したものである。（巻頭の口絵頁に収録したものは、次号からの予告をも含めている）



あくまでロープで押し通す、という特写の狙いは、実際に渡部好美を眼の前にしても私の気持ちに変化はなかった。

それどころか、彼女を目前にして、ロープ一本で、という思いが改めてつり、事の進行中にも、その事後においても、これが間違っていないかったという結果を知ることができた。

ここで、渡部好美に対してどういうロープや蠟攻めをこころみたか、それを順序立てて記すことは余り意味がないと考えるので記さない。

その代り、この特写を通じて、かつて奇譚クラブ誌上に何度か紹介された渡部好美が、一体どういうM女だったか、私の第一印象は、

忍耐の女——この一言に尽きるのである。M女として要求される貴重な素質の一つは、この忍耐である。

感情を胸の奥深くしまいこんで、むやみやたらに声を上げない。そのため初対面である私や世田は、彼女のそういう態度から、最初、ロープの打ち方が単なる苦痛でしかないのではないか、という受け取り方をした。だから、「きついのか？」

と全く愚問を口にしたものだ。

「いいえ、きつくはありません」

と別に苦痛を辛抱しているような口ぶりではない。

「きついか、あるいは感じるか、遠慮する必要はありません、ストレートに言っ下さっていいですよ」

「大丈夫です」

と答える。

「じゃ、拒否の言葉がない限り、私たちは遠慮せず、押し通しますよ」

「はい」

と、はっきり答えるのである。

情感を胸の奥深くしまい込み、むやみやたらと声を上げない彼女の態度から、私たちは

日本人の家庭環境、家屋構造にまで思いをはせざるを得ない。

事実、渡部夫人も、

「家でのプレイは、隣り近所に、気を使うこ



とがございます」

と、もらしていた。このことは本誌五号で取り上げた『玉木夫妻』の場合にも感じられたことである。

しかし、それにしても渡部好美は、自然に身についた習性か、あるいは初対面である私たちに対する遠慮があるにしても、声を上げて吠え、狂い悶えるというタイプのM女ではないように受け取れた。

人間、声を発するということは刺激に対する忍耐（その情感）を外に向かって発散してしまうことである。言いかえれば（SMプレイにおいては）攻めからの逃避ということにもなる。

ところが渡部好美は、いたずらに声を発せず、攻めのもたらす刺激や情感を全身の感覚でもろに受け止め、胸の奥深くしまい込む、極言すれば俗に声を上げてひーひー喚き散らすM女タイプではなく、静かに嚙り泣く、そういうタイプのM女だという印象である。（これには夫・渡部光雄氏の馴致によるところも多分にあるものと思われる）

さて、女に縄を打つ私の嗜好の一つとして



四肢を折り曲げて全身を一箇の荷物のごとく梱包してしまう縄掛けがある。

本誌巻頭の口絵写真のトップがその一例であり、完全に梱包した形で鴨居などに吊る。四肢を一つに縛って吊るのを「括り猿」と言うなら、さしずめ口絵のトップは「狸縛り」「狸吊り」ということになろうか。これが好みである。

この「狸吊り」の状態で、M女の忍耐の限界がくるまで、じっとタバコでも吸って待っているのは結構楽しいのである。鳥籠の小鳥の囀りを眺めるように、私自身は直接手を下さなくても、ロープが勝手に女を鳴かせてくれる、それが楽しみの要因になるのである。

余談だが、去る日ロマン派生氏にお目にか

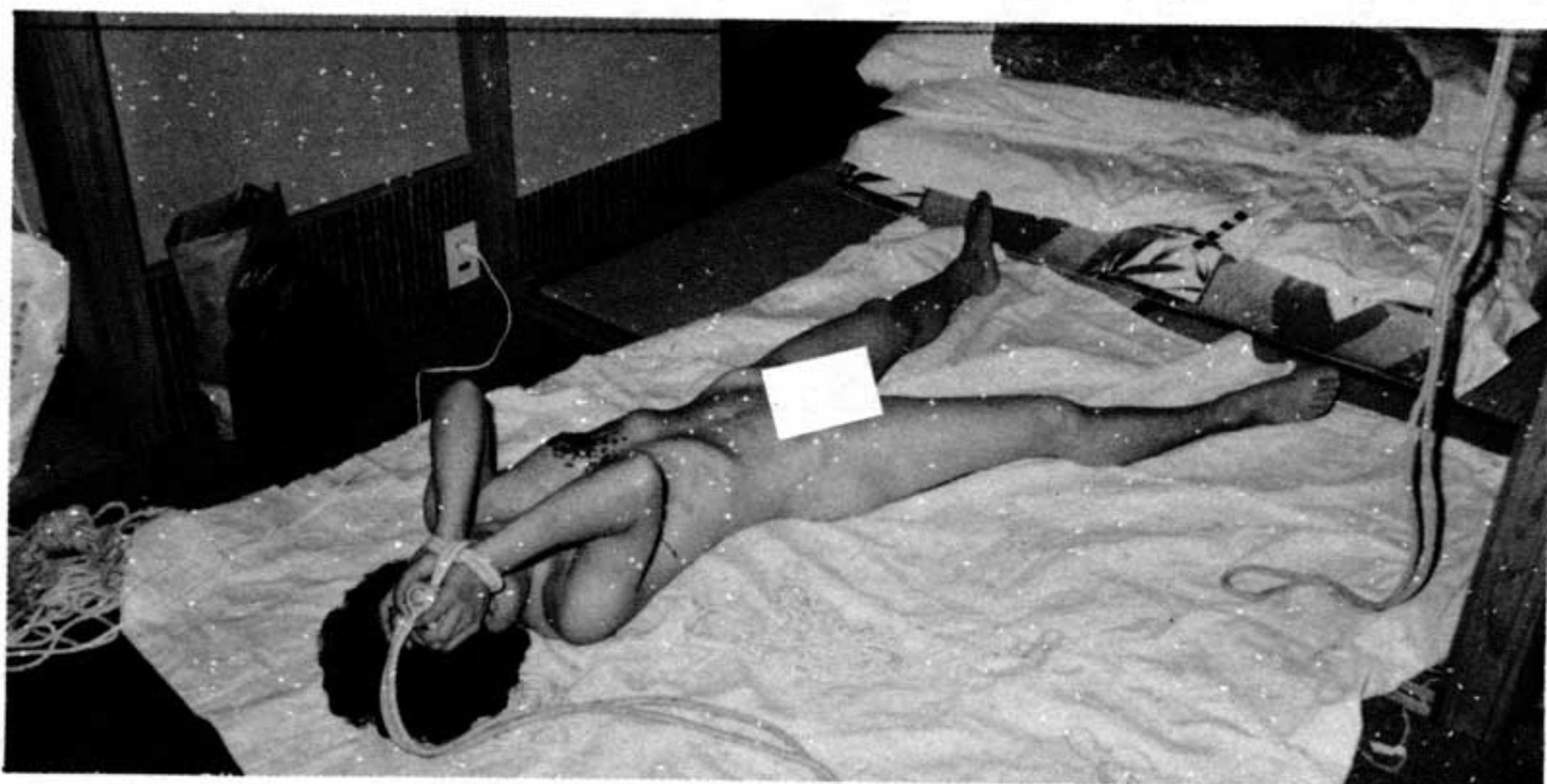
かる機会があった。そのときロマン氏が、「ロープ・フェチですよ」

と言われたのを耳にして、私も同好の意を強くした。商業SM誌でしきりに使われている麻縄というのは嫌いである。あれは演出写真としては役に立つ（素人受けする）ことはあっても、現実のロープ・プレイには無用のロープである。

「おい、たまには洗剤で洗って、白くしてはどうだい」

世田介一からそう言われるまでもなく、だいぶ手垢がついてはいるけれど、女の肌に割とびったり吸いつくロープであり、縄目が蛇の腹に見えて、女にはやさしい縄である。

事後、渡部好美に、



「感触がよかったわ」

と、言われて、

「多分、このロープと同じ持ち主は私以外にはいないでしょう」

と内心悦に入り、自慢を口にしたものだ。

とにかく午後三時頃から七時すぎまで、私たちはわずかな休憩時間を置いたけれども、殆んど通して渡部好美との初の手合せに熱中できたのである。

お互に快い疲労が、これからの結びつきを暗示した。そして今後も、本誌『サン・アンド・ムーン』としての渡部好美の特写はつづけていきたいし、彼女自身も、夫の渡部光雄氏もこれに快く応じてくれる約束が交されているのである。

K荘を出て私たちは夜の京の市街をタクシーで京都駅に向かった。その途中、後席のすぐ私の横に坐っている渡部夫人に眼をやると、頭を傾けるようにして瞼を閉じていた。

私たちのころみが、彼女にとってどうであったか、それを直接口に出して訊くことは世田も私もあえてしなかった。

「江川は、どこが指名しました？」

私はタクシーの運転手に話しかけた。

「クラウンですよ」

と若い運転手は、行きのタクシーの老運転手に比べると実に愛想がよい。そのタクシーを下りて、

「どうも、ありがとうございました」

と丁ねいに頭を下げて私たちとは別の改札口へと小走りに向かう渡部好美の後姿を見送りつつ、世田と私は、女から一人の家庭を持つ主婦に戻った実に淑やかな渡部夫人の映像が瞼に灼きつくのであった。

〈付記〉

『渡部好美特写記』の第一回は、一応ここまでにとどめ、次回は別の角度から、渡部光雄氏の談話をまじえ、特写フォトと共に紹介したい。

シナゴーク

SYNAGOGUE

S・M Playroom の構想

SMプレイルームそのものの設置計画はSUN&MOONの読者の1人で、地方都市在住者である。

内部計画 多貫 欣

完成外観想定図

この万能形遊戯台についてはいずれ詳しく図示する予定

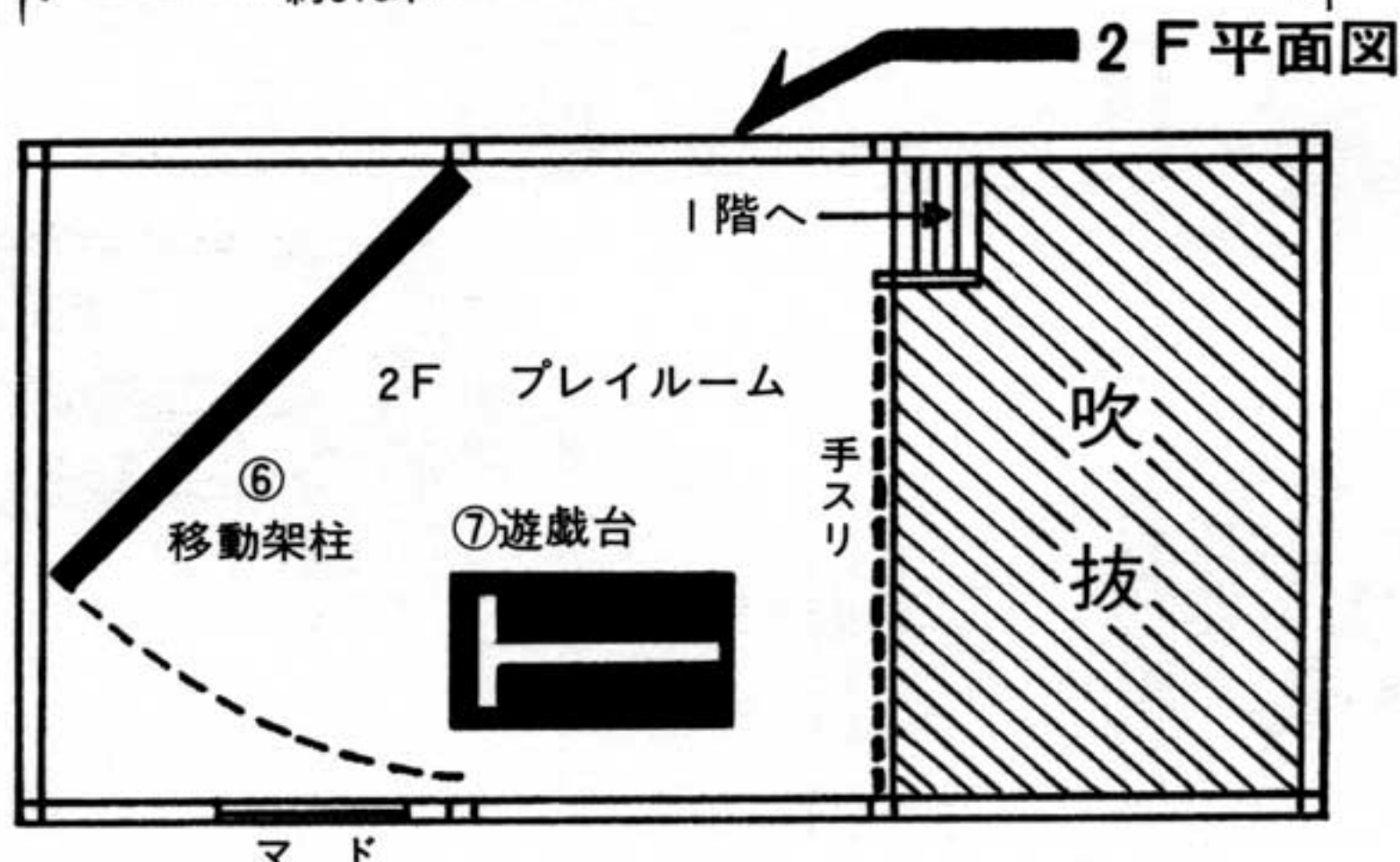
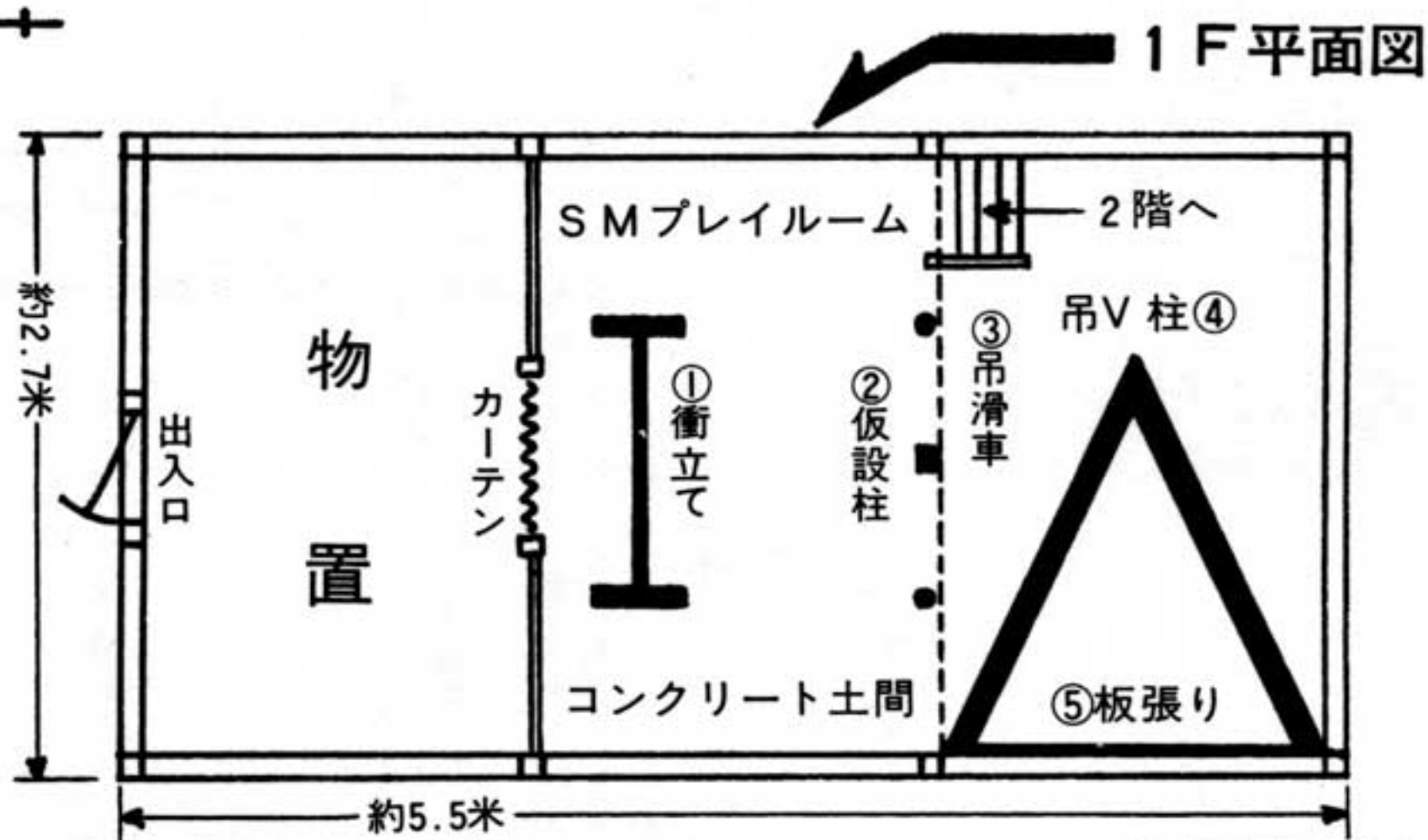
⑦

SYNAGOGUE とは、ユダヤ教での「教会」を言う。SMプレイは宗教とかかわりをもつものではないが、異教徒や無神論者にとって「教会」は狂妄な空間意識を感じさせる場所であり、それがプレイ仲間に「隠語的共通表示」にもなりやすく感じられる。

〔A〕

〔B〕 SM専用室概略図

〈3間×9尺〉 畳9帖分の広さ



物置は“擬装”のためのスペースと思われる。物置からプレイ室へはカーテンの開閉によっているが、そこに移動もできる重厚なツイタテ①をおくことにしたい。これも次頁で示すように一種のプレイ具である。②はU氏の原図にはなかった部分で、2階の虚弱を補助し、且つ単独でもプレイ具（応用）となるものとする。③は仮設柱を中心とした場合、左右等間隔となる位置で180cm位はなれているとよい。④吊V柱は上方へ吊った場合を示し、普段は次頁の「想定図」の如く扱う。⑤は任意の位置にカスガイ・釘などを打ち込んで、束縛体型を変化させ放置してみる壁面となるためのもの。

U氏は実証するために数葉の写真を送って来た。特にご自慢とする点は吹抜があること。M女を逆さ吊りして2mも高く引き上げられる予想にときめいている。

建築中の記録写真

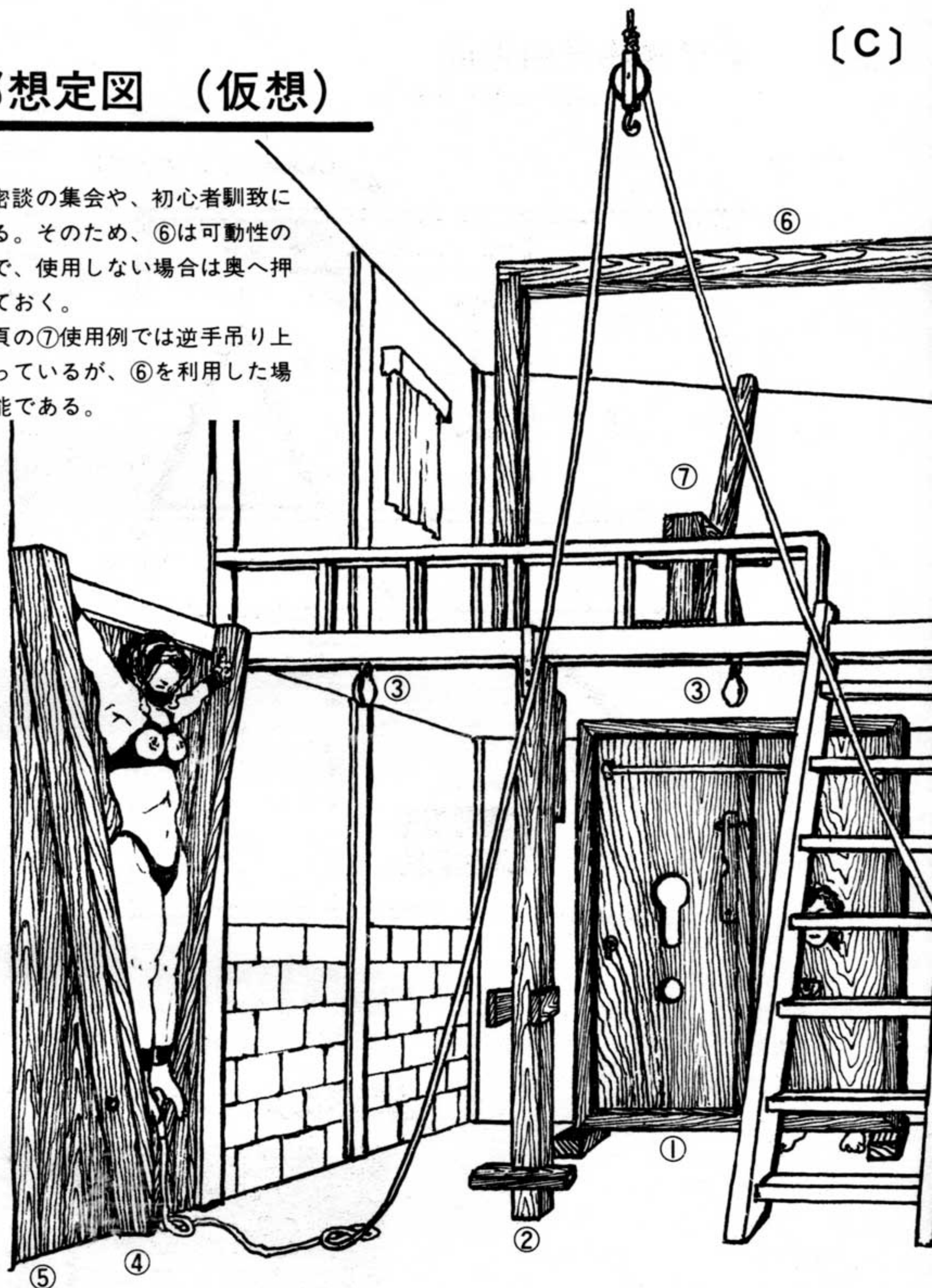


左の上下階平面図中スミ太線及び黒塗り部分は内部計画による多貫アイデアである。設置者のU氏からはプレイ室の概略が知らされU氏の希望で内部（遊戯具を中心とした）の充実について相談を受けたにすぎない。従ってSMプレイ具その他は建物の完成時には室内に設置済みとまではいくまいが、器用な人なので追い追い手造りして完備すると思われる。

内部想定図（仮想）

2階は密談の集会や、初心者馴致に使われる。そのため、⑥は可動性の門型柱で、使用しない場合は奥へ押しやしておく。

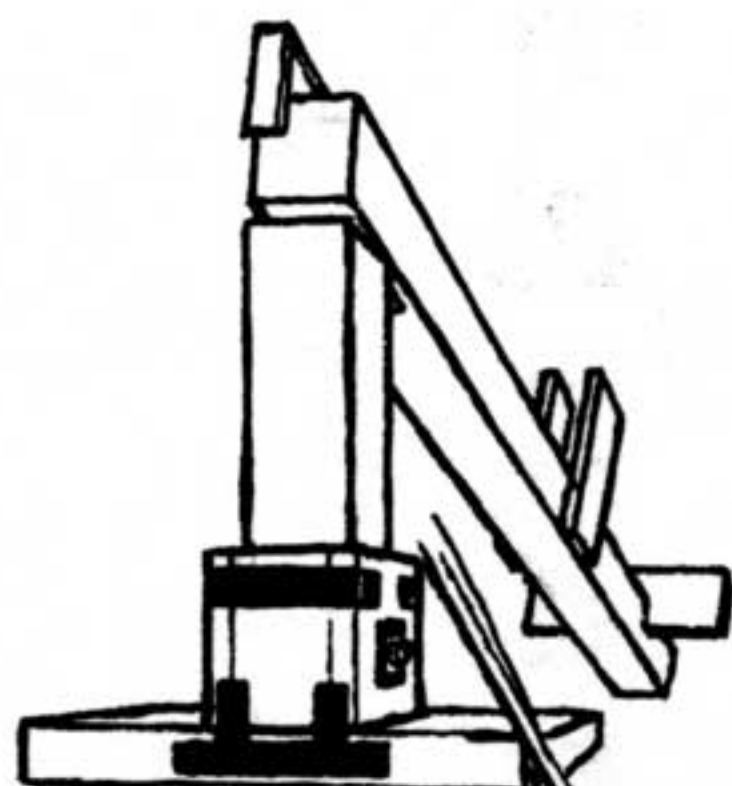
〔A〕頁の⑦使用例では逆手吊り上げになっているが、⑥を利用した場合に可能である。



①の衝立ては物置部分をU氏が本当に必要と考え設置すればもっと手前に置かれたように描かなければならない。この絵では1階も広く使った方がいいと考えてU氏にすすめるため仮想のものとしてある。なお、木質感を出すため加筆（木目あるもの）したのがアイデア具である。②と④は〔D〕頁の応用例のように組み合わせることができ、④は被虐者を固定したまま中空へ引き上げることもできるものでなければ面白くない。

②と④を組合わしてプレイ空間を変えてみる

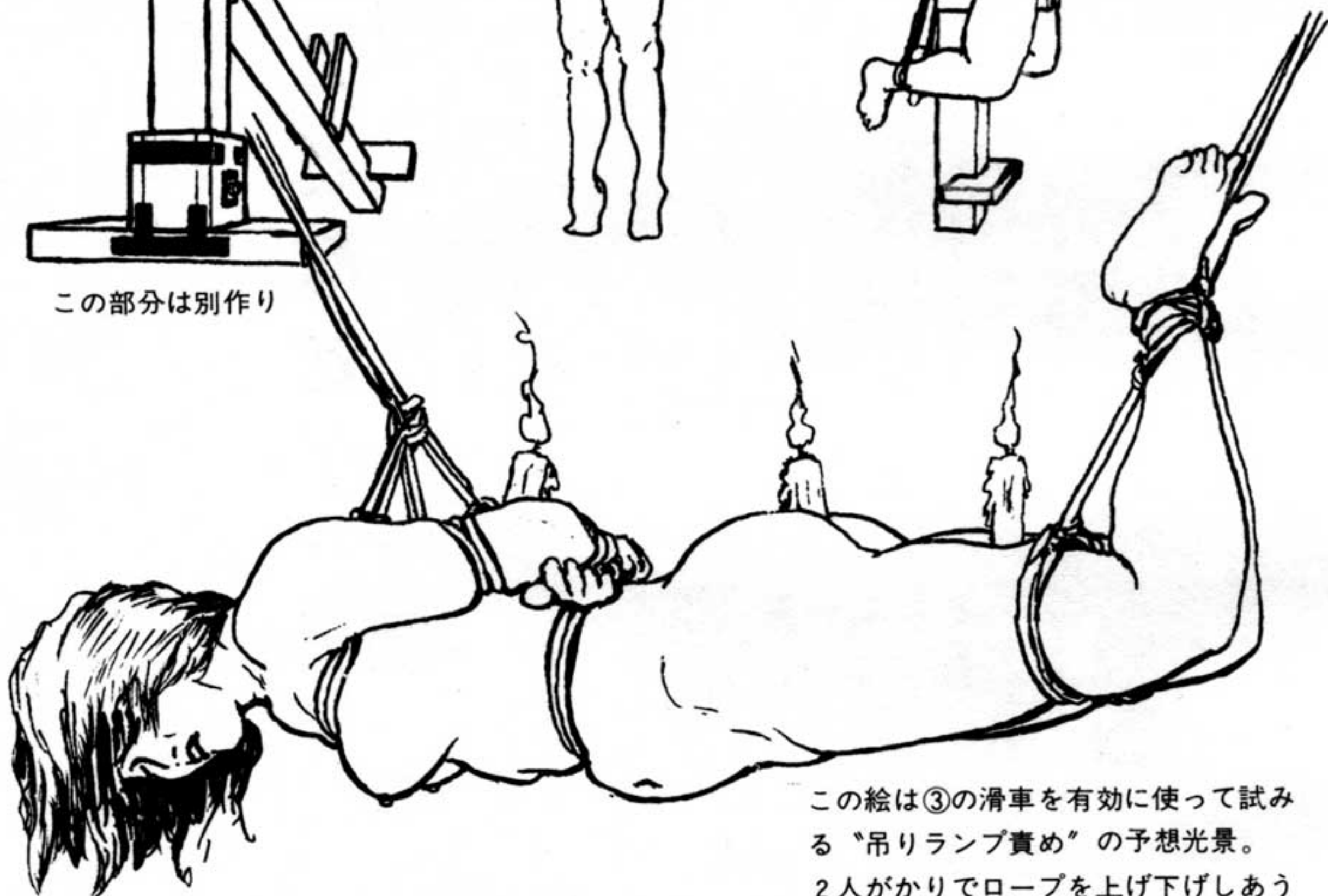
下のカットは②を単独のプレイ具として使用する場合のアイデアで、短柱を傾斜拘束柱の脚として応用する。



この部分は別作り

②の背後に折り曲がる短柱は組みあわせ時には支持補強として役立つ。

②の仮設柱は股間空隙ができる腕木があって、拘束は柱背負い型でも抱きつき型でもいいのである。



この「内部計画」で不足しているものは「用便対策器具」「収檻具（おり）」「水責めを兼ねる洗体設備」が主なる欠落部分である。また密会者側から云えるものとして換気・冷暖房がある。

この絵は③の滑車を有効に使って試みる「吊りランプ責め」の予想光景。2人がかりでロープを上げ下げしあうと熱蠟の流れも変わり、M女呻吟も変化するものと思う。

注 プレイ具個々の寸法割出し、使用材はすべてU氏の判断に任した。

日活映画『貴婦人・縛り壺』から

SM映画作りのことなど

浦 戸 宏

かつて私は映画監督になりたい、という憧れとも希望とも判然としないユメを抱いたことがある。昭和二十四、五年（高校時代）のころである。

当時の日本映画は敗戦の中から立ち上がり映画史上にその名を残す今井正の『また逢う日まで』『青い山脈』あるいは黒沢明の『酔いどれ天使』につづく『野良犬』など、授業をさぼって映画館通いをした私の記憶に、これらの印象的なシーンが今でも残っている。

こういう名画と言われるもののほかに今一つ印象に残っているのは、題名は忘れてしまったけれどもラブシーンで初めてキスを演じて話題をまいた映画がある。私の記憶に誤り

がなければ松竹映画の女優・幾野道子がキス第一号女優である。そのとき彼女は唇に前バリをはりつけて、直かに相手の唇と接触しないようにキスを演じたというエピソードを耳にした記憶もある。

今日では全く信じられぬことだが、昭和二十年八月の敗戦を転期として米軍の進駐に始まり日本における性風俗が急速に変化していくなかで、その数年間は日本映画における男女の愛情の表現が、根づよく前戦のモラルに拘束されていたのである。

つまり街頭ではパンパンと呼ばれる街娼が半ば公認の形でたむろし、公園ではアベックが昼夜を問わず抱擁するなどの性風俗が見ら

れたにもかかわらず、映画における愛の表現はきわめてつつましく、演ずる女優たちにも映画でのキスシーンが、即ち公衆の面前でのそれに等しいものとさえ受けとられていたのである。

これを二十数年後、三十年後と言っても過言ではない今日の、日本映画におけるラブシーン（愛情または性愛の表現）の描写に對比して見ると、当時とは比較にならぬほど変貌を遂げている。

だが、今日の映画における愛や性愛の表現描写が現象的には確かに大胆になり、二十数年前には考えられなかった男と女のベッドシーンが映画館で見られ、それを演ずる女優た

ちも役者の仕事として余り抵抗なく演じられているけれども、完全に性愛の表現が自由に解放されているわけではない。

だから変貌を遂げているのは現象的な側面だけであり、その本質的な部分、男と女の性愛は公衆の面前でおこなうべきものではないという、古くからの暗黙の規制と拘束は厳然と尾を引いているのである。

したがって日本映画の性愛描写について言えば、それを極言すれば、二十数年前も今日も本質的には何らの進歩、変貌はなく、現象的に変っているにすぎぬ、と言っても過言ではない。つまり二十数年前、女優と男優の、唇と唇を合わせ（真似）るキス・シーンが、今日では前バリを付けた女優と男優が演じるベッドシーンに変わったにすぎない、ということである。

コンテの夢

かつて映画監督になりたい、という憧れを抱いた私は、それから二十数年後に実際に映画製作のスタッフの一員として参加する機会に恵まれた。

その最初が三年前（四十九年）五月、日活ロマンポルノである。小沼勝監督『花と蛇』

であった。これは団鬼六氏の原作から題名を借用したもので映画のストーリーは原作とは別の形であった。

このとき某氏を通じて私は小沼監督に紹介された。スタッフの一員としての私の役割は、緊縛指導ということである。実はこの緊縛指導という言葉は私は余り好きではない。女を縛ることなど誰にだってできる、手先が器用で多少の経験をつめば誰にだって可能だ、それを指導するなどとはおこがましい、これが私の持論である。（緊縛指導という言葉に抵抗を覚える私は、かつてロープマンと自称した）

ロマンポルノは既に何本か撮っていた小沼氏もSMポルノは『花と蛇』が初めて手がける作品だった。調布の撮影所に小沼氏をたずね初対面で得た印象は、話のわかる人だ、ということだった。そして「もの」をつくる上での考え方や思想に共感するところがあり、氏も私もロマンチストであるということ共通している。

手渡された台本を見て、縛りの場面のコンテを私の方で考えることになった。映画製作は監督を中心に多数のスタッフが参画する仕事である。映画作りについては、以前にも、いわゆるピンク映画時代に参加したことがあ

る。あのパートカラー（部分的にカラー）時代の映画で、一本一時間余の上映時間、二百万円足らずの予算と、一週間から十日ぐらいで撮影したピンク映画時代である。セットなど使う余裕はなく、すべてロケーションで作っていた。このときは完全な雑用係りで、スタッフなどと言えるものではなかった。

こういうピンク映画時代の体験はあったけれども、本格的な映画製作にスタッフとして参加したのは小沼氏の『花と蛇』が初めてである。セットも十分に設営されており、縛りのシーンを撮影するにも、ピンク映画時代の比ではない。

『花と蛇』の主演女優は谷ナオミである。彼女とはそれ以前に何度か顔を合せる機会があった。今日一部のマスコミは彼女をさして「SMの女王」と呼ぶけれども、この「SMの女王」というキャッチフレーズは（後述するごとく）少し見当ちがいな用語ではないかという気がする。

ところで映画の台本はストーリーの展開を主として書かれており、人物の設定や性格付けには不備な点がある。それでも決定稿とあれば私などが口ばしを入れる余地はない。とにかく『花と蛇』では小沼監督の演出に添っ

て、縛りのコンテ、責め場の演技など、私なりに考えたこと、気がついたことを提言した。小沼氏もその一つ一つに耳を傾けてくれ演出上に汲み入れてくれた。

この『花と蛇』の撮影で印象に残っているシーンは、タイトルバックに使用されたカットだ。谷ナオミの両眼を細目のロープで縛ってしまったことである。これは私の監督への提言であった。M女調教という調教部屋の設営である。そこで両手を左右にひろげて吊り責めにし、細目の黒く染めたロープで眼帯代りに両眼を塞ぎ縛ってしまった。眼を縛られることに谷ナオミは不満を示したけれども監督がOKを出してしまったのでどうにもならなかった。

おそらく女優の両眼をロープで縛ったのはこの映画が初めてではなかったろうか。そして、『花と蛇』の試写会とき、団鬼六氏も見えていて、試写のあと撮影所の食堂で小沼氏などと数人でコーヒーを飲んでいるとき、「女優の眼を縛ってしまうなど見当ちがいではないか、役者は眼で芝居するんだよ」

と団氏などから、お小言をちょうだいしたのだが、私は内心「してやったり」という気持だった。つまり役者が眼で芝居する、とい

うことを私も知らないわけではない。眼は口ほどにものを言う、の格言を持ち出すまでもなく、演技の上で眼での演技が大切なこととは十分承知している。それでもなおかつ、谷ナオミの両眼を細目の黒く染めたロープで緊縛してしまったことを私は今でも失敗であったとは思わない。

私は『花と蛇』で本格的な映画作りのスタッフとして初めて参画したのだが、縛りや責め場のシーンについては、内心いくつか不満足に終わった箇所があり、SMポルノを初めて演出した小沼監督も、同様に不満足な箇所があったようだけれども、

「所詮、多数のスタッフ、キャストでの映画作りは完全に満足できるものにはなりませんよ」という小沼氏の言葉にうなずきしかなかった。だが公開されてみると興業的には成功だったようである。そして同じ年の秋、九月に再び小沼氏は『生簀夫人』を手がけることになった。主演女優はやはり前回と同じで谷ナオミである。

これには原作はなく『花と蛇』の台本を担当した田中陽造氏の台本である。この『生簀夫人』の台本を考えるに当って、小沼氏の要請で私も事前に相談を受け、先の『花と蛇』

の体験やらSM一般について、日頃の考えなどを台本作家の田中氏をまじえ三人で話したことがある。

こうして書き上げられた『生簀夫人』に、再度私もスタッフの一人として参加した。前回はロープも自前のものだったけれども、今度は撮影所の方で担当のスタッフにお願いすることにした。

『生簀夫人』での撮影では、谷ナオミの劇団に当時アルバイトで出演していた新人東てる美のデビューが印象に残っている。彼女の映画出演はこれが最初である。ハイティーンの彼女には全体に硬さを感じたけれども、新鮮さがあった。

この東てる美が浣腸攻めになるシーンは映画の一つのヤマ場だった。この時の撮影はまる一日スタジオでおこなわれた。私の考えた浣腸攻めのコンテは、高手小手に縛ったロープを天井の梁に結びつける。そのさい彼女を中腰のまま上体を折り、両脚を開かせ臀部を突き出すようなポーズをとらせる。開股した両脚が閉じられないように太い青竹を用いて両脚の関節の所で縛る。その青竹の中ほどから別のロープを結びつけて首にまわし、中腰のまま背筋がのばせぬよう固定してしまう。



「合意の上ではなく、厭がる娘にむりやり浣腸する、そういう設定でのコンテを考えてください」

と言う小沼監督の要望をもとに考えたのがこのようなコンテである。そして撮影にかかると前に助監督の好青年をモデルとして、東てる美の代りに先ずこのテストをこころみた。

コンテどおりのポーズを設定してから、私が背後から浣腸器を手に持ち、両脚を開股したまま固定している青竹に先ず片足をかけて浣腸器を当てる。それを厭がり尻を左右に振って助監督はもぐくけれど、青竹にかけた足に私が力を入れて踏みつけると、彼の動きがにぶり悲鳴を上げた。

「よし、それならいい」

監督のOKで、いよいよ東てる美がコンテどおりのポーズに拘束され、浣腸攻めの撮影にとりかかった。だか彼女がズブの新人でもあり、テストと本番の繰り返し、それにこのシーンがドラマのヤマ場でもあったためにカメラの角度を変えてカット割りも多くなる。しかも新人東てる美から、監督も何とか望みに近い演技を引き出そうとして時間を要し、まる一日を費した。こうして浣腸シーンが撮了したとき、東てる美は実際に浣腸攻めを受

けた以上に、ぐったりとして痛々しいほどであった。

この『生贅夫人』を私は友人を伴い新宿の映画館で観客の一人として見た。同行した友人は映画の終了と同時に「浣腸のシーンが圧巻だったよ」ともらした。それは小沼氏の音の入れ方も画面を盛り上げていると思ったし、実際、氏は映像作りと同時に音楽、効果の選択にも優れた手腕を持っていると感心するのである。

裸馬の背

こうして前二作を小沼氏の下で協力させてもらったが、それ以来、彼とはしばらくごぶさたしていた。ただ小沼氏が夢野久作の原作による『少女地獄』の撮影に入る前、他の用件でたまたま会ってはいた。

今度、彼のSMポルノとしては三作目『貴婦人・縛り壺』を手がけることになり、その撮影に入る二日前に突然私は小沼氏から要請を受けた。主演は谷ナオミということもそのとき耳にした。私の方にも『サン・アンド・ムーン』の進行予定が控えていたので世田介一氏にも了解をとり、小沼氏のお手伝いをすることにした。

台本は団鬼六氏の原作をもとに書かれたということだが、私は原作を読んでいない。手渡された台本に眼を通して、あれこれ考える時間的な余裕はなかった。谷ナオミが舞台に出る関係で、すべて彼女のスケジュールに合わせて会社の方で撮影日程を組んだ、ということである。

谷ナオミにはファンがおり、三年前の『花と蛇』以来、彼女は小沼氏以外の監督でその間にも何本かのSMポルノを主演しており、営業的にも安定した観客を呼んでいるということである。それには私もうなずける。たしかに、いわゆるピンク映画時代から今日まで活躍しているポルノ女優は、もう谷ナオミ以外に名を知らない。彼女の役者根性はしたたかである。それに人柄も以前に比べて変ってきたようだ。

今度の『貴婦人・縛り壺』で、前二作にない、私の関心事は裸馬にまたがせて引き廻しにした上で、磔にする、という台本であったし、この点を小沼氏もいろいろと苦心されているようであった。

映画の物語は昭和初期、大地主のもとへ借金で抵当に嫁入りした谷ナオミが、昔の恋人を忘れられないでいる。また地主の作男に若

者がいて、その若者と谷ナオミの姦通に嫉妬した地主の親父が二人を裸馬にまたがせて引き廻すという設定、このロケーションが五日市線の宮の平という無人駅で下車したさる場所で行われた。

私が最初に参加したのは、このロケーションからである。何しろ谷ナオミと若者を背中合せに縛って馬を走らせるのだから、落馬という危険が伴う。そうかと言って、ごまかしの縛りでは「絵」としては面白くない。乗馬用の馬が馬運車で運ばれており、宮の平の無人駅で下りた私は助監督斎藤君の迎えで現場に辿りついた。

前回もそうであったけれど、ロケーションの場合は現場を眼で確かめないと、セットの場合とちがってコンテのイメージが掴めないことがある。本来ならロケハンにも参加して、いろいろ案を練ることだって可能だけれど、そういう事前の余裕はなく、ピンク映画時代とはまた異った時間的な制約の下でロマンポルノも作られている。

幸いに現場に到達してみると前作『生贅夫人』でロケーションにやってきた石切り場であり、思いきりたずなを長くして馬を引き廻し、走らせるには格好の場所である。



カメラの森勝氏も前作『生贄夫人』の時と同じで顔なじみであった。

「やあー」

という挨拶で、午後一時すぎからの予定の、裸馬の背に谷ナオミと若者を背合せにまたがせ、引き廻しの撮影にとりかかることになった。乗馬として調教されているけれど、実際に馬のたづなをやつるのは年輩の作男（高橋明さん）である。高橋明さんは『花と蛇』のとき、彼がM女調教の役をやった。

「大丈夫ですか？」

馬運車で運んできた馬主（トレーナー）に監督が念を押す。

「裸馬では危険ですよ、二人を背中合せに縛るのは。馬に腹帯を付けるんですね」

と馬主が助言する。私はそばでそれを耳にしつつ、

（やはり、裸馬の背に谷ナオミと若者を背中合せに連縛するのは無理だな……）

と、いささか残念な気がした。だがそれとは別に、前バリは付けていても、裸馬の背に、全裸の谷ナオミをまたがせる、これで馬を並足以上の速さで引き廻せば、馬上で彼女は縛られているだけに、演技ではない彼女の姿が、絵になり、その表情が画面に収まる、そんな

イメージに期待をかけたのである。私は中学時代に田舎で裸馬にまたがり、乗り廻した体験がある。昔の農家には馬がいたし、戦争中は軍馬に供用ということもあって牛より馬が多かった。

裸馬にまたがるのはむずかしい。だが馬の体温が直かに自分の股間に伝わり、人馬一体という快感を味わうことができる。しかし、馬の背で股間を圧迫されるのはかなり応えるし、馬は利口である。自分の背にまたがっている人間を察知して、初心者だとなめてかかる。

「あたし、乗馬の経験はあるのよ」

と谷ナオミは言うけれど、それは鞍をつけた乗馬である。後手に縛られ、若者と背中合せという連縛では最初から無理な話で、それに背中合せになる若者は、役者としてもズブの新人の上に馬を初めてまたぐというのだ。

「仕方ないですね。馬に腹帯を付け、背中合せに連縛しているポーズに変更しましょう」

ということになった。そして二人を背中合せにまたがせ、馬に付けた腹帯を掴むことでテストを繰返し、本番に入っただが、その撮影中に谷ナオミが馬の並足に体のバランスを失って落馬したときは、スタッフ一同が一

瞬はっとした。幸いにケガはしなかったけれども、もし二人を背中合せで連縛していたなら、大事に至ったであろう。

この裸馬にまたがせて引き廻しの撮影は三時間余かかり、腹帯は付けたけれども、前バリだけの谷ナオミの股間をひどく攻める結果となったのは、その翌日からの撮影で、彼女の痛々しい告白を聞くまでもなかった。

音を上げながらも撮影に入る彼女のしたたかな役者根性は立派だ。

「あたしは本当はMではなくSよ」

と冗談か本音か、それを口にするけれども、私はそう言う彼女にうらみなど、あるわけではなく、かえって仕事の上で親しくなればなるほど、彼女には気の毒だけれども、いじめてみたい、いたずらしてみたい、そんな気持ちになるのである。

それは映画などというものは、所詮、作りモノであり、芝居にすぎない、そうマニアやSM愛好者の眼には映るかも知れないけれども、作りモノであり芝居であればこそ、なおのこと、女優谷ナオミから、作りモノの演技や芝居ではなく、自然ににじみ出る責めの姿（表情）を画面に引き出すことはできないものと、その一つの期待を裸馬の背中に、私の

思いをはせていたのである。

幻の逆さ磔

裸馬の背にまたがせ引き廻しの次は、磔という台本になっていた。

磔についてのマニアがいる。私なども絵としては好きである。だがその磔のポーズには、いろいろと注文がついてくる。

小沼監督から台本を手渡された時、

「磔は両手を斜めに吊り上げるように、十字架の柱がいいですね」

と提言したところ、

「すでにキの字型の磔柱を作っています」

とすることであった。だから十字架の柱を改めて作るわけにはいかなかったのである。それは残念だなと私は内心考えたけれど、とにかく谷ナオミのスケジュールで撮影が組まれており、私が話を受けたのは先述したように撮影に入る二日前、台本を受け取ったのはその前日であったために、既に作られているものでやるしかなかった。

磔のシーンは八王子の奥の、某地主の屋敷内でのロケーションである。セットではないので写実的な画面が取り入れられるし、カメ

ラマンの森さんの手腕も申し分ない。

その地主の屋敷の庭にトラックで運び込んだ「キの字」型の礎柱が二本建てられたとき、私はふと、

(あれに谷ナオミを逆さ礎にしてみたい……)

という妄想がひらめいた。監督との事前の打合せは「キの字」の礎柱から考えて、それにかなり長い時間の撮影になるし、カット数も多くなるので、大の字のポーズで礎にしようと言うことであつた。

その監督との事前の打合せを無視して私の勝手な一存で、谷ナオミを逆さ礎にしてしまふことは、多勢のスタッフが一緒になり、監督を中心に作業をすすめている映画作りにおいて、いかに無茶なことであるか、時には、ロケーションのスケジュールに支障を来す場合すらある、それが私にもわからないわけではない。それでもなお、

(あれに谷ナオミを逆さ礎にしてみたい)

という一度とりつかれた妄想をぬぐい去ることができなかった。

地主の広い庭に建てられた二本の礎柱を眺めつつ私がその妄想にとりつかれているとき、小沼監督は、その屋敷内で別のカットを撮影中であり、私には用がなかった。

(監督に話す前に、先ずは彼女に当ってみよう)

そう私は考えた。ちやうど彼女に出番の間が出たのを見て、

「あれに逆さ礎にならないか？」

と礎柱を指差して言った。彼女は一瞬、私を見てすぐには返事をしなかった。私はさらに、こう言った。

「谷ナオミのファンが、さらにふえる、保証するよ。今まで、あなたの主演した映画では一度もない逆さ礎だ。新しい挑戦だよ。これはファンに対する挑戦だぜ」

と言う私も内心、客観への挑戦を意識していた。

「大丈夫？」

彼女は私をじつと見てたずねる。

「監督さえOKしてくれるなら、乗馬のときよりも大丈夫だし、礎に関しては責任を持つよ」

と私は言い、彼女の気持が逆さ礎へと傾きかけてくるのが読めた。こういう役者根性が谷ナオミの姿かも知れない。

「いいわよ、その代り、しっかりと縛りつけてくれなくちゃだめよ」

「勿論、任しときなよ」

私は礎柱を眺めた。キの字型の柱では私好みの礎としては不満があつたけれども、それに谷ナオミを逆さ礎にすることによって、実は彼女だけでなく、これは私自身が観客に対する挑戦にもなるな、という妄想がいっそうつづつた。

それに白木の礎柱と、その背景になつていゝる樹木のみどり(ロケーションは十月中旬で紅葉してない)をバックにした谷ナオミの逆さ礎は、まさに一幅の絵として浮び上がってくるのである。

「とにかくぼくの一存で逆さ礎に変更するわけにはいかない。礎のシーンは午後予定だから、昼食の時、監督にぼくから、それとなく話してみるから。監督がOKということになれば、頼むよ、谷さん……」

と私は彼女に言い含めておいた。

さて、午前中の撮影が終り、昼食というときになつて、

「勝手に予定を変更されては困りますよ」

と、いきなり小沼監督から言われて私は、やっぱり、という気持がし、口にすべきではなかったな、といういささか後悔の思いをかみしめた。谷ナオミには、私が、監督に話すから、と言ひ含めてあつたのに、彼女が先に



逆さ磔の一件を小沼氏に話してしまったのである。彼女にすれば、それだけ乗り気になっていたのであり、他意はなかったのである。「逆さ磔なら、いい絵になる、というのはよくわかるけれど、磔の状態では芝居が長いし、それに逆さ磔にして置くには時間的な限界があるでしょう」

と言う小沼監督の言葉は、私にも痛いほどよくわかるのである。

「いや、すみません。余計なことを口に出してしまつて。ぼくは勝手に予定を変更しようという考えではなく、思いつきとして監督に話してみたただけです、誤解しないでください」

私は謝るしかなかった。もし逆さ磔にしたために、その日のロケーションの進行が遅れるとすれば後のスケジュールに影響する。多勢のスタッフを総括している監督の責任も問われてくる。もし私が監督の立場に置かれていたならば、やはり小沼氏と同じ立場を取らざるを得ないだろう。

これが企業という組織の中で仕事をする者のプロとしての態度であり、私など一介の磔嗜好の妄想や思いつきで、突如予定を変えてしまうことは、プロのやるべきことではない

のである。

こうして私の妄想、谷ナオミの逆さ磔は、幻に終わってしまったけれども、後悔の念は少しもなく、かえって小沼氏から企業内におけるプロの厳しさというものを改めて教えられたような気がするのである。

この磔シーンで、谷ナオミと若者にそれぞれ紅白の越中褌を付けさせたが、これは前バリエを隠す一つの手段であり、花巻京太郎時代の団鬼六氏の小説などから連想すれば、あるいは女には越中褌を、男には女の赤い腰巻を、ということになるかも知れない。

雨中の緊縛

こんな映画作りの裏話など興味のない読者には退屈この上ないかも知れないけれど、本誌のこの号に予定していた『雁のように北から来た夫人』のスクランブルの原稿を某氏に依頼していたが、約束のメ切を十日すぎても一向に原稿を届けてくれず、催促してもラチがあかないので、本誌の編集子の一人として、止むを得ず頁を埋めなくてはならず、さらに退屈であろう話をつづけることにする。

『貴婦人・縛り壺』は、裸馬にまたがせての

引き廻しから磔へ、そしてこの映画のヤマ場ともいえるべき暴風雨の夜、猿の祝言へと展開して行くのである。

結論から先に言えば、この風雨の中での、女優谷ナオミに、私は一つの満足を得たというのが、今度の映画作りでスタッフの一人として参加した最大の収穫でもあった。

もともとこのシーンは台本にのっとって、小沼監督が描き出したものであり、それをカメラで再現して見せたカメラマン森さん、その他スタッフたちの協同作業であることは言うまでもない。

スタジオの中にセットされた地主の屋敷と庭、祝言がクライマックスにさしかかり、腰に荒縄の下着（私のコンテ）をつけた谷ナオミが、風雨の中に飛び出して行く。それを追っかける地主（文学座出身の高木さん）の親父が、彼女を追いかけて、風雨の中で組んずもつれつ、あわれや谷ナオミは雨に濡れたぐしよぐしよの荒縄で、庭木を抱きしめるようなポーズで縛りつけられる。

その彼女の頭と言わず顔と言わず、二本のホースからほとばしる水が、煽風器をフル回転させて横なぐりの雨水となって叩きつける。悪漢地主の親父は嫉妬に狂い、異常な欲情

に猛り、百姓共が奇声を上げて見守る中で、樹木の幹にぐしよぐしよに濡れた荒縄で谷ナオミを縛りつけて背後から犯す。

この雨中での緊縛シーンは、ドラマのクライマックスでもあり、テスト、本番の繰り返しがつづいた。とりわけここで私が緊縛指導（ではなくロープマンとして）に力を入れたのは（口はばつたい言い方だが）、二本のホースからほとばしる人工風雨の中で、谷ナオミを樹木に縛りつける親父の演技であり「縛りつけ方」であった。芝居の流れを踏まえつつ、動く絵として私自身でやって見せた。

「はい、わかりました」

悪漢地主役の高木さんも頭からびしょ濡れになり、寒さにブルブルふるえながら、私ごとき者の提言に、誠に真摯な態度でうなづいてくれるのだ。

「はい、本番、行きます」

小沼監督の掛け声が一段と高く、熱を帯びてくる。無理もない朝九時のセottoインから昼食、夕食、そして時刻は既に深夜の十一時を廻っていたのである。

「本番ッ」

監督につづいて監督助手・加藤君の掛け声とカチンコ、二本のホースからほとばしる水、

特撮用の煽風器によって横なぐりの雨が、一せいに谷ナオミと地主の親父を叩きつける。私の眼は、逃げようとする谷ナオミを押えつけた親父が抱きかかえるようにして樹木に縛りつけるのを、祈るように見守った。もう本番の繰返しはない。

（慌てないで、落ちついて、本当にこの激しい風雨の中で谷ナオミを、役者ではない、女のナオミを、しっかりと手をぬかずに縛りつけてくれ、頼む、高木さん！）

私は自分が演技者でない苛立たしさを抑えつつ、この雨中の緊縛シーンを見守ったのである。横なぐりの水滴の中で谷ナオミが必死になつて縛られまいとがく。その両手首を掴み幹を踏ん張るようにして地主の高木さんが、私の提言に従って興奮のあまり、たつぷりと水分を含んだ荒縄を扱く手をふるわせつつ、見守っている方を苛立たさせるような真に迫った手つきで、ほぼ、期待どおりに縛りの順序を踏まえている。

その間、カット割りなしで森さんのカメラは廻りつづける。

「ああーっ」

一瞬、谷ナオミが横なぐりの風雨に咽ぶような表情を見せた。それはもはや縛られてい

るといふ芝居でも演技でもない。カメラの方に向けている顔面に容赦なく叩きつける人工風雨責めをもろに受け、一瞬、芝居を喪失してしまった表情であり、それが私の眼にM女谷ナオミ（これが表現過剰ならば、女、谷ナオミ）として映ったのである。あるいはこれも私の妄想にすぎないかも知れぬ。

「ハイッ」

小沼監督の熱のこもった掛け声で、雨中緊縛の長いワン・カットはOKとなった。私も欲を言えば切りがなく、十分だと内心想った。

後日、この緊縛のシーンのラッシュを見たとき、「監督、他の縛りのシーンは編集の都合上カットすることがあっても、ここだけは絶対にカットしないほしい」

と注文すると、小沼氏も「勿論ですよ」と私の意を汲んでくれた。

この映画を観る観客が、この雨中の緊縛シーンをどう受け止めてくれるか、それは知るよしもないけれども、一部マスコミからは、「SMの女王」などと、いささか見当はずれなキャッチフレーズで呼ばれている谷ナオミの、一瞬女優の顔を喪失してしまった「女の顔」をこの雨中緊縛シーンの中で私は見た、というのは私の妄想であろうか。

なお因みに「SMの女王」という一部マスコミのつけたキャッチフレーズが見当はずれだというのは、谷ナオミの演ずる女像はM女でありS女ではない。女王という語は間違ってもM女に付すべき呼称ではないのである。私など理想とするM女の像は「女王」ではなく「聖母」なのである。

女の顔

退屈な話の上に、更に退屈な話をつづけることにしよう。

小沼勝監督のSMポルノ『花と蛇』『生贄夫人』そして今回の『貴婦人・縛り壺』の三作品にスタッフの一員として参画し、二十数年前の映画監督になりたいという若き日の私のユメは叶えられたような気もする。

この三作品とも、M女の役を演じた谷ナオミについても、私なりに知ることができた。彼女にファンがいることもわかる。そしてそのファンの期待に応えようと彼女が必死にM女の役を演じようと芝居をつづける女優であることもわかる。更には、彼女の映画が一定の観客を動員できることもうなづける。

それでいて今回の、裸馬にまたがった時の谷ナオミの苦痛の顔、幻の逆さ礫に終ったけ



カラー作品 貴婦人傳り壺 映倫

れども実現していればその時の顔、そして雨中の緊縛シーンで一瞬視かせた女優を喪失した谷ナオミの顔、これらに私があえてこだわろうとするのは、そこに責めの苦悶、女優でも役者でもない、顔（現実に責められている女の顔）の表情が、読みとれたからである。

更にぜいたくを言わせてもらえば、縛られ叩かれ、悶え狂う、時には嘔り泣く、役の上での谷ナオミがいかに多くのファンを集めようとも、それで彼女がM女だということにはならないのである。彼女の演技はM女であるが故の演技ではなく、したたかな役者根性を持つ女優の固定化しつつある芝居である。

スタジオセットでの撮影の合間に、スクリプターのN女史から、

「どんな女性を縛ってみたいですか？」と質問を受けた。

「あなたでも、いいですよ」

とN女史に対して私は失礼は百も承知で即答した。この一言に私は「女を縛りたい」と言い尽したつもりである。私の緊縛欲は容姿や年齢など外見的なものでそえられることは既になくなった。極言するならば「女」を感じるか感じないかで私の緊縛欲が決まる。これが私の緊縛嗜好のポイントである。

今回の『貴婦人・縛り壺』で、私がひどく緊縛欲をかられたのは、だれの子かわからぬ子ダネを宿している下女（妊婦）役を演じた田島はるか、である。

「彼女を縛ってみたいですね」

と率直に小沼監督に言い彼を苦笑させた。それは私が縛ってみたいという個人的な緊縛欲だけではなく、もし彼女が縛られるM女の役なら、という願望と期待の表明である。

またの時、セッティングの合間にちよっと撮影が中断の折、今回の映画ではS役の渡辺とく子がすぐそばにいて、ちょうど天井から垂れ下がっているロープが私の眼に入った。

「今度はあなたが縛られる番だよ、台本が少し変わったんだ」

と彼女に言うなり両手を背中へまわし、素早く縛った。

「本当？ それ本当なの？」

突然の私の仕草に半信半疑の渡辺とく子にそばにいたスタッフの一人が、

「そうなんだ、今度はとく子だ」

と、私が天井から垂れ下がっているロープで後ろ手に縛っている彼女の肘に手をかけたとき、「いやーっ」

一瞬、彼女の顔が緊張した。それはまった

く演技ではない渡辺とく子の縛られることに對する女の反応だった。

（これだな……）

私は自分のちよいとした冗談とイタズラから渡辺とく子が見せた女の反応を見て内心うなづいた。彼女たちにはそれぞれ女優としてのプライドがあろう。たとえ映画の中であっても縛られる役には抵抗があるのは当然だろう。いや、私が渡辺とく子に冗談でイタズラした、その、ささいな事にさえ彼女の「縛られる」という日常的な抵抗が如実にうかがえるのだ。

SM映画というものは、必ずしもハードな縛りや責め場が必要であるとは私は考えていない。むしろロープや責めに対して新鮮な反応を示す、そこがポイントである。そういう観点から、ほんの一瞬だったけれど渡辺とく子にイタズラしてM的な「女」の反応と感触をその時私は得たように思う。因みに渡辺とく子は新劇からポルノ女優に志願して話題をまいた女優である。

この渡辺とく子とは対象的なものを私は、田島はるかに感じた。実際には一度も手を触れたことはなく、二言三言、さりげない会話を交したにすぎない。出番を待つ間、じっと

居るのか居ないのかわからぬほど物静かに片隅で控えている田島はるかに、女の忍耐のようなものを感じたのである。M女にとって忍耐は欠かせぬ素質の一つである。

彼女なら縄を打たれても（縛られても）じっと受けとめて耐えつづける、そういうM女の印象を感じると同時に、緊縛欲をひどくそられたのである。

宮下順子が日活ロマンポルノに出演する以前のことである。彼女がまだ某プロダクションに所属したばかりの頃、緊縛写真のモデルとして三浦岬の民宿に泊り込みで写真撮影をしたことがある。昭和四十五年七月ごろだと記憶する。

その時、私は彼女を縛った。単物だけを着せて、高手小手に緊縛して海水の中に首まで次第に沈ませていくカットで撮影した。モデルとしても始めたばかりで、ひどく新鮮な印象を受けた。その時、宮下順子もまた女の忍耐を感じさせた。彼女はきつとモノになると、と直感した。やはりその後の活躍を見ると、私の印象は見当はずれではなかったし、女優というよりは「女」の感触の強い、M女の投影すら感じるのである。

片桐夕子とは残念ながら面識がないけれど

も、観客の一人として映画テレビ、あるいは週刊誌などで見える限り、彼女の眼、眉、額などが私にはチャームポイントであり、やはり女優というよりは「女」を感じさせ、緊縛欲のイメージをそそられる一人である。

本質に挑戦

もうこの辺で、この退屈な話は止めにして
も欠稿頁は埋まりそうである。

十二月十日公開の『貴婦人・縛り壺』の撮影に延べ八日ほど参加して、私の出番が終り撮影もほぼ終了間近になった頃、監督の小沼氏、助監督の斎藤君、それに監督助手の加藤君の四人でささやかな祝盃を上げた。

この四人で共に語り合うのは、今回の仕事の話を受けてから前後三度であるが、お互に仕事を通じての親近感と、一つの仕事を私は自分の立場なりになし遂げたというよろこびを味わった。

このよろこびは、人間的な結び付きと同時に、お互に相手のやることに理解ができた、という満足感が含まれている。こういうよろこびを、かつて私はロープマンとして商業SM誌の写真撮影に出かけたときには余り味わったことがない。

十指に余る商業SM誌が今日では市民権を得たごとく本屋の店頭を賑々しく飾ってはいけるけれども、その雑誌編集者（その寄稿家も含めて）のSMに対するドグマ、固定観念ほど私には我慢ならぬものはない。

「そんなに排他的で、独りよがりなものではないよ」

と言っても通じないSM誌の関係者が意外に多いのである。縛りのロープと言えは麻縄だけに執着してしまい、これこそプロだと自認している類である。

こういう手合いとは肌が合わず、もっと解放された、たとえ数の上では少数派であろうとも、好きな「遊び」の雑誌作りを——という主旨のもとに創刊されたのが本誌『サン・アンド・ムーン』である。

SMというドグマや固定観念にはとらわれず、何事も本質的な普遍性にまで挑戦しようとする挑戦者、プレイヤーのために扉はいつも開かれているのである。

かつては本屋の片隅に、ひっそりと身を小さくひそめていたSM誌が、賑々しく飾られている今日、今一度、SM（この言葉も実に曖昧だが）について多くの可能性を考え、志向すべき時であると思う。

本誌で今はつきりしている志向（発表機関としての）は、SMポルノ誌ではなく単なる「股間志向」とは、一線を画したい。Sの像とMの像は（遊びの）哲学であり、思想である。その映像するところは芸術なり、という己惚れをもあえて辞さないのである。

この退屈な頁の締めくくりとして、映画を一例に挙げるとすれば、かつてキス・シーンを演じただけでショッキングな話題をまいた二十数年（三十年）前に対比して、今日ではそれとは比較にならぬ変貌を遂げているけれども、しかしそれも先述したように、事は現象的な側面にすぎぬ、と私は思う。

これは映画に限らず、人間の性愛にかかわる表現、その現象について当てはまるのである。表現者の意識革命が必要なのである。その意識革命の一つとして遊びの哲学も、また必要なのである。

前バリしたスターたちが、いくらベッドシーンを熱演し繰り返しても、股間志向に基づく限り、男と女、オスとメスの性愛の深淵は掴み得ず（描き得ず）むしろS像とM像の追求のなかにこそ、それが私には見え隠れしているような気だしてならないのである。

（写真は日活撮影所写真部提供）

愛のかたち

川辺征也

私が縛りに魅せられたのは十年以上も前になる。今は無き「奇ク」の巻頭グラビアに載っていた写真に強烈なショックを覚えた。

それまでに女が縛られている場面や、吊るされている姿を映画やテレビの一場面で見たことはあっても、ひとつの大きなストーリーの中の一部分であって、女に対しての縛りが中心のストーリーではなかったことによるものでもあつたろうし、ストーリーの中でも女を縛り上げて喜ぶような場面はほとんどなかったことにもよったからであろう。

縛られる女にしても、映画やテレビ劇の中の準主役であつたり、主人公の娘や恋人、家族であるケースが多く、それが主人公によって助けられて、女を縛り上げ、牢や納屋に閉じこめた悪人は切られたり、殺されたりしてメデタシメデタシとなったからによるのかも知れない。

そんな影響からか、あるいは映画監督や原作者の筋書きが上手く、その筋書きに載せられて一喜一憂し、無事決着がついてホッとする私の単純さの性か、女を縛り上げて責める世界が実在していたことをそれまで、まったく知る由もなかった。

それだけに「奇ク」に出会った時の驚きとショックは強烈であつた。

以来、奇クが私の愛読書となり、この世界への入門書となった。とはいっても両親や兄弟に見せて抵抗を感じない内容の本ではないだけに仕舞う場所、読む時などを選ぶのに苦労をしたのを覚えている。

奇クがまだ白表紙の頃で、今のSM誌のような華やかさ、モデルの多さには及ぶところではないが、地についた編集と内容は現在の繁乱するSM誌の比ではない「味」を持っていた。モデルも同じ人間がさまざまな形で縛



られ、表情、表現のひとつをとっても、追求した何かがあり、決して見あきるといったことはなかった。

絹川文代、大塚啓子、前田真知子嬢等がグラビアに限らず、本文の中でも活躍していたのは、一面識もない誌上だけで知る親近感

とは違い「体のすべてを知っているんだ」というような気持ちすら抱かせた。そうした点からいけば、昨今のSM誌はモデルも一回きりで、味気ないことはなはだしく、読者と見えない糸で結ぶ努力や工夫がまったく成されていないような気さえする。だからかどうかはわからないが、変化だけを追い求め、それも底をつき、マンネリ化へと陥っているような感さえある。

もちろん、この世界に興味を持ち、実践している同好者から、実践する機会も持てぬまま、本やグラビアをながめて慰めている予備軍まで程度や趣向も違うのだが、実践派から見ると非常に物足りない。その理由のひとつに「つくった読み物」、つまり夢物語が多く実践も実行もできないストーリーの擬似報告や、ねつ造されたとわかる物語りが「本当のことです」といわんばかりに並んでいるのは非実践家には刺激となるだろうが、所詮はつくり物の味でしかないのだ。長い時間をかけて一人の女を調教し、愛奴へと変えていく姿勢もなく、あくまで擬似でしかないと私は思う。文章は下手であろうと、たどたどしい内容の記事であろうと、実践派の文章には実践派だからこそわかる「何か」があることを編集者

は知らないのであろうか。それともうひとつ感じることもある。

「SM」の世界というのは常人(?)から見ると異常な世界であり、変質者の行う行為であると、とらえ、それに抵抗しようともせず、あたかも、それを肯定するかのよう写真集や、グラビア説明文、タイトル等に「変質者の愛玩物」「異常な世界」「変態のいけにえ」「偏執のとりこ」と例を挙げればきりがないほどの「ことば」が使われている。

これは、とりも直さず、SMは精神異常者の行為であり、それを認めているに他ならない。社会の大勢がそうであろうと、それに対しては反発すべきであり、「愛の形」のひとつであり「異常なことでもなんでもない」と広言すべきではないだろうか。我々は社会の中で適応して生きており、各社会の中で責任ある立場、役割りを果たしているのを見ても、精神異常ではないこと、明白である。少々短略に書いたきらいはあるが、言わんとしていることはわかっていただけたと思う。

そんな気持ちの私が、ある日書店で見つけたのは「サン・アンド・ムーン」である。創刊号の冒頭に記された「主旨」に同感し、共鳴したのはいうまでもない。

雑誌の紙質、レイアウト、体裁、等には改善、改良の余地は十二分にあって、主旨だけはいつまでも変わらずにいて欲しいと切望する次第である。否、変えさせないようにするのが読者の声であり、読者の叱咤だと私は考える。諸兄はいかがお考えだろうか。

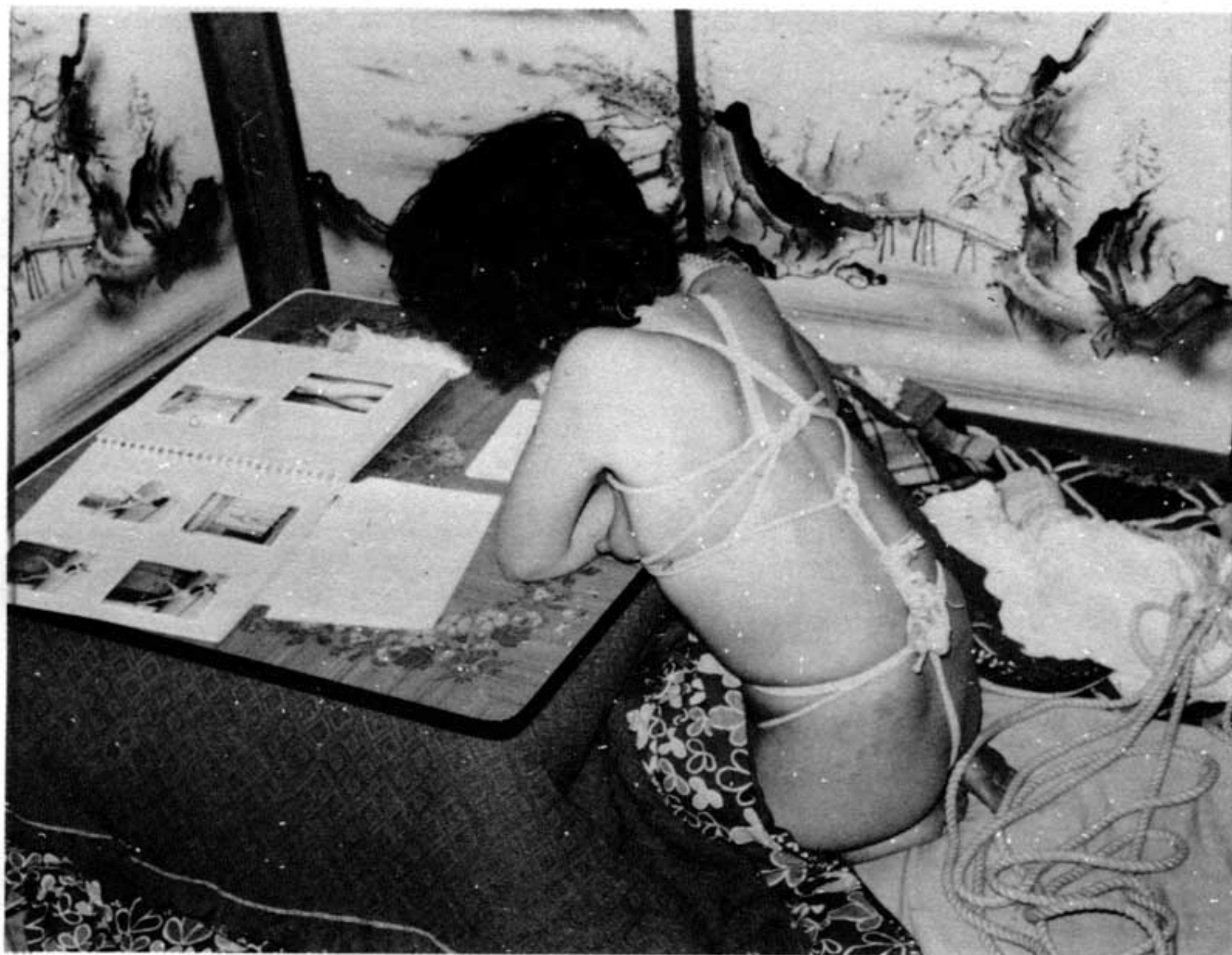
蛇足ながら、期間の長短はあっても私が調教し、愛奴とした女性は今までに8人、今、9人目を調教中である。といっても、調教した女性8人すべてが今、いるわけではない。その多くは嫁して去り、幸せな生活を送っている。愛奴であったからといって、それをネタに悪用したことも、しようとも思わない。彼女等の一生の中に、一時期のエピソードとして、こういう愛の形があったんだなど、思い出しても、決して異常なことだったとは考えないであろう。

つい先日、8人のうちのある一人から電話があり、話しをしているうちに「あなたとの事が思い出されるの」と、暗にプレイの再開を願う言葉が出てきた。即答は避けたが、近いうちに会ってみようと思う。

縛 絆 手 記

役畜づとめに服す快び

一の瀬真由美



縛絆手記を一の瀬莊志氏から書かされる真由美夫人・

御手紙いただき、ずいぶん考えました。
本当に気恥ずかしい思いです。

初めて、御便りさせて、いただきます。

主人は言い出したら、もう何も聞いてはくれ
ません。

私のすみずみ迄、世田様にお話しろと言っ
ております。主人が話した一つ一つの項目に
答えるつもりで書かせていただきます。

これも主人にいつも従う私のように……

私が、初めて縛りを受けたのは結婚二十一歳
の時でした。現在二十八歳、子供が二人半……
主人と私の生活の中に縛りはいつもありまし
たが、雑誌にある様な縛りではありません。
自慢ではありませんが主人のやさしい愛をい
つも感じておりました……

主人は、職業上、日曜日とか連休は一般の皆
とは異いありません。でも年に一回か二回、
私と子供を連れて、一泊二泊の小旅行をして
くれます。

それは両親と生活を共にしている私に対する
主人の、やさしさでしょうか？ その時は必
ず私を縛ります。それは家庭ではできない様
な力強い、又、大胆なものです。その時、私



は心から主人に飼われている犬のようになれるのです。全てをうばわれ、身体に何もまとわず……

ただ、主人の命ずるままに、その口調の激しければ激しいだけ、私の言葉とは逆に体がぬれてしまいます。主人も世田様という、よき身内(?)を得てからは一段と私に対する愛が変わりました。

それは写真です。今迄はポラロイドによる二人だけの秘密でした。どこで、どのように惚れてしまったのか……きっと、すばらしい主人の友人だと思っています。

もしかしたら、先生かも……そして——繩に對する愛人かも——何はともあれ繩と縛りは、私の身体の中の中迄しみこみます。そして私の体が熱くなるのです……

今、この手紙を書きながら、やはり私ってどうなっているのかな? って、考えるのです。主人に荒々しく責められ、犬になり、体中を責められた(愛された)私が、朝になれば、食事の用意、子供を幼稚園へと送って行く……一人の主婦として……

去る八月十七日、世田様ごぞんじの、主人が



吊りを行なった日……私も初めてロープで体を吊り上げられました……

その日、両親が子供たちと旅行に行き、私達は久しぶりに二人の世界になりました。

主人は、いつもの主人とちがいます……

私も、いつもの私と異っているような気がし、何かを感じておりました。

「こっちにおいで！」

主人の強い口調……

はじまる予感に熱いものを感じつつ室に入る八畳間つづきの二室の襖は、はずされ、テールもなく縄がほおつてある……

とまどっている私に口調がきびしくなっています。

私の体を引きよせ、いつもは恥ずかしく目をつむる写真を無理やり見せつけます。

後ろから胸に手が入り、ブラウスのボタンをはずし、後ろ手に縛りスカートを……

胸から下に向って熱いものが走る——

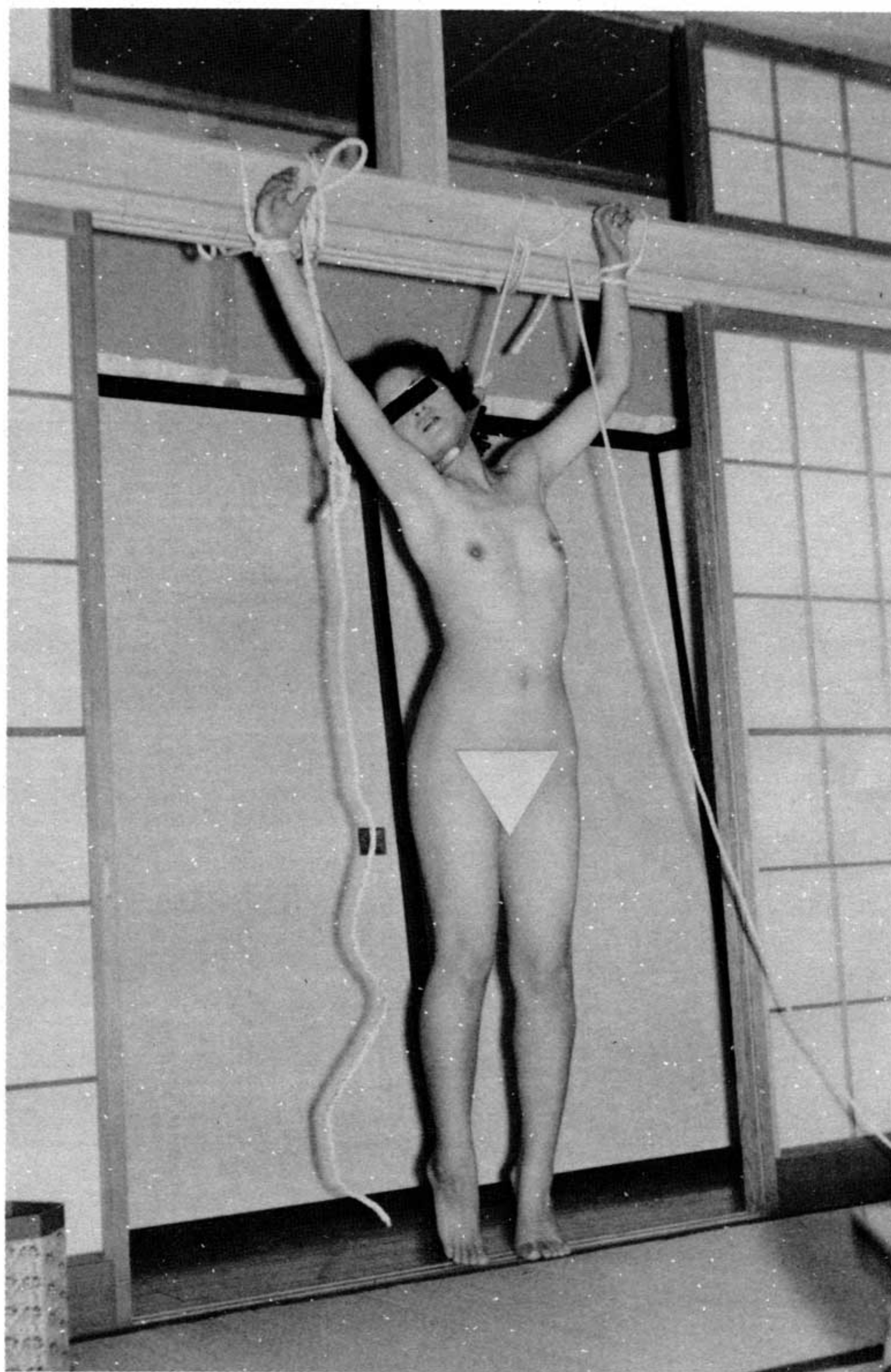
「いや！」

大きな声を出す——でも、今日は誰れもない……体が増々熱くなる。主人がロープでおしりを打ち始め、荒々しくなる。

「今夜は、お前を吊り責めにしてやるぞ！」

犬のように、そこに這うんだ！」





四つんばいになり私はそこで、もう身につけているものをぬがされ、首に犬の首輪をつけられ、完全に犬になりました。

もう何も頭の中にはありません。

主人のいうがままの私に――

主人にロープを引かれ室中を這い回り、そして玄関へ……

（ああ……外へ連れ出される）

いい様のない恥しさが――誰れかが見ていたらどうしよう、暗いジャリ道を、ともすると車のライト――

「いや、帰ろうよ」

でも主人はきいてくれず強く引き始めます。

「おしりを高く、もっと！」

いたいと感じるより、なぜか、胸がはりさけそうな位い、やるせない気持になり、いつしか激しさを求めている私でした。

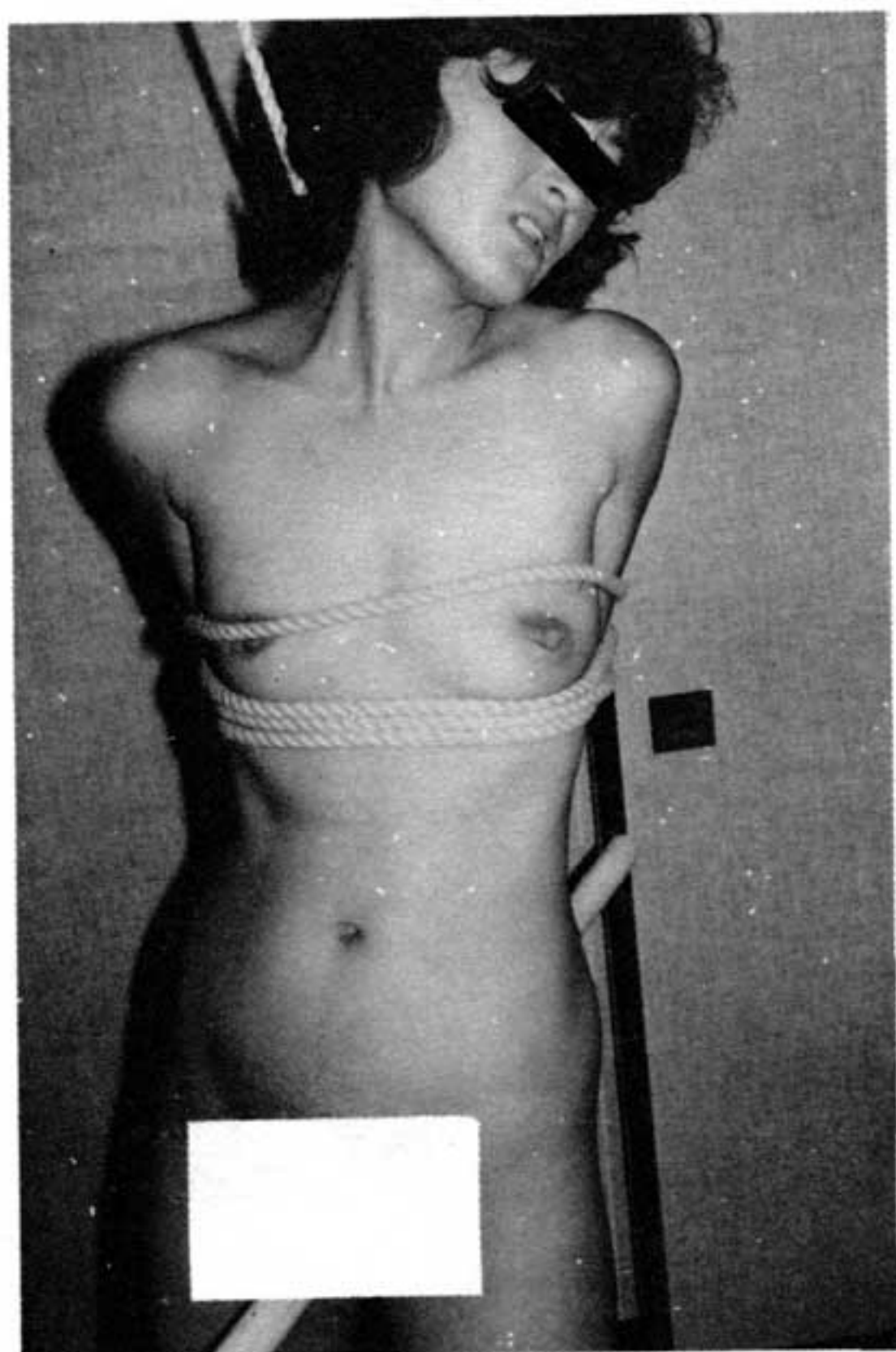
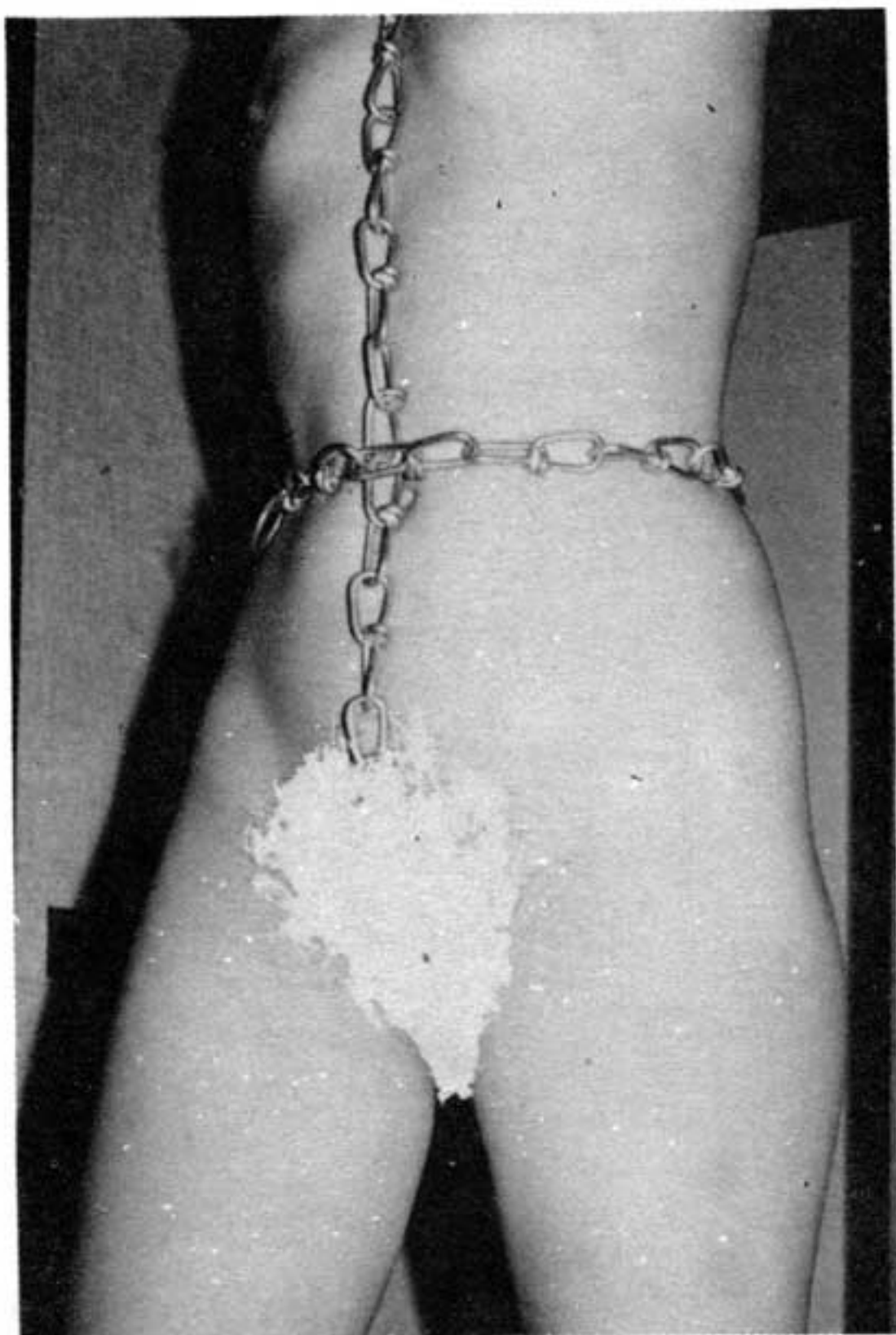
犬になりきった私を室に連れ帰り、両手をカモイに吊られ、片足を上げ、パイプを入れられました。

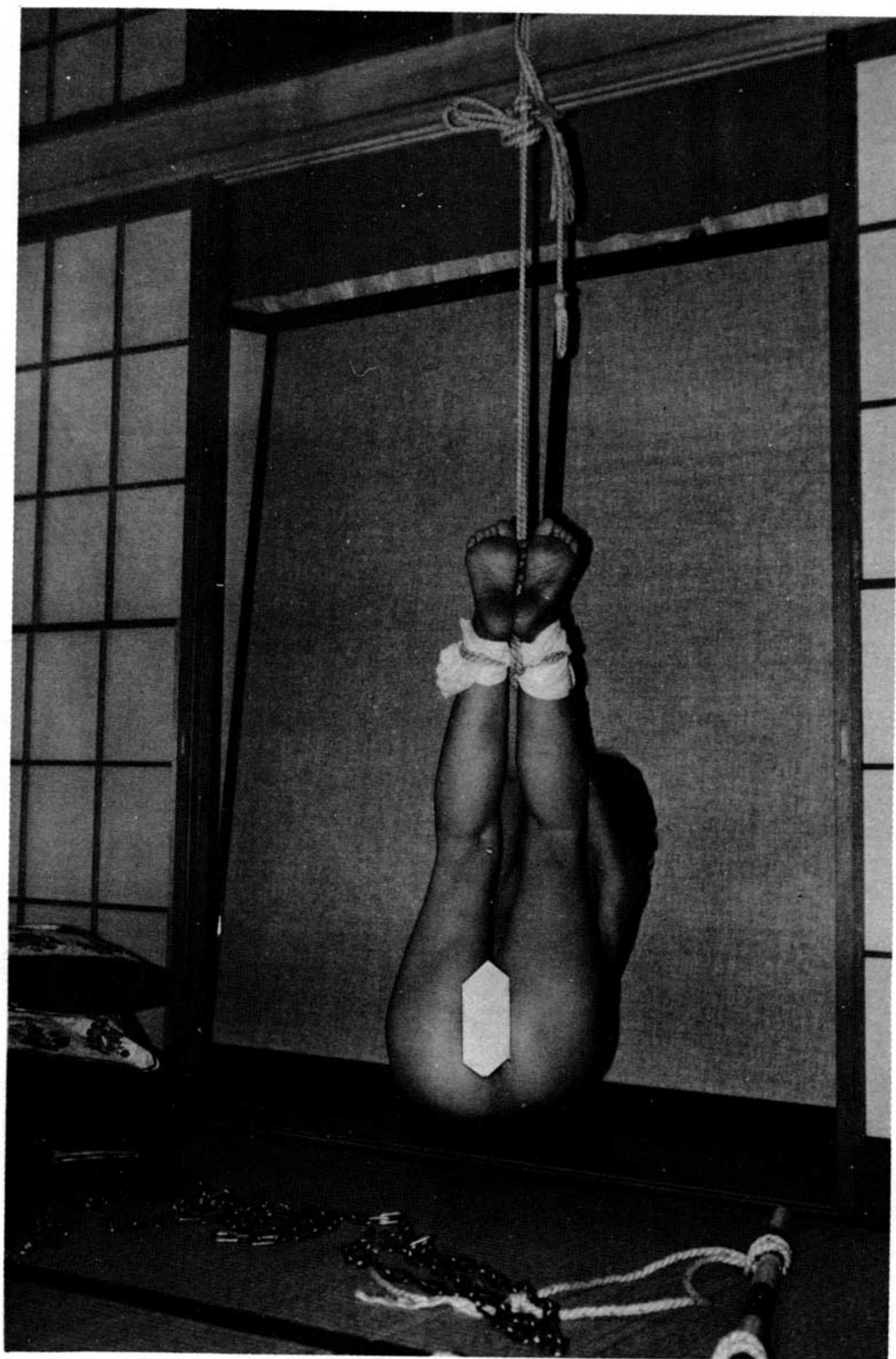
庭でのプレイにこうふんした体が、又明るい所で見つめられると思うと、いい様のない恥しさいっぱいです。

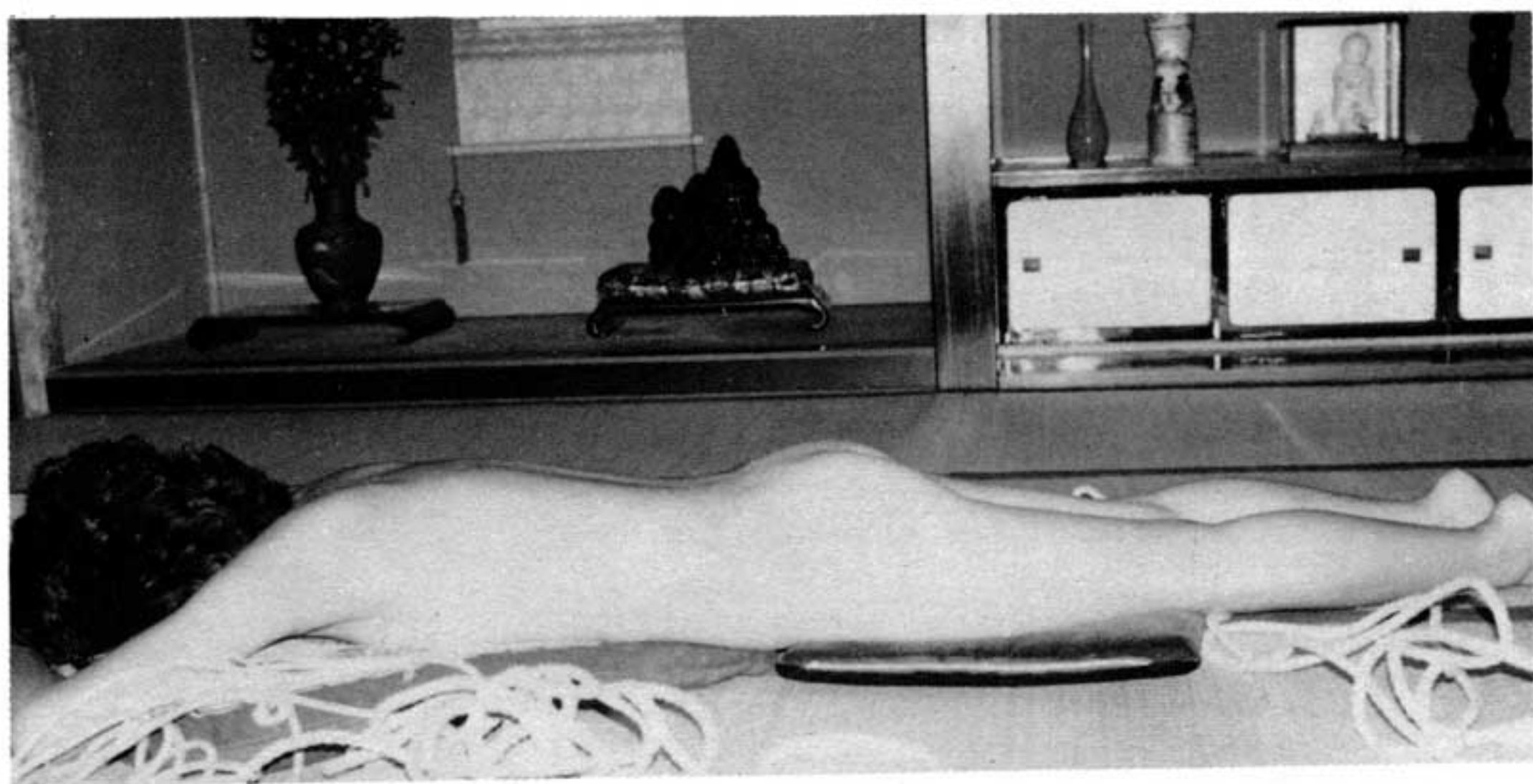
つま先立たされた私の体は主人のなすがままです。

カメラを向け、さかんにシャッターを押します。

視線をさけようとするのですが、自由のきかない私は、かえって興奮してしまうのです。主人のすきなクサリ――立って両手を上に吊り上げられたまま首輪のクサリが、股に通







冷たいクサリが……私の心の中をつき上げます。それから急に主人が、

「お前は悪い事をした、この棒に責めてもらえ!!」

と言い、棒に私をまたがせ、その棒を吊り上げたのです。

私のぬれた股に棒がくい込みます。

つま先立った私の体重が全て私の中心に……熱い物が下に、づきんづきんと出て行くような気持でした。

「さあ、吊り責めだ、吊るぞ!!」

主人が言った同時に私を、積み上げたフトンの上に立たせ、ロープを固定し、フトンをとりました。

と同時に全身に痛さが伝わり、思わず、

「痛いよ、おろして、おろして!」

叫ぶ私を無視して主人は、

「美しい!」

と言ってカメラを向けます。

思ったよりロープがくい込み痛がる私に主人はカメラをほおって、私を抱きおろします。

主人は今度は手足首に布をまき、その上からロープで両手両足を一束に縛り上げ、又吊り上げました。

そして、ぐるぐると回したのです。もう私の

体は底を知らぬ位いぬれていくのです。

いやらしい女、大胆な、そんな事のできる私だったろうか……でも、体が燃え上がるのをおさえる事ができません。

幸せ! そう思います。

この吊り責めは、主人、大変満足したようです。

でも、私、体中から力が抜け、動けません。

そんな私を、あぐらに組ませ、ごろりところがし、私の体をじっと見つめながら、満足そうにカメラを向けています。

私の体はもうびっしりでした……そして、主人の熱い体を受けました……

今の私は妊娠三ヶ月……一年間主人の強い縄ともお別れ——

元気な赤ちゃんを産んだら、又主人のやさしい縄を受けたいと思います……

書き終り、写真だけでなく、私は世田様に見られてしまった——そんな気持です……

乱筆、乱文をお許し下さい。(原文のまま)

本誌は特定書店での販売のほかに下記の
《大人の玩具店》にも常備してあります。

- **アップルイン** (574)1477
港区新橋・第一ホテル前
- **アラジン** (580)8479
港区新橋2-6-10
- **エンジェル北欧堂** (35)1120
立川市若葉町(虹ヶ丘バス停前)
- **エンジェル** (52)0588
川口市西川口陸橋そば
- **エンジェル** (23)0538
所沢市東住吉町11-9
- **エンジェル** (32)0615
長野県松本市博労町バス停前
- **黒猫館** (352)2566
新宿駅南口三越駐車場前
- **黒猫館** (842)4568
台東区上野駅浅草口左
- **クライマックス** (200)8680
新宿東宝プロムナード
- **新宿パラダイス** (369)8117
西新宿(緑屋前入ル)
- **セルフの店** (341)0921
新宿駅南口
- **セルフの店** (208)7044
高田馬場(原田ビル)
- **ファッションドリーム** (461)4270
渋谷区宇田川町26(東京本店通り)
- **ラブブティック** (200)2696
西武新宿駅前
- **ダゲール** (831)7828
台東区台東1丁目(秋葉原駅前)
- **ダゲール赤坂店** (434)0044
港区芝荻手町(地下鉄神谷町)
- **東京名品ショールーム** (764)8383
品川区大井駅踏切近く
- **やまと民芸** (714)0603
品川区武蔵小山駅前
- **プレゼントコーナー** (24)7486
川越市元町1-8-1
- **東京記念品** (387)9215
中野ブロードウェイ1F
- **娯楽用品城西店** (313)2544
杉並区梅里(新高円寺駅横)
- **娯楽用品環八店** (331)3484
杉並区高井戸東(高井戸駅横)
- **娯楽用品城南店** (764)0349
大田区大森西2-32(平和島前)
- **娯楽用品大原店** (321)0959
世田谷区松原1-55(大原交差点そば)
- **娯楽用品環七店** (994)0865
練馬区豊玉北(豊玉陸橋下)
- **娯楽用品藤沢店** (25)7329
藤沢市本町2(バイパス下)
- **娯楽用品柏店** (67)1953
柏市あけぼの町3(柏駅前)

◎上記取扱総代理店

東京記念品 ☎03(387)9215
新規販売申込みは当店へどうぞ



ロマン派生氏 縛猟記録









雁
のように北からきた夫人







縛絆愛虐の記録

一の瀬荘志





読者秘蔵写真集

M女は肥えている方がいい

武内 巖 提供



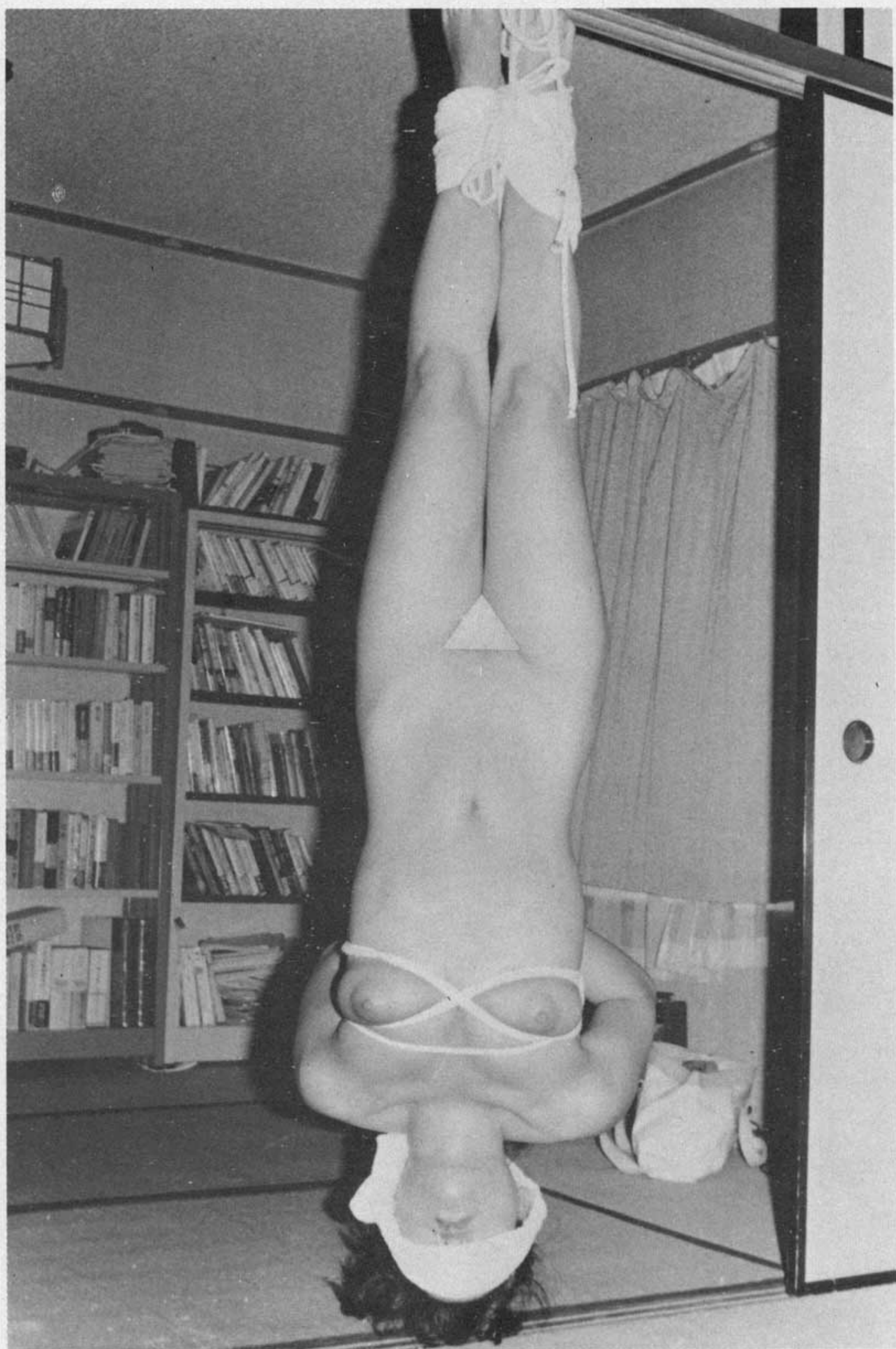






ペット・ミコ

谷川 清 フォト・レポート



熱蠟の滴り

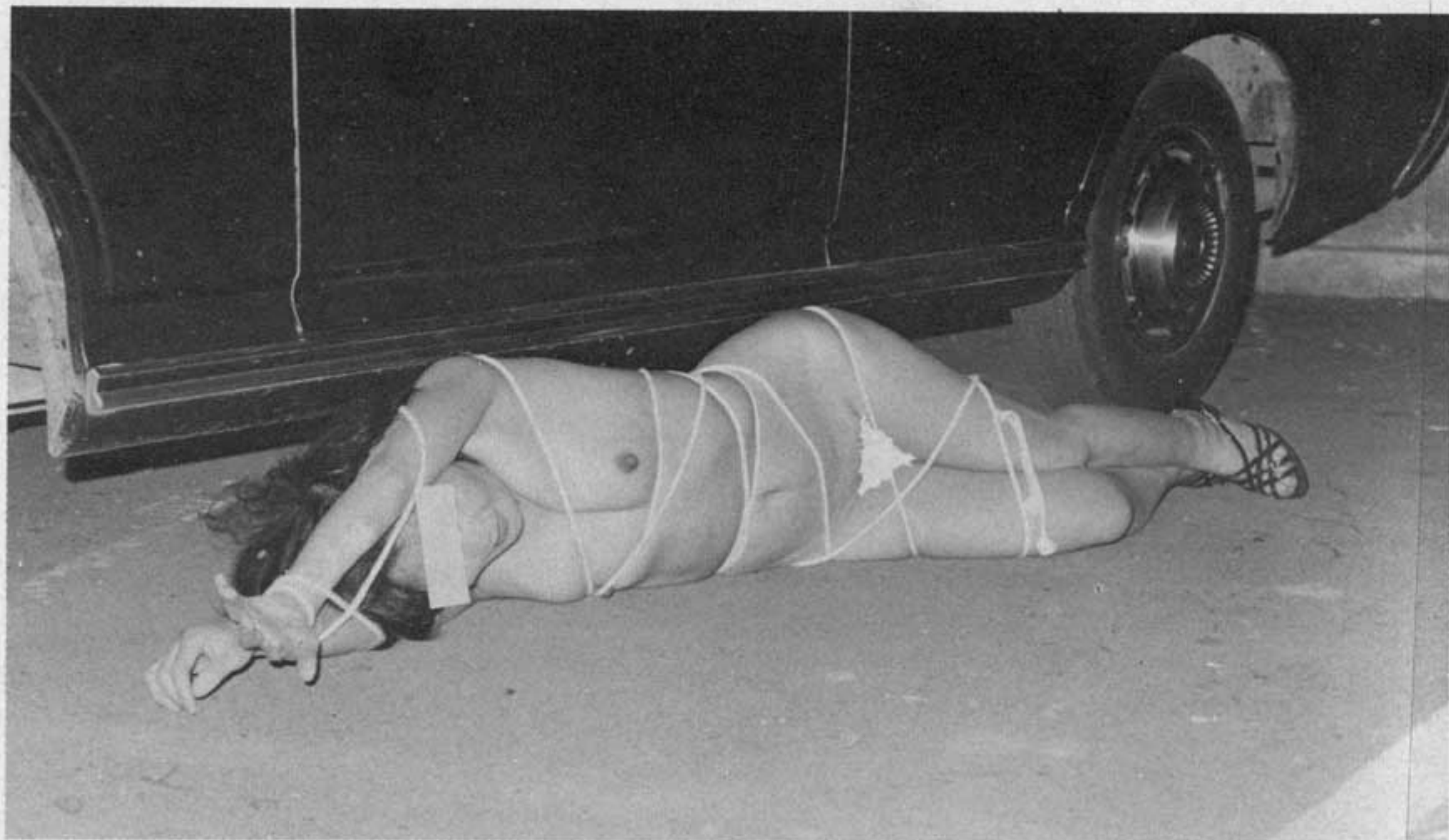


熊ん子責め



薬液充填

S氏夫人の深夜露天責め記録

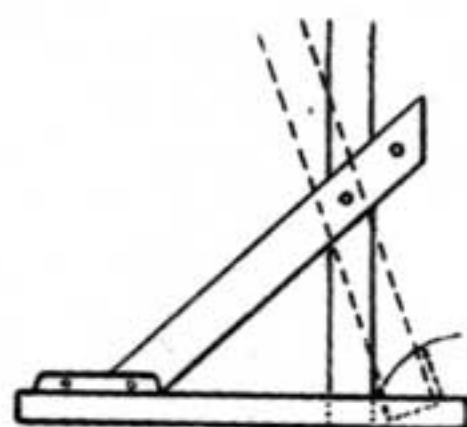
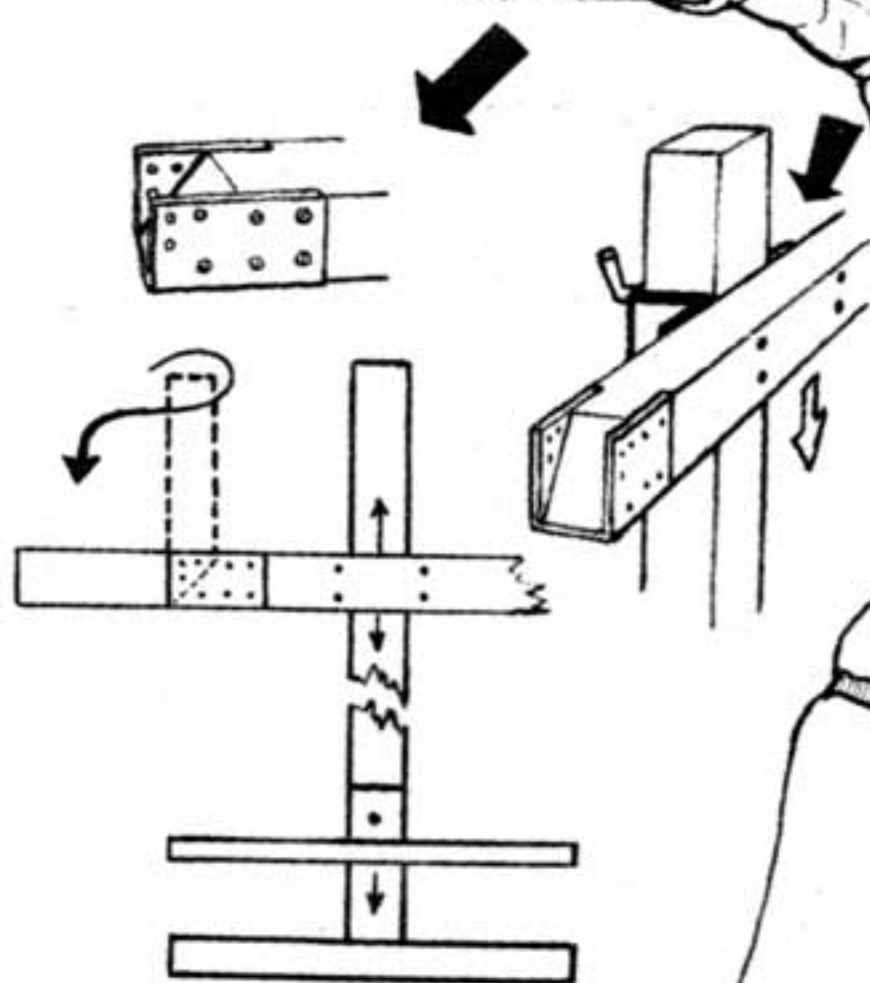




タヌキンの
遊戯具アイデア

山型架柱

多貫欣



私のSMプレイテクニック

その3 変型吊り

ロマン派生

縛った女を吊り上げるということは、考えただけでもわくわくするものである。縛って転がしただけでも、女というものは素晴らしく美しく可愛くなるのだが、それを更に吊り上げると、哀しいまでに美しくなる。これは一体どういうことなのか、自分でも妙なものだと思う。しかし、映画「獄門島」のポスターのように足だけ縛って半分吊ったようなのは、殆んど興味がもてないのは不思議なものだ。あれは殺された後だからつまらないのかどうか。

矢張り、生きている女が苦しうにうごめく所がよいのだが、それが、あまりにも苦痛がひどかったら、見ていて楽しいという気分にはなれない。或る程度の限界の中で、しかも美しい形でもだえてくれなくては、ジーンと来ないものである。どの位が苦痛の限度なのか、どんな形が美しいのかは、その人、その人でかなりの相違があろうが、それでも或る程度は万人に共通な所もある筈である。

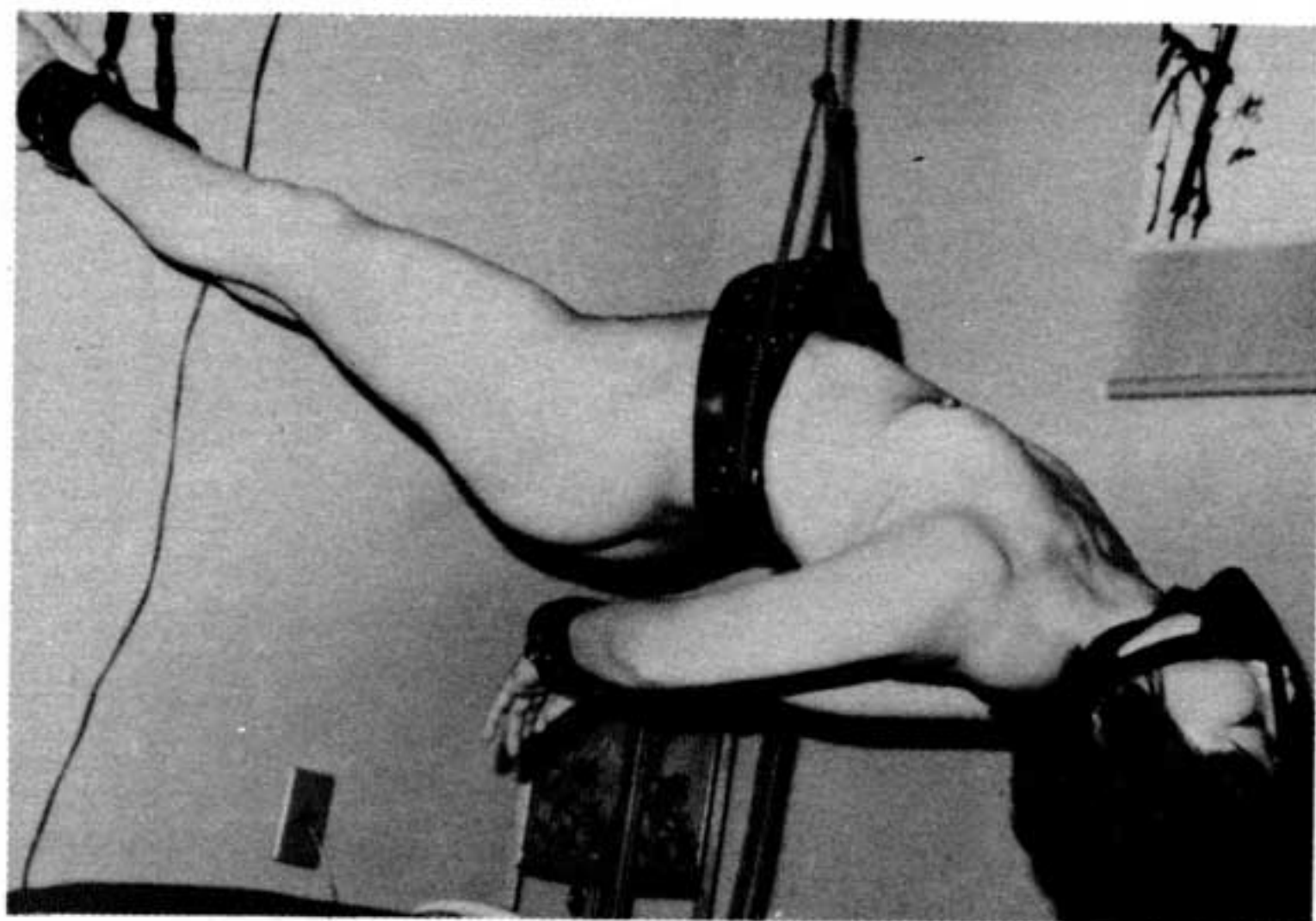
女性を縛って吊るすには、色々な形が考えられるが、一つは身体的に無理なものもあるし、一つには、その形が面白くないものもある。吊り方のバリエーションは無限とは云えない。「逆さ吊り」とか「駿河問ひ」などと

いうのが無難な形の代表的なものであろう。その他にも標準的なものとしては頭を上に通に吊るものがあるが、意外にこれは苦痛が多い上に、形がもう一つこうきまらないのでむずかしいものである。これ等の吊りを一応スタンダードなものと考え、それ以外はすべて変形吊りと勝手に呼ぶこととする。

変形吊りの中で、本誌第二号に載った片足吊りは、正に圧巻で、吊り番付けの中では横綱に文句なく推挙される筈である。しかし、これは相当の苦痛を与えるので、よほどモデルに恵まれないと出来ないと思われる。気の弱い私はまだやったことがない。

手を頭上に伸ばし、手首と足首とで身体を水平に吊る弓吊りも、かなり苦痛があるようだ。かつて奇ク誌で辻村氏が梨花悠紀子を弓吊りにしたが、あの写真は仲々素晴らしかった。しかし一般には、与える苦痛の大きさに相当するほど良いポーズとなりうるかどうか、疑問もあるので私はあまりやる気がしない。

最近SMセレクトの濡木氏がよく横臥位の水平吊りをやって居られるが、これも私にはあまり美しいとは思えない。何か体操の跳馬の横ひねり跳びの一瞬のような、むしろスポーツのような爽やかな印象を受けてしまう。



S Mプレイはスポーツとは正反對の、もっと陰湿な歪んだ美しさだから、どうも、横臥水平吊りは好きになれない。

正座して深くお辞儀したような形のまま吊る方法もあり、それに鼻吊りを併用すると素晴らしいという人も居るが、これもどうも私

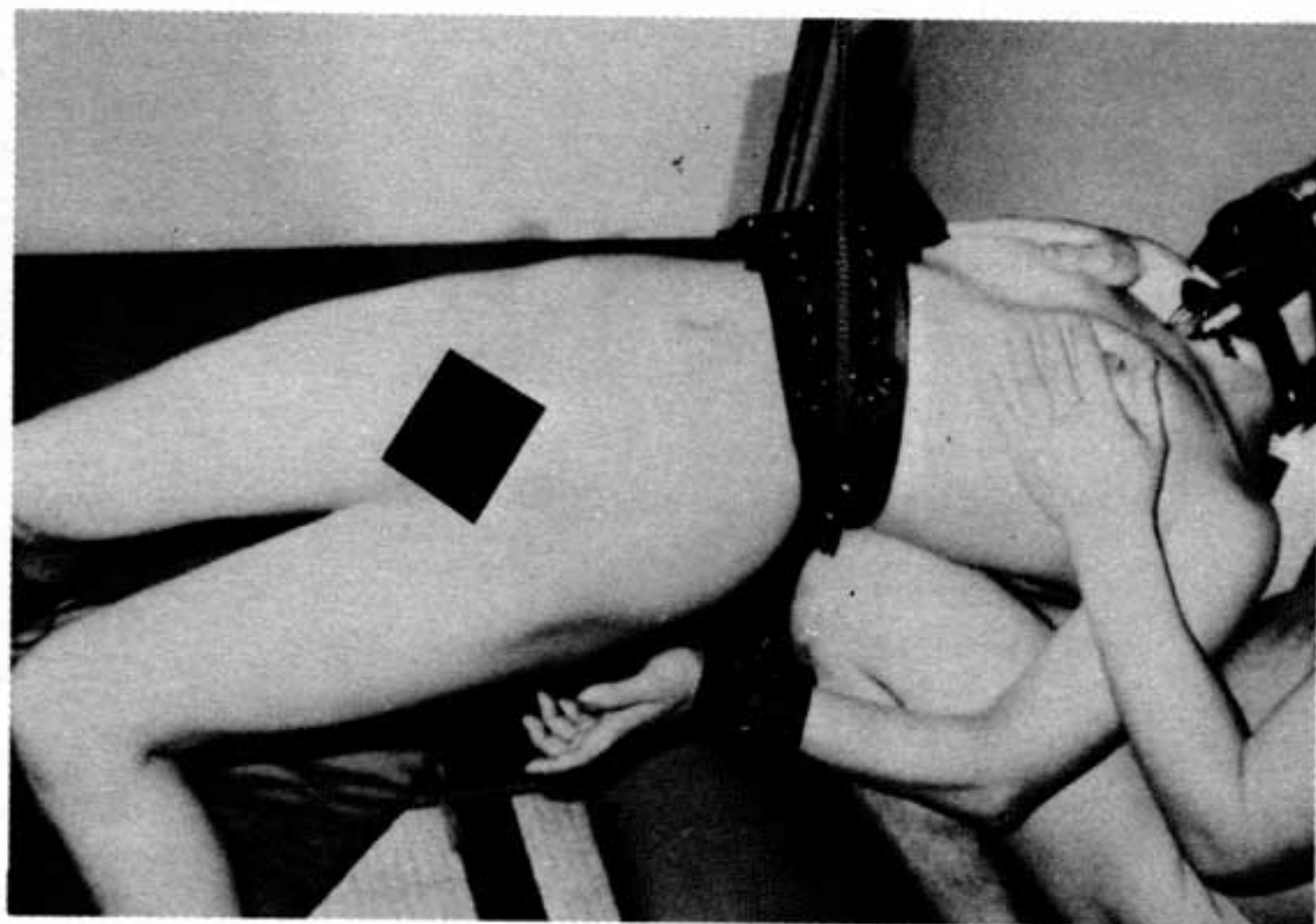
には共鳴出来ない。あれやこれや文句を云っている、変形吊りは、実際に使えるものはそれほど多くはないものである。

さて他人の縛りにとやかく元うより、自分の縛り（吊り）方を紹介しないと卑法と思われるので、幾つか写真と一緒に説明するが、我れながらあまり素晴らしいとも云えないものもあって、偉そうなことは云えないのだが、適当に読み流して頂きたい。

A 仰臥吊り

要するに背中を地面に向けて吊すわけである。人間は腹部より背面の方が丈夫に出来ているから、仰臥位に吊るのは比較的苦痛が少ない。腹部を下にした時ほど縄の圧迫に氣を使わなくても大丈夫である。

写真①は胴に太い革のベルトをはめて、これで吊ってある。このように巾の広いものの方が痛みは少ないとか、殆んどないといっているが、縄を何箇所かにかけてそれで吊っても十分に耐えられる。この時は革のムードで撮ったので革の猿轡に、革の手錠、そして革の足錠というスタイルで吊ってある。足錠からくさりで身体が水平になるように吊したのが、さて、出来映えはどんなものだろう



か。私自身としては、奇術で空に浮んだ美女といったようなものを連想してしまい、あまりよいポーズとも思えないので、その後はやめたことがない。

ただ、実用的に見れば、これは大変に利用価値の高い吊りで、左右の足を大きく広げる

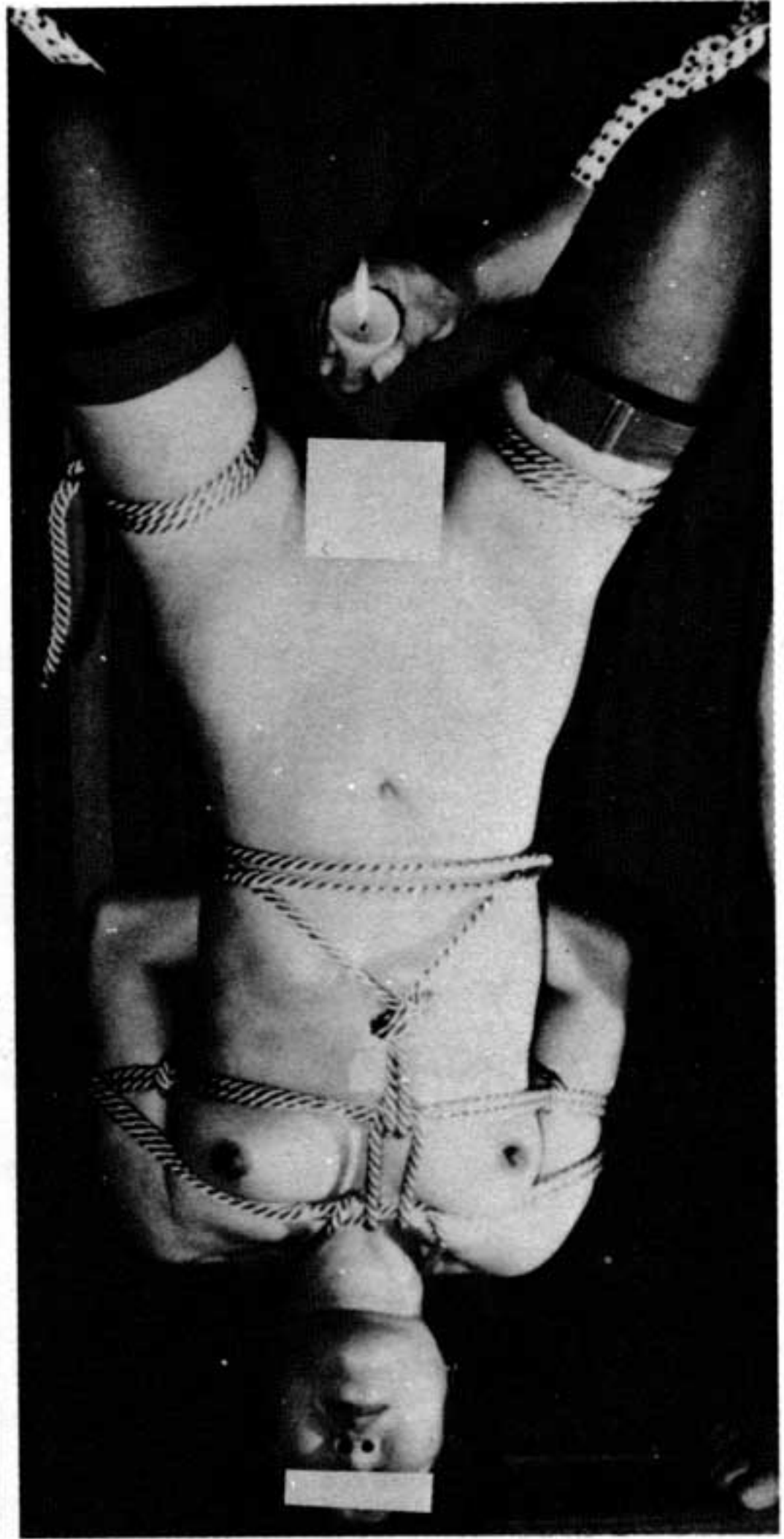
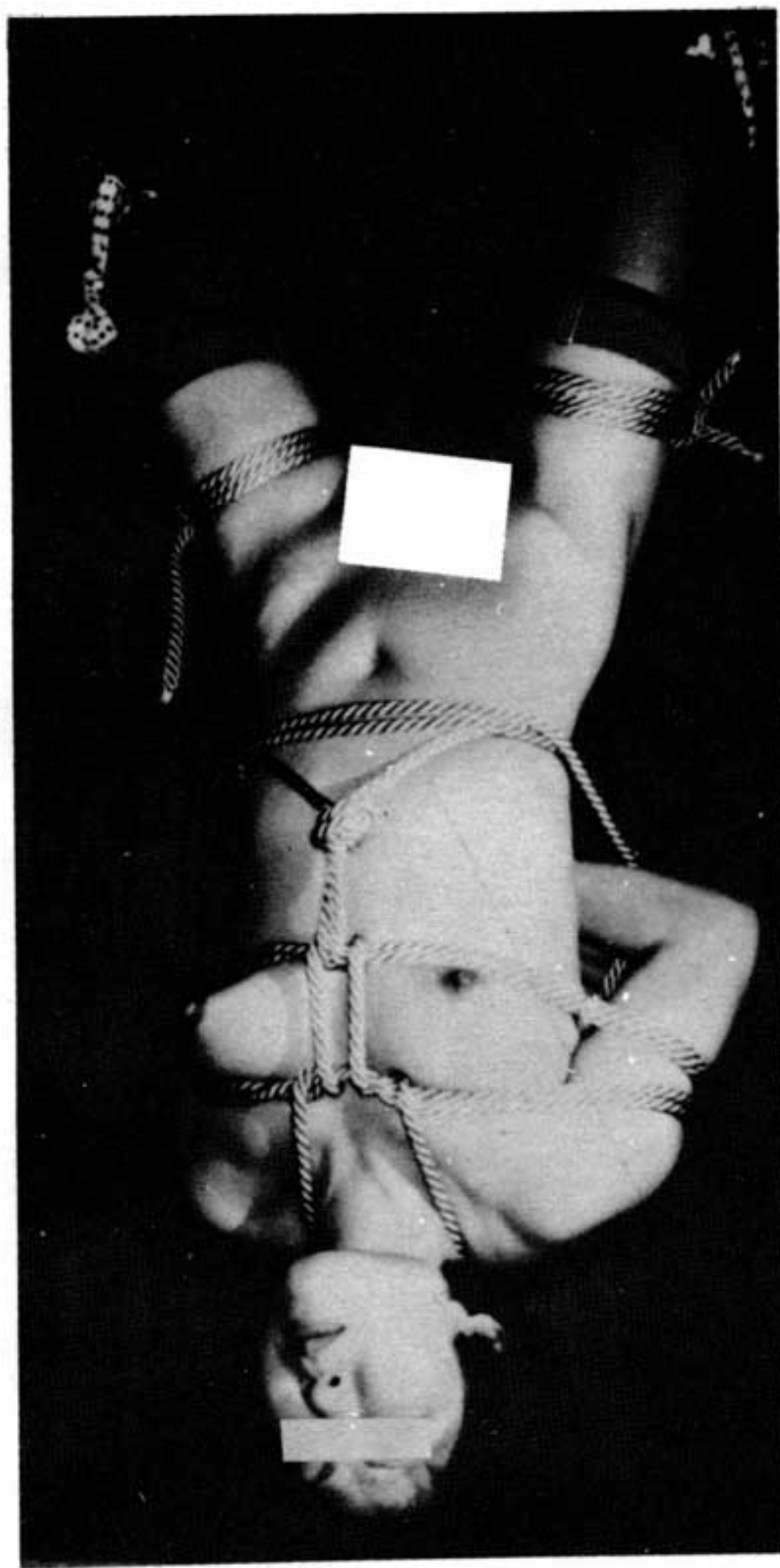
か、或いは、写真②のように足だけ降ろして軽く地面につくようにしておけば、なにをやるのには最適のポーズとなる。空中ブランコベッドより、もっと、もっと、軽快に動かし、女性には殆んど苦痛を与えず、双方の利益が一致する。

したがって、このポーズは鑑賞用というより、実用的なものと考えた方がよい。そちらの方に重点を置かれる方にはおすすり品ということになる。そういう所を撮った写真もあるが、誌上掲載は無理と思うので、無難な所でお茶を濁しておこう。

この吊り方のテクニクとしては別に特別なものはない。立ったまま、鴨居などから吊り縄を降り、胸か腹部で適当な所に結びつけ、おもむろに仰向けにすればよいので、一寸頭をもつてやれば、さして不安もなく仰臥位に出来る。その後、お好みにより一直線に伸ばして水平吊りにしたり、足を曲げてみてもよい。特にむずかしい点も、危険なこともないので詳しい説明はいらないと思う。

B 膝逆吊り

写真③と④でおわりのように、逆さ吊りには違いないのだが、足首で吊らず、膝で吊



った所が少し違う。足首で吊ったものと、多少印象が違うのは、足首吊りより縦長の感じが少なくコンパクトに見えるからであろう。これも悪口を云えば、体操の鉄棒でこんな形にぶら下ると同じということになるが、まあそれよりは色気がありはしないだろうか。特に後手に縛られた女は、かなりの恐怖感があるし、頭に血がのぼってくるのは他の逆さ

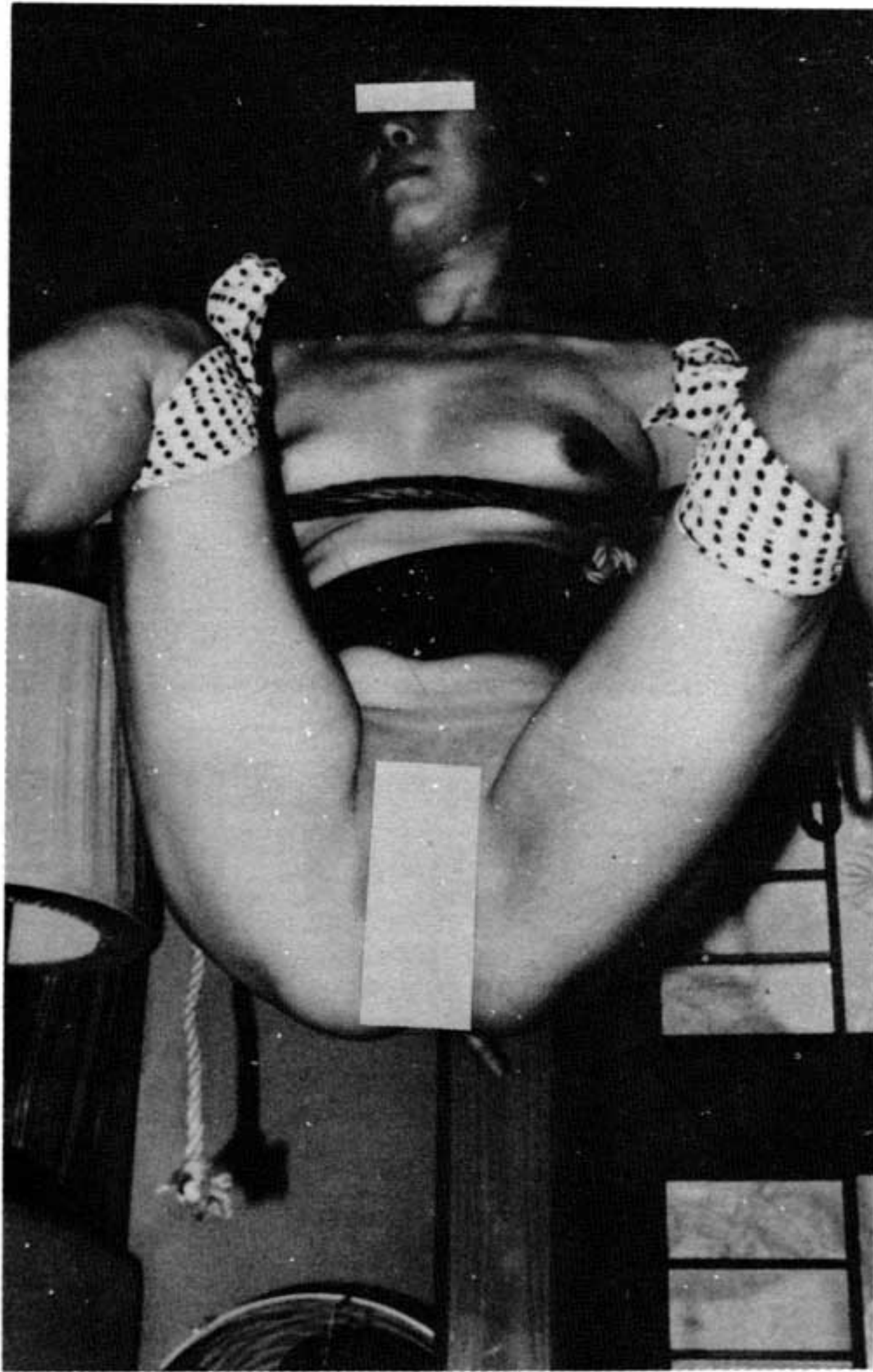
吊りと同じである。苦痛の度合は足首で吊るより多少楽のようだ。膝の所を手拭いで縛っているが、縄で縛っても短時間ならばなんとかゆけそうである。足首と太股を縛り合わせ、おいた方が安全だし、太股に噛み込む縄目はまた魅力的だからちゃんと縛る方がよい。この吊り方は、身長以上の高さがとれない所でも吊ることが出来る。足首で縛って吊る

すと頭が下についてしまうような場所で使うと最もよろしい。もちろん、もっと高い所でやってもよいのだが、縛る側が一人の時は、あまり高い所に吊るのはむずかしい。というのは、逆さ吊りの時と同じ手順で女を台の上に仰臥させ、膝を上にもちあげておいて吊りひもで鴨居に連結するわけだが、足首のように高くは持ち上がらない。膝から足首までの長さの分だけ高い台を用意すればよいわけだが、実際には、丁度良い台がないのが普通である。

とすると、どうしても低い位置に吊すことになり、写真のような具合になってしまう。それでも、カメラの位置を工夫すると、写真の上ではなんとか恰好がつくものである。十分間位はなんとか持つので、少し余裕をもって、いじめたり可愛がったりしながら、写真がとれるのがこの膝逆吊りの長所であろう。

C 後手開股吊り

どうも説明的な気の利かないネーミングで気がひけるが、後手に縛り、開股するように吊したものである。写真⑤では柱を背に縛っている、ブラブラとゆれることはなく、女囚は割合と落着いているようだ。しかし安





心して落ち着かせておいては不可ないので、当然いろいろな攻撃が加えられることになる。あまり良い写真がなくて、どんな縛りかわかりにくいかも知れないが、例によって、女囚を台の上に立たせ、柱の後ろで両手を縛り、片



方ずつ膝にかけた縄で吊り上げたものである。体重は、両膝と、腰に廻わした革のベルトにかかっているが、膝の方に多くかけた方が苦痛が少ない。腹部をあまりひどく締めつける

まうから、間違っても腹部だけに体重がかかるような縛り方をしては不可ない。実は大分前に、佐野みさ子を腹部で柱に縛りつけ足を浮かした所、意識がおかしくなって、大声でわけのわからない事を叫び出してあわてたことがあるので、自分の失敗に照らして御注意申し上げる次第である。

柱を背負わずに、鴨居などから宙ぶらりに吊るすことも出来るが、これはブラブラとゆれて不安定なものだから、女は少々怖がる。それはよいとしても、吊るす時、片足で立たせて、他方の膝を吊り上げるわけだが、この時、柱を背負っていないとフラフラしてしまい、あまり膝を高く吊り上げられないことが多い。そうすると、だらしない形になってしまうので、どちらかと云えば柱を背負わせてやった方が、女囚もプレイヤーも楽でしかも形良く仕上がる。

D T M吊り

T Mとは両手を上げた所がTで、両足がMという形になるからそう名付けたのだが、これまた即物的で、あまり色気のないネーミングではある。ロマン派などというペンネームにもとる所甚だしいと、反省しているが、誰



か良い名前を付けてくれないものだろうか。
写真⑥は補助棒を使わず、直接鴨居から吊るしたもので、一寸ずり落ちたような恰好になっているのは、胸から吊ったひもが長すぎたようだ。足まで縛ったのはいささか蛇足の

嫌いがある。吊り方は、Cの後手開股と全く同じで、両手を拡げて縛る所だけが違う。

写真⑦は最近の作品で、⑥に較べると、大分技術的な進歩があると、自分では考えているがどんなものだろう。この場合は補助棒を使い、あらかじめ地上でゆっくりと縛り、男性二人で、その補助棒をエイツと持ち上げ、長押しにかけ渡したものである。二人がかりで持上げると、仕事が楽で、かつ高い所に吊り上げられるのが有難い。相変らず膝の上を手拭いで縛ってあるのは、痛みを考えてのことだが、縄で吊せればその方が美しいことは勿論である。この辺は私の妥協なので、そのうち妥協なしでやってみたいものである。

写真⑦では、まだ何んの責めも加えていないので、女囚は余裕があつて微笑んでいる。写真⑧では、縄のムチで叩かれているが、その悲鳴は、スポンジの猿轡に押し殺されてしまっている。女囚は前号と同じく、秋野英子で、この可哀そうな美女をムチ打っている悪い奴は坂本信三氏である。坂本氏は私と違って、ハード派で、ムチ打ちどころか、バイブレーターを埋め込んで、ガムテープで封をしてしまい、空中バイブレーションをやらしたり、空中浣腸から、最後には、ローソクで

穴炙りまでやる大悪漢である。私はハラハラしながら、もっぱら写真をとったり、ビデオを写したりしているだけで大変善良な市民なのだが、信用してもらえかな？

とにかく、延々と二十分に及ぶ責めを加えても失神しない秋野英子も相当なマゾ女で、得難いプレイメイトである。こんなひどい責めを受けることを知っていながら、ノコノコと持ち合わせの場にやってくるのだから、可愛い可愛い女囚と思わないわけにはゆかない。

さて、今回は、この可愛そうな秋野英子の雪責めの巻を御覧に入れる予定である。季節を合わせるために温めておいた秘蔵写真を提供するので、編集部さん。あまり発行が遅れて、来年の桜の咲く頃に発行というようになるとにならないようお願いします。寒い季節に読んでももらえないと、間の抜けたものになってしまうので、シュンに召し上がってもらいたい料理人の気持をくんでくれるものと期待して、今回は終りにする次第、よって皆さんの如し。

尿道自慰 異物挿入

睦月笛一郎

自慰行為にも様々な形態があるようだが、その中のひとつ、尿道自慰について触れてみたい。

尿道自慰マニアの行きつく先は、各種異物の挿入となる。

前立線肥大で排尿固難な畔性や子宮摘出など、腹腔内の諸手術で安静を必要とする女性に金属又は留置カテーテルを挿入して導尿をする医療施術以外にマニアが狭い尿道へ無理矢理に器物を通して或る種の苦痛を愉しむことは、一般の人の想像の埒外らしい。

嚙は脇道に逸れるが、キンゼイやマスター

ズの報告では成熟した女性の場合、男性自身の没入と運動によってエクスタシーに到達することを前提として性行為が語られている。

しかし、最近、発刊されたホイット女史のレポート中の自慰の項ではクリストス、バギナを指などで刺戟する行為が自慰の三分の一を占め、オルガスムに到達するには必ずしも男性というパアトナアを必要としない統計がある。

更に、解剖学的な見地からすると女体中で最も性的に鋭敏な箇所はクリトリスであると謂われている。これは、男性自身の終末で包

蔵する知覚神経と同数が十分の一にも満たぬ小さなクリトリスに集中しているのだから、女は男より遙かに敏感なのは勿論である。

この知覚神経は尿道を包むようにして脊椎内へと走り、女性の場合、一部が左右の鼠蹊部に達している。よく、悪徳アンマが性器に触れずに女性を愉悦状態に陥入れる（所謂、味な気分させる）のは、この箇所を軽く連続的に圧するからである。

人間の軀の組織はよくしたもので、皮質の浅い層にだけ痛い、痒いなどといった感覚があるだけで内蔵された部分は案外、純いものだ。

そのためにか？ 尿道自慰は男性に比較して女性の方が体験例が遙かに多いと謂われるのも首肯ける。マニアは無自覚な内に最初は尿道行附近を悪戯し、段々と深部に異物を侵入させるようになる。

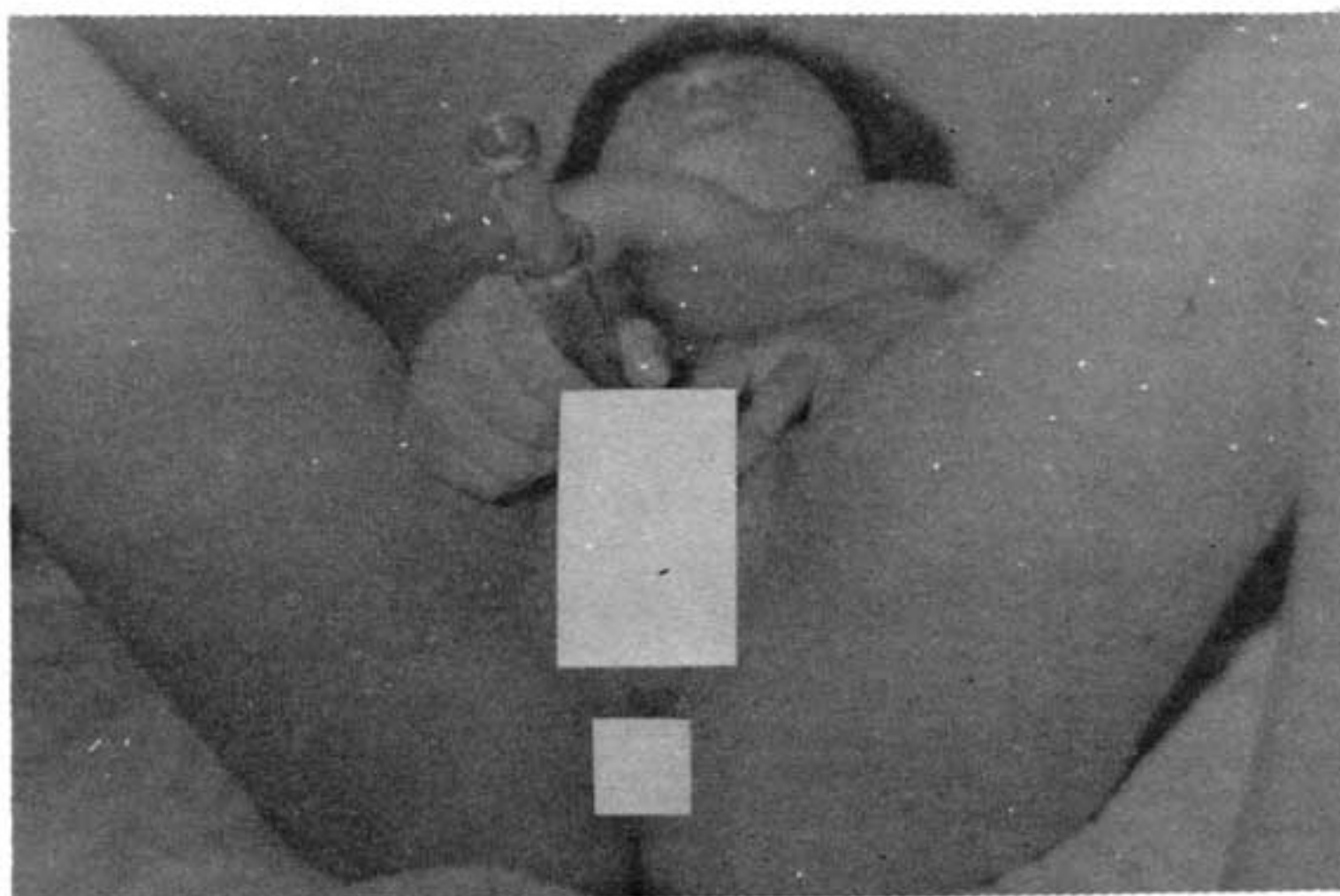
森欧外全集には、女学生の自慰用具として電球、野菜などの他に体温計が登場する。別に説明はないが体温計は尿道自慰に用いられたのだろう。

また、十数年前の泌尿器科の機関誌に載った尿道自慰の極端な例では、某女学生（十七才）が下腹部に鈍い痛みを訴えて母親に付き

添われて受診、内科、産婦人科と廻ったが原因が判らず、最後に泌尿器科に来た。

医師が患者の下腹部のレントゲン写真を撮ってみるとヘヤピン、鉛筆のキャップ、グラスのスポイトなどが六点、膀胱内に収っていた。

当人に問いただしてみると、快感を得るた



めに最初は尿道口附近で悪戯していたのが段々とエスカレートして膀胱内ひまで挿し込んでしまったという。ヘヤピンからスポイト、キャップと逐次、細いものから太いものと挿入したのだが膀胱内に到達して取り外せなくても痛みや異物感がなかったので安心して、尿道自慰を続けていたらしい。

膀胱は男性の場合、尿の充満は最高で八百ml、平均で四百七十ml。女性は男性の六分の五と謂われる。三重の筋層から成る膀胱は伸縮性に富み、収縮状態では筋層の厚さは一糎にもなるが充満時には内部が透けて見えるほど薄く伸びる。

そんな処へ、ヘヤピンなどが内壁に刺って突き抜けなら膀胱炎を併発して大事に到る処だった。

早速、開腹手術をして内蔵異物を取り除く仕儀となったが高価な尿道自慰プレイの代償ではあった。もっとも、女性は尿道が人によって差異はあるが、七十七糎と短かいので入り込み易いのかも知れない。

異物挿入の常習者をみると、大概是、男女ともゴム管の先端を内側に丸め込んだものやネラトンカテーテル類似のものを使用しているようだ。

医家の場合、導尿用には通常、金属性のカテーテルを用いている。男性用は先端部が約三十度の角度で曲っており、外径と数種ある。女性用は御承知のようにS字状をしている。

しかし、前述したようにマニアの間ではゴム質のネラトンカテーテルが最も多く利用されているようだ。よく消毒したネラトンカテーテルにオリーブ油や液状ワセリンを塗布して静かに挿入してゆく緊張感と快感は、何にも較べものがないこと、とマニアは告白していた。

只、素人考えでは細ければ細い程、挿入が容易だと考えそうだが筆者の経験からすると尿道の内径に適合した太いものの方が柔らかい壁面を傷つけることも少なく、目的を達するようだ。

この他、留置カテーテルといって先端部を空気又は消毒水で脹らまして膀胱内に長時間留めて置く純ゴム製のカテーテルがある。

金属やネラトンカテーテルの場合、硬いのでいくら丁寧に操作しても内壁を傷つけることが多い、又、脱したあとと暫くの間は小用のたびに灼熱感が付き纏う。

この点、留置カテーテルは柔らかいのでゴム球を脹らまさない限り、挿入が容易で脱し

たあとの異物感の消去も早い。しかし、いくら異物感が少ないといっても内蔵器管は拒絶反応が激しく、時には発熱や全身痙攣を伴うことがあるし、不潔な手や器具を使用して雑菌が侵入し膀胱炎や腎盂炎にならないよう注意する必要がある。

医療用の留置カテーテルは消毒の関係で一度の使い捨てだが、プレイに使うマニアはそんな勿体ないことは出来ない。只、ゴム球部分の場合は一回脹らますと元に戻らなくて次の挿入の障害になる。

カテーテルという言葉の意味はよく判らないがフランスから来たらしく、外径の規格はフランス式で統一されている。

留置カテーテルの場合、最大径がNo.30で逐次偶数刻みで小さくなってゆくが、普通に使用されるのは男性がNo.24、22、女性がNo.22、20ぐらいと思う。ゴム球部分は表示どおり、20、30ccが限度である。

筆者の知人の某氏は、奥さんに責めプレイを実施する際、先ず両鼻孔に十二号のネラトシカテーテル、それから号数外の胃洗滌用カテーテルをいとも巧みに嚥下させ、次に尿道に留置カテーテル、バギナにコルポイリントル、直腸内に十二号の胃洗滌用カテーテルを

挿入させるなど、カテーテルに取り憑かれたマニアである。

又、別のマニアの女体カテーテル責めに立合ったことがある。このマニアを仮に、B氏とする。B氏は医家願望が強いらしく、大仰なほど医療用具を準備していた。

やや肥り気味の奥さんを裸かにすると、簡単に両手首を前面で縛したあと、風呂場に連れて行って両脚を開かせ、尿道口を中心にアヌスまで逆性固型石鹼で入念に洗った。みると、デルタの上の茂みは見事に刈り取られていた。「プレイをする一時間ほど前から、うんと水を吞ませて膀胱を脹らませて置くのですよ。プレイに使う留置カテーテルや三十ccの浣腸用のガラスポンプ、尿を止める木栓などは前もって濃盆に満した逆性石鹼の希釈液に漬けて使用直前に洗い流すことにしています。」

B氏は、カテーテルの排尿口に穿める木栓を見せて呉れた。

「ニスを幾度も塗ったのですが尿のためか、直ぐ剥けてしまいます。手にはゴム手袋か指套を穿めますが気分次第で、どちらかに決めるのです。」

B氏は逆Y字型に開いた奥さんの中心部に

水道の水を注ぎ、石鹼の泡を落すと又、念を入れて逆性石鹼を塗り始めた。

「雑菌の感染が恐いですからね。念には念を入れるのです。しかし、消毒液は強いですから完全に洗い落さないで後で大変な目にあう」

B氏は筆者に語るともなく、自分の手をブラシでこすり始めた。

プレイの場所は、八畳の寝室だった。畳の上には幅一米、長さ一米半ぐらいのゴム張りの防水布が敷かれてあった。その黒い防水布は幾度も使用されたとみえて嫌やな艶を電燈の光に反射している。

裸身の被虐体が股部から脚に水をしたたかせて、防水布の上にぎごちなく仰臥した。矢張り、他人に見られる羞恥心からか、それとそれが常に行うプレイの演技なのか、ぶよついた脚を固く閉じていた。

「さア、開くん」

夫の声に、仰臥した女体は心持ち、両脚を左右に動かしたが充分ではない。

「もっと広げろ。横着をするんじゃない」
夫の叱声に、やっと両膝が左と右に思い切って開いた。

B氏の右手には、二指指套が穿められている。横に置いてある濃盆の中から留置カテー

テルを掴むと、オリーブ油の中になっぷりと漬けた。そして、零が垂れるのも構わずに固く閉じている小さな扉を押し開いて、押入ていった。

そのとき、女体はぴくりと痙攣したように思えた。B氏の指が前に進むとカテーテルは静かに尿道口に姿を消してゆく。

「尿道も竹の様に結節があります。殊に、膀胱に入るときは抵抗があります。無理をしない程度に力を入れると、成功します」

プレイの前に大量の水を吞ませることは、排尿強制の愉しみよりもカテーテルの先端が膀胱内に這入った証拠になるから、無理な挿入を止める目安になる為だと、B氏はいう。

突然、カテーテルの排水口から黄色い尿が飛び出してきて、防水布を濡らした。B氏は落着いて木栓をすると、カテーテルから指を放した。左右に拡げられた女体の下腹部の中心からゴムの管がぶら下っている光景は、全く奇妙だった。カテーテルは、微動だもしなかった。

「太めのものを挿入したので、このままでも抜けませんよ。今夜は空気を入れずに元を紙伴創膏で固定しましょう」

指套を脱したB氏は、先ず四ヶ所ほど伴創



らんまどう画

膏でカテーテルを女体に固定してから、紙オシメを上に乗せた病人用のオシメカバーを自分の妻の尻に敷く。そして、紙オシメの上に厚いパットを更に載せ、木栓を脱したカテーテルの端をパットに包み込むようにして、器用にオシメカバーを女体に装着すると、両手首の縛を解いた。

「紙オシメの上に載せたものは、何？」

「あれは、産褥パットといって産後に、悪露が洩れるのを防ぐものです。紙オシメだけですと尿の量が多いときは溢れて布団を汚すことがありますから」

「カテーテルは何時まで入れて置くのです」

「明朝六時頃まで、七前間ぐらいかな。途中で一回はオシメを替えてやりますがネ」

「すると、貴男のアップ傾向は、女性に尿道カテーテルを強制するSだけでもないようですね。オシメカバーフェチか、幼児願望を奥さんに代えて実行して居られるのでは」

「尿道カテーテルを自分自身にも利用しますからSでもないし、自分のアップ傾向なんかはつきり判りませんよ。オシメカバーフェチといっても小便は強要しても、大便の方は御免だし。これが生理の時は産褥バンドに産褥パッドを当てて全部仕末してやりますししネ。」

只、縛ったり叩いたり除り好みません」

「尿道が炎症を起したことは、ありませんか」

「最近は何も、ありません。プレイを始めた頃は二度ほど、泌尿器科の世話になりましたが女は感染し易いからと怪しまれませんでしたネ。しかし、カテーテルを使うプレイはこれ(妻)が非常に疲れるので月に一、二回しか実行しません。もう、そろそろ、罷めようかと思っています」

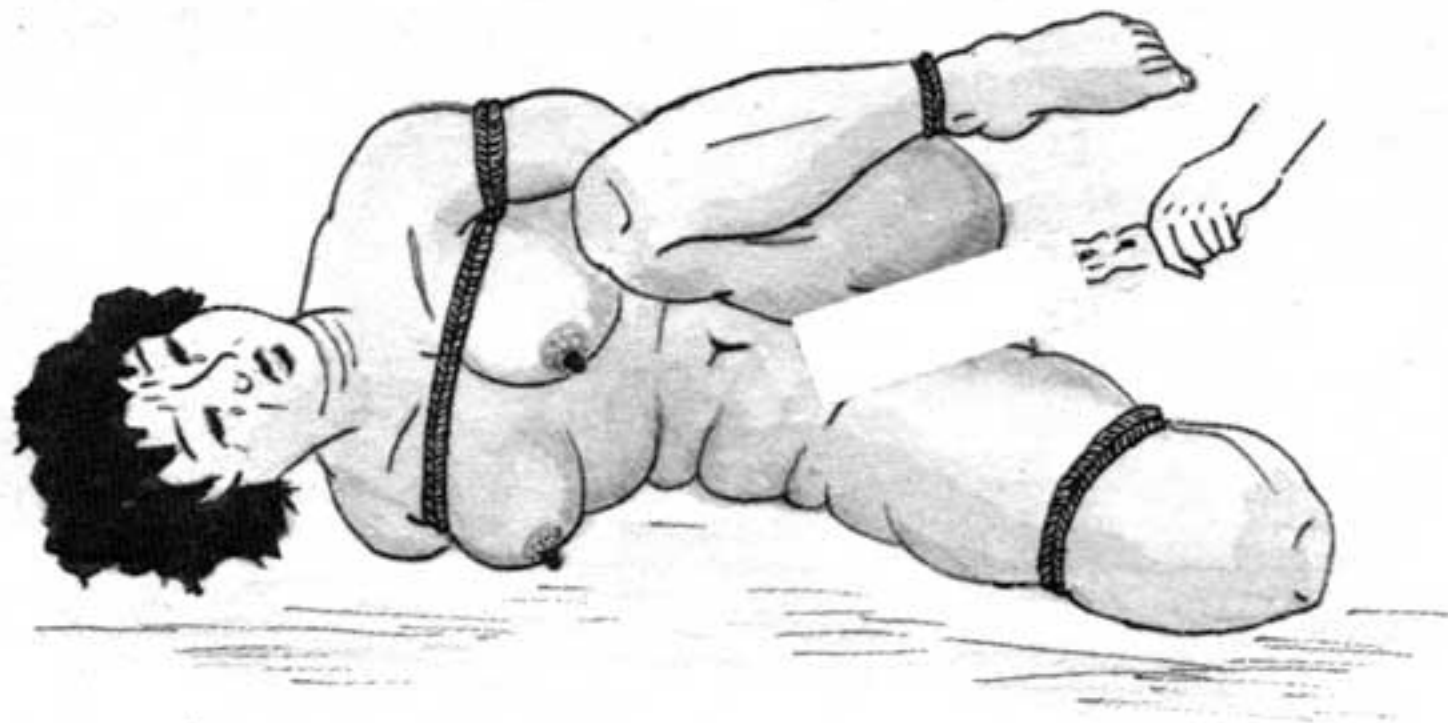
「どうしてですか？」

筆者の問いに対して、B氏は無言だった。

それにも増して不可思議だったのは、B氏宅を訪問して帰るまで、肥り気味の奥さんが終始、沈黙したままだったことである。

帰り際のB氏の挨拶は、「それでは、私は

これのオシメの世話をしながら寝ますから」だった。そして、仰臥しているオシメカバー姿の奥さんを抱きかかえると、器用に寝巻を着せ始めた。筆者は慌てて玄関で靴を穿くのも忽々に表へ出た。時計はすでに十二時を過ぎていた。白々しい気分の頭に一瞬閃いたのは、(終電に間に合うかということと玄関に鍵を掛けなくても無用心ではないかな)と、いう他愛もないことだった。駅に急ぐ路すがら、剥き出しにされた女体の中心部から



性奴記 其の一

鈴井是雄

一、腔鏡のこと

某月某日、念願のクスコー腔鏡を手に入れた。我が愛する「性奴」には、やや小さすぎるくらいはあった。のぞんでいた大型が品切れで、やむ得ず中型を求めるはめになったのである。しかし、手にしてみると意外に重量感があり、メッキされ冷たく輝くそれを手中にすると、いいしれないおもしろい胸を圧する。私が、腔鏡と云うものを知ったのは、随分と昔のこと、十年一昔というのなら、二昔も前のことになろうか。

其頃、母親が読んでいたらしい、夫婦生活

という雑誌の中に、腔鏡というものを見た記憶がある。当時は、それがどんな目的で用いられるのか、大体の見当はついていたものの、その主たる用途が、産婦人科専用のもので、今日の様にプレイに用いる術も知らず、ましてや安易に入手出来るなど思いもよらないことであった。

人間そして、生を受け、この世にうまれた男なら、誰しも、その源であるところの、女性自身を見たい欲望を一度は抱いたことであろう。しかし、我々S性指向の男の様に、その偉大なる女体を縛りあげ、強引にしかもねちっこく嬲るなど論外のことと一蹴されそうである。

ある統計に依れば、世の男共は女房のお産時の立会など気持が悪くてまっぴらと出ていくそう、私など、何んともつたいないことを、と残念でならない。

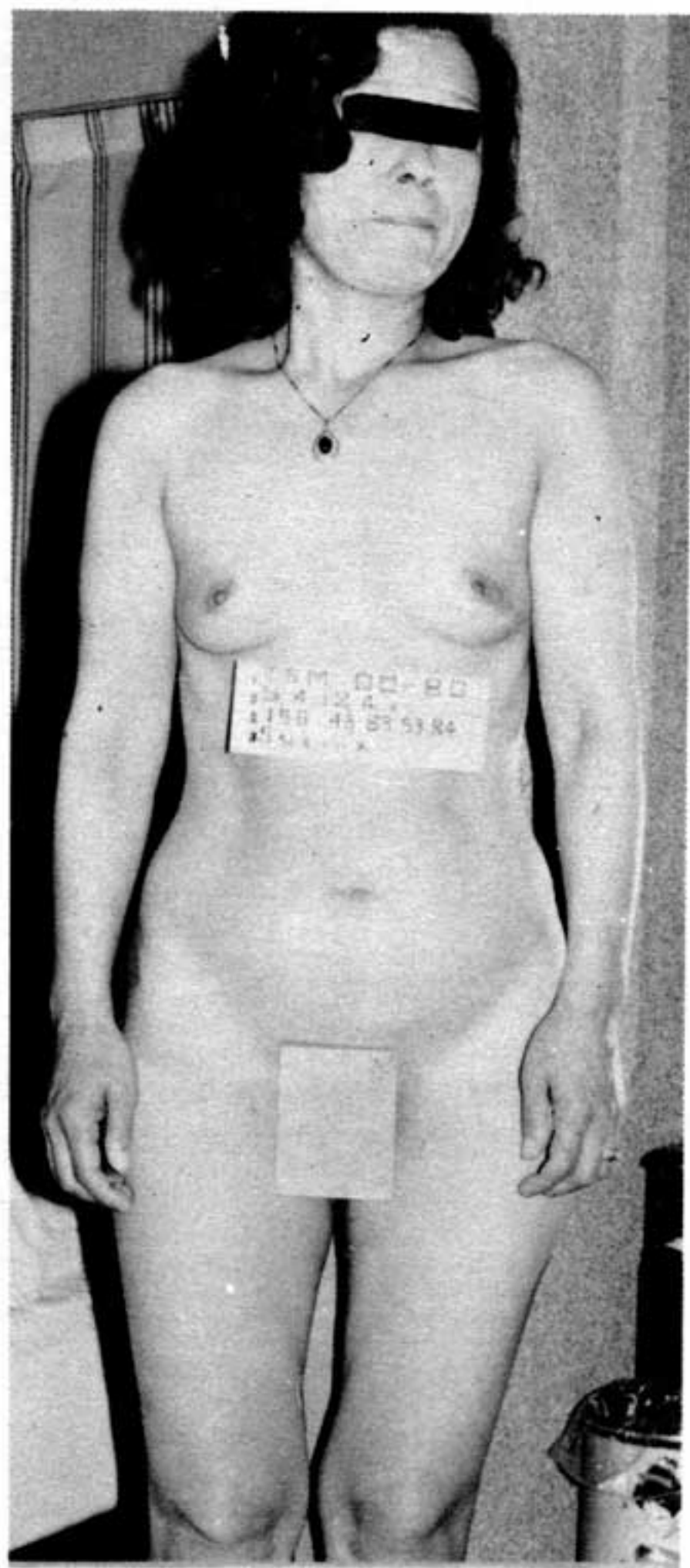
陣痛に、苦しみ悶える女体、羊水と共に生れ出る胎児、極端に変化するであろうヴァギナなど聖人でも見られるものではない。

出産の瞬間を、サディスチックに受取るなど神への冒瀆かもしれないが、私のいつわらない憧れであり、欲求心なのだ。見たら命を断つといわれてもいいとさえおもっている。

正常な状態のVや、Aは三千円も出資すれば、最底六人の女が見せて呉れる世の中、いつの日にか、出産時を観せる女が現れることを期待しているのだが。

女性が産婦人科へ入るのを好まない理由も少なからずわかる気もする。親にすら見せることのない秘所を開陳し、かつ冷たい金属製の器具を挿入され、検査を受けることへの羞恥というより一種の屈辱がそういう気にさせるのだ、と「性奴」も説明している。

入手したクスコーを一見して「嫌らしい」といった「性奴」の言葉は、世の全ての女性が、これ等婦人科の器具に依せる嫌悪感であろう。



「性奴」に対する私の「局部責め」は、手製のプラスチックの棒状のものからはじまって、ついに本物? に到達したわけである。

こゝで「性奴」の身体(フォト①)のデータを紹介すると次の様になる。

身長・一五三。バスト・八二、ウエスト・六五。ヒップ・八四。頭髮は黒色長髪、眼は普通? 鼻はやや団子ッ鼻。唇は普通。

歯並やや悪し、過去にボン中の経歴あり。虫歯金冠等無し。額は両マユ毛の程にバイクで転倒した時の傷跡あり、腋毛は電気除毛手術により無し、乳房及び乳首、乳房は全体に小さい感じ、乳首も経産婦「一人出産」にしては小さい。左乳房に乳ガン初期の手術

傷有り。ヘソは下向き、下腹部、ヘソ左斜下より恥丘にかけ妊娠時の裂傷跡数本、恥丘はやや高い。恥毛、極めて少ない。十年前電気除毛で腋毛をのぞく時、無理に除毛させたため下部は、陰格上部近となり他の部分には毛は無い。最近はこのことをよくグチる様になったが、私には理想的な局部周辺である。

陰核は訓練の成果か? かなり肥大、小陰唇、肥大最大幅部三センチー一・五センチ近い。膣口は最大拡張時、九センチー一〇センチ近く拡張可能。膣内、最長一三センチー一四センチ。世にいわれる上ツキ型。子宮・コウクツ。

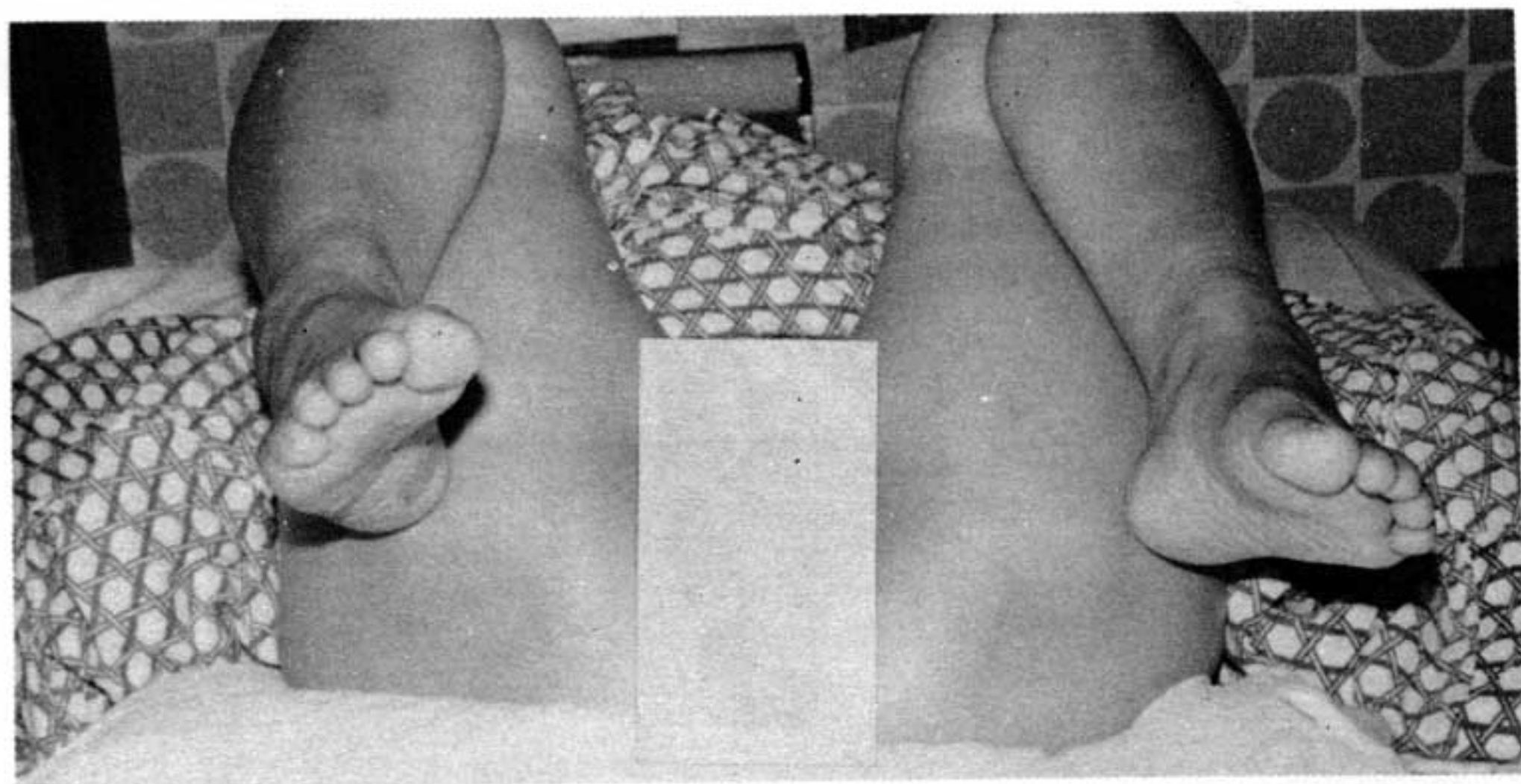
アヌス、性行為無し。ただし器具に依る挿

入拡大行為は多い。「性奴」自身その行為を嬉ぶ様子はみられない。浣腸やアナル・セックスがSMと関連をもつとも思われないので、私もあまり興味はない。もっともこれらを行う前に緊縛等を施したのちの行為なら、SM的ムードを味うことは出来るが、やはり日本人的思考? からか私にはそういった趣味はわからない。

大腿部、可もなく不可もなし。下肢、ふくらはぎから足首、私が「性奴」にもっとも強烈な魅力を感じた部分。当時は、素晴しく美しい脚線美であった。正直いって彼女の年では、多くの女性はあまり美しいと言う言葉にはほど遠い脚をしているが、例外といたい程の美しさ……と私は思った。

現在では、この名残りは多少なりともこのっではいるものの、一日、おおよそ六時間以上立続けの仕事柄(小さな一品料理屋を自営)ふくらはぎから足首にかけむくみがみられる。これも一日休養すれば元にもどるらしいが、その頃は、あまり注意してみたことはない。

足の文数、今はセンチメートルでした、十二・五センチ。忘れるところでしたが、体重は、四十九キロ。本人は中年肥りなどといったが、手頃な肉付きである。



文章で表現すると以上の様になるが、実際にはかなり退化？ していることは事実、そのさいたるものは、SEXを自ら要求しなくなったという点で、このことについては、自ら女を年をとると駄目ねッ、といった言葉でこの全てが言いあらわされている。

私の記録―をフォトを見ても一目瞭然、はつきりと出ている。SEXの持続時間は、以前と大差はないが絶頂感への登頂タイムが多少長くなったことと、愛液の量が減少気味なのがやはり気になる。

緊縛して指や器具でいたぶると身体の反応とは別に秘所が、しどどに濡れだしたのが、この頃では仲々そこまで責めこむのに骨がおれる様になった。業をにやしてしゃにむに責具を挿入しようものなら悲鳴をあげる。

悲鳴も時には、乙なものであるが、やはり愛奴と思えば無茶は出来ない。

私が常に心懸ていることは、調教するにありたり相手の肉体に、先ず快感を与えて後に徐々に苦痛を加えていくという方法である。これを逆に行くと、開発された身体といえどもなかなか、苦痛を快感へすりかえることは不可能のようで、万幅の信頼をもっている相手であっても、言葉と愛撫に依る性感の高まり

は期待出来ない様である。

では、苦痛のみを与えたら、M度八〇%の肉体と精神をもつ「性奴」はどの様に反応するか？ 答は簡単で「ノー」である。

過去に、純然たるマゾ性の女に逢う事のなかった私には、やはり、苦痛を耐えることが怪感に変化して行くというのは、フィクションであるように感じる。嬲る女体の性的ポイントを責めないで、真の拷問や苛責が性的興奮へ結びつくということは、あまり期待しない方がよろしいようである。

我々が、責める女体のマゾ化を望むのは、やはり容易に到達し得ないことを知らず知らず悟っているからに他ならないのではなからうか？ こうあってほしいと思う願望が、その時々、の行為中における相手の発する呻き声や身体の反応を自からの都合の良い方へ解釈しているのではないか。

SMPの最中にこういった観念があつて完全にその行為に埋没できないことも、私のうがった考えを増長させる一つの要因かもしれない。行為中覚めている、ということも必要であろうが完全にのめり込みたい時には、不用品なものの一つである。

あれほど期待をもって入手した腔鏡も、こ

うした観念的発想？ からすれば、この使用方法も医者とは大同小異、さして変化を得られないままに終ってしまった。(フォト②)

「性奴」共々詰らない……といった感想である。さしてムードの高まりもなく挿入して抜け、元来みることの出来ない子宮をじっくり眺めた、というにすぎない。

只Sフォト製作に於いてなら何らかのムード的役割をもつことが出来る器具であろうことはわかる。今後この器具による責めのアイデア「実用的なものに限る」をつのりたい。

優秀作には、サン・アンド・ムーン誌より相應の報償金は、出ないこと(?)になっている。

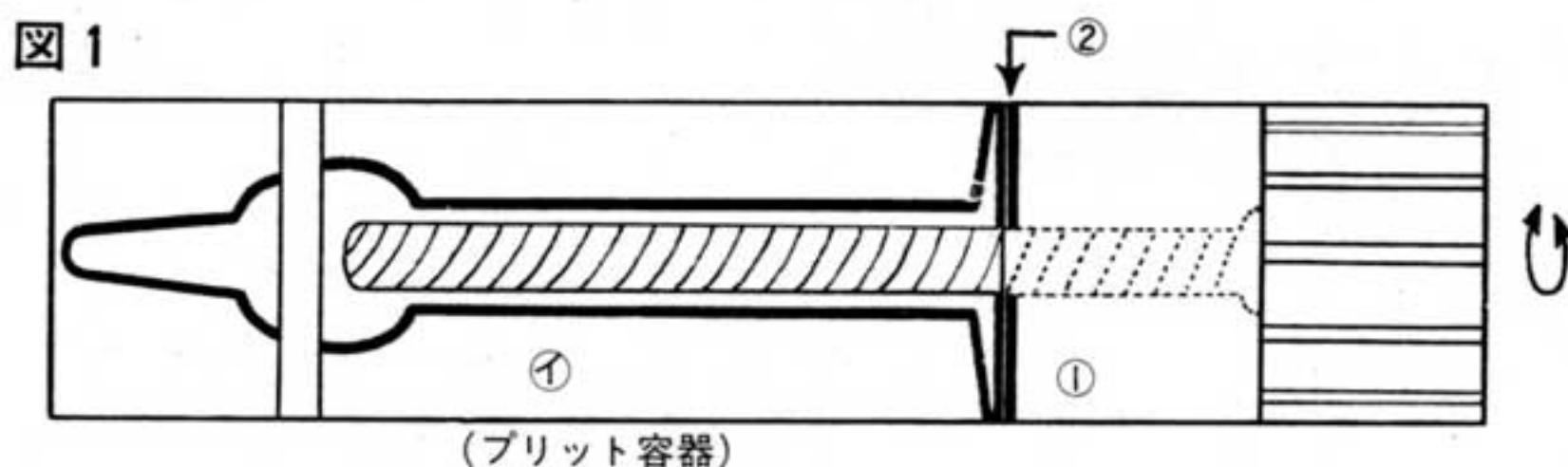
二、手造り器具各種

廃物利用の最大の優秀作に、口紅タイプのノリの空用器を利用した肛門挿入器がある。

私製にはコクヨのジャンボサイズを使用、それにプラスチック製の園芸用薬液計量スポイト、瞬間接着剤、以上のもので極めて手軽に出来る。(図参照)

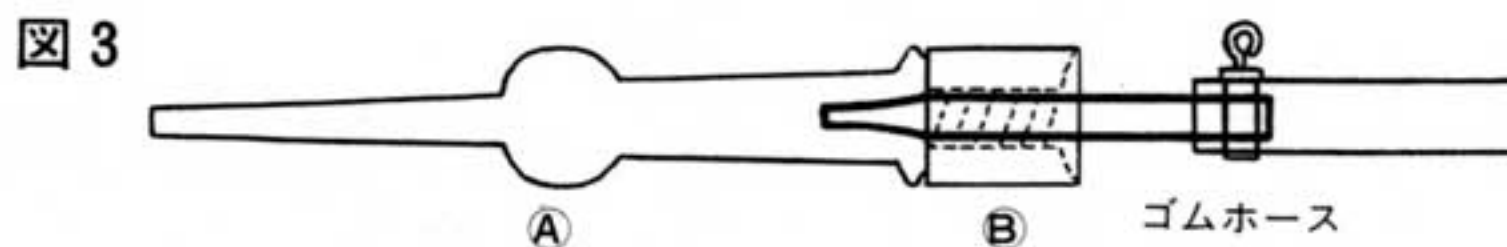
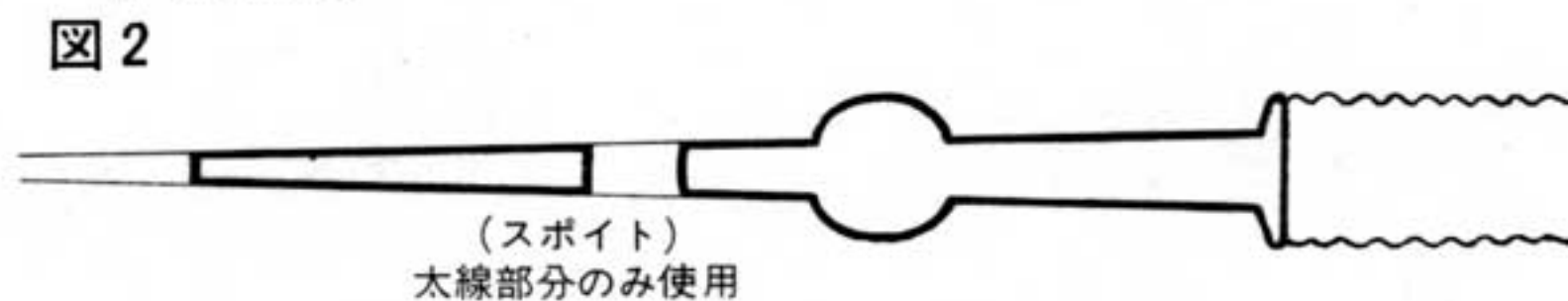
ネジ込みの圧力を利用するので案外容器に挿入可能。スポイトの球状部が脱落防止止する。図③の様にホースから流水し胎内へ浣腸

参 考 図



- ① 上下に昇降する部分(図では横位置のため左右移動)
- ② この部分にスポイトと可動部を接着する

注：スポイト②の部分は熱湯をかけ図1の①可動部の穴へ素早くネジ込むようにするとネジ山がつく。



も出来る。ただし、①とスポイト部②との密着性が悪いので多量の水を一気に入れようとするとぬけて水びたしとなるから要注意。

気長にたのしみながらやるべし。応用の参考フォトがないので悪しからず。

アヌス栓、長さ約一〇センチ。元二センチ先五ミリ、ネジ込み式、プラスチック製。

これも道端にころがっていた廃物を適当な長さに切り、ガスコンロの炎であぶりながら

ねじって、ねじ山をつり、先端を細く中太とし直後再び細めたもの。通常使用に脱落の可能性はない。が、少し力めば簡単に落ちる。

これを挿入して外出しても支障なし。フォト（編集註・掲載不可能のため省略）

器具名なし、V&A玩弄器？ とでも呼ぶことのある棒状責具。友人の成形工場からもらったプラスチック製のゲートを利用したもの。Vえ挿入する責棒は膣口のサイズを確

実に計り膣内の拡張限度を計算、リミットいっぱい製作。挿入時に多少の苦痛を訴えるが入ってしまったえばケロッとしている。挿入部は二本に分れ一方が曲線をもち、圧迫拡大の部分他方は直線的で先端が反っており動かすことに依り膣内壁をまさぐる目的をもつ。

A挿入棒は曲線部の下からつけていたが一体化のためVとAに同時挿入が困難であるのと、一度くわえ込むとV部のみを可動させることが出来ないで離脱させた。格別プラスチックのゲートでなければならぬこともないので意外に身の廻りの日用雑貨の中から代用出来るものがありそう。

注意を要するのは、Vの訓練がしてないと、準備行為なしのまま挿入しようとするとならぬに裂傷をつけることになり易い、脱落しない最少限度で挿入棒の曲げは工夫されたい。ただし、三人位を出産した経産婦ならこの限りではなさそうです。フォト（編集註・掲載不可能のため省略）

V・A両用責め棒

これもプラスチック製の電話台最上部の棒の先をはずし二本を接着したもの。一本が約十四センチ、二本合せると約三〇センチにもなるので使用目的は比較的多い。フォト③（編



集註・参考フォト二点のうち一点は掲載不可
能)

クリップ(金属製洗濯バサミ)

三個のクリップをゴム紐で結んでだけの代
物。主たる使用例、其の一、両乳首と舌。其
の二、ラビアにクリトリス。強烈な苦痛を与
えるらしい。あくまで他の責具の附加物的役
目である。(フォト④)

その他種々雑多、自分でも何んの目的でつ
くったのかわからない。こまごまとした一見



ガラクた風なものばかり、他人がみればさて
なんと思うか。が、よくしたものでなんと
くプレイ時にはつかうから面白い。既製のS
M用具? が割りと少ない。カフ・リンク「手
錠」犬の首輪、綿ロープ太細数種位である。
パイプ中太一本、これはSM用品の類には
入らないから、やはり少ないという感じであ
るが諸兄は、いかがでしょうか。

用具・用品が少ないからSMPの限度があ
ると思わないが、少なくとも一本のロープ
のみとプラス、首輪、あるいは手錠があれば
何等かの変化の得られる事は必定、とすれば
プレイの複雑化イコール用品用具の多少につ
ながるともみられる。反面SMPが必ずしも
用品用具で拘束されたものとは限らないけれ
ど視覚的な感覚が九分九厘まで支配するの
ではないか、と思われるこういった世界にあっ
ては、やはり用品用具の多少は即、プレイに
表現されるとも考えられる。

この様に書くと、視覚に以存するSMは何
か知的感覚が乏しいようにもみられがちであ
るが、観念的SM主義はとかく独善的になり
易い欠点? をもつともいえそう。

実害? の多少で評価すれば、後者に軍配

があがるであろうが、私自身、面倒臭いとい
う気もあって、直接感覚できる前者一本槍で
通して来た。SMにしろ、SMPにしろマニ
ア間のコミュニケーションが非常に少ない。
真剣に訴えても適当にあしらわれたり、金
銭で売買をしようとするやからがいては、私
共のような、名もなく金もない者はなす術を
しらず、ついついマンネリをなげきつつ「死
すより他になすべきを知らず。

真性のMにしろ、偽装的Mにしろプレイメ
イトを持つ諸兄は、もっと己が胸襟を開くべ
きではないだろうか? S人間を自覚する者
はとかく地下に潜りたがるようで情ない。

己が性格を満天下に公言しても恥ずべき事
はないと思う。公開することの是非は、個々
の人格? に依存するしかないとしても、あ
まりにS人間のコミニティーの貧弱さはなげ
かわしい。各誌の読者コーナーに掲載されて
いるものよ、おおよそ同人異名、確固たる信
念に裏打されたSMなら数々のペンネーム等
必要ではなからう。哀れというのか、みじめと
もいえないような気分になる。

この時点で「サン・アンド・ムーン誌」四
号が手許へ店より届く。巻頭の耽美座談会中、

世田氏の強烈なご意見に恥じ入ること多し、
いわれる通り表現されていることの中味を知らないとの言はまさに的を射ているとおもわれる。が私なりに反論めいたことを少々述べさせていただければ、おおよそこの世においてSM何々と格式ばって見たところで、しよせん独りよがりのマスターベーションにすぎないのではないか。私自身諸兄とのフォト交換を望んでも他人のするプレイを試行するつもりは毛頭ないというのが本音で、この点、桂敬紀氏がいわれる様に、自分の愛おしい「性奴」を他人の前に晒す勇氣などあろうはずもなく、ましてやカメラの素材そして、提供するなど思いもよらない。

SM愛好？ 人は、不明朗で故息な飢渴タイプが多いとは的確な言であらう。私も行は氏の様になリかねない。くどくど申すも面倒臭い。私は視覚感を第一とする。したがってフォトの縄目に文句も言うし、絵？事的な句いのある告白文章など糞くらえである。

真実とは何か同好人であればわかるはず、「サン・アンド・ムーン誌」が私の愛の手引になるはずもないし、これをよりどころにしようなど毛頭考えていない。世田氏には気まずい思いをされるかもしれないが本音である。



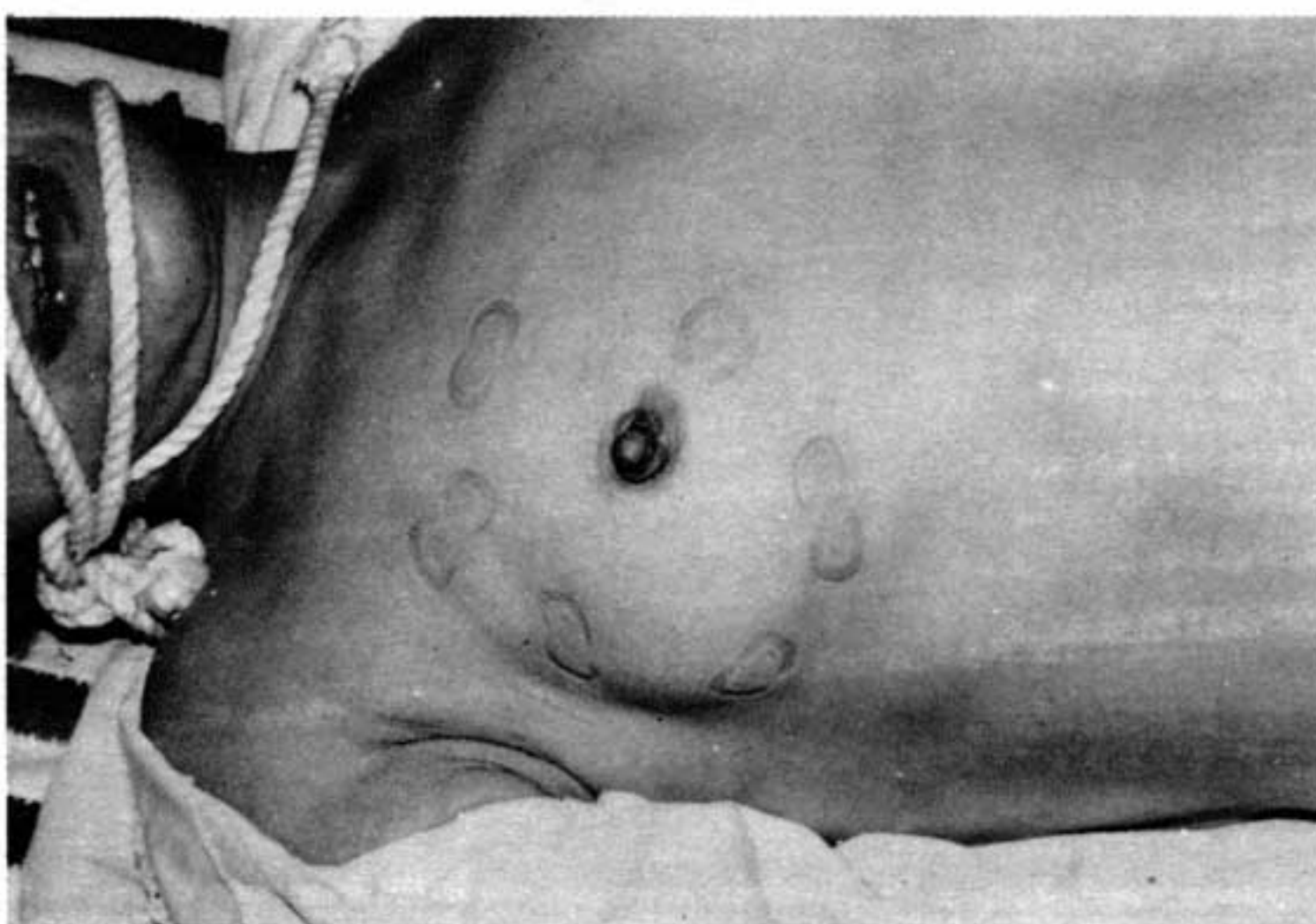
端的といえは私が、投稿する時は、不満のある時か、ウヌボレる時、無言の行は満足？していると思われたい。

ロマン派生のいわれる様にむつかしい理屈など忘れ、SMPイコール男のロマンでありたい。調教した愛奴を見せたい人も、そうでない人も皆SM人達であり、アナル、バンデージ、カントと区別の必要もあるまい。ただ

貴誌に望むのは、桂氏という様に「愛」を邪曲する者の断固ソ止してほしい。SMとは男と女のみ存在し得る世界なのだから……。

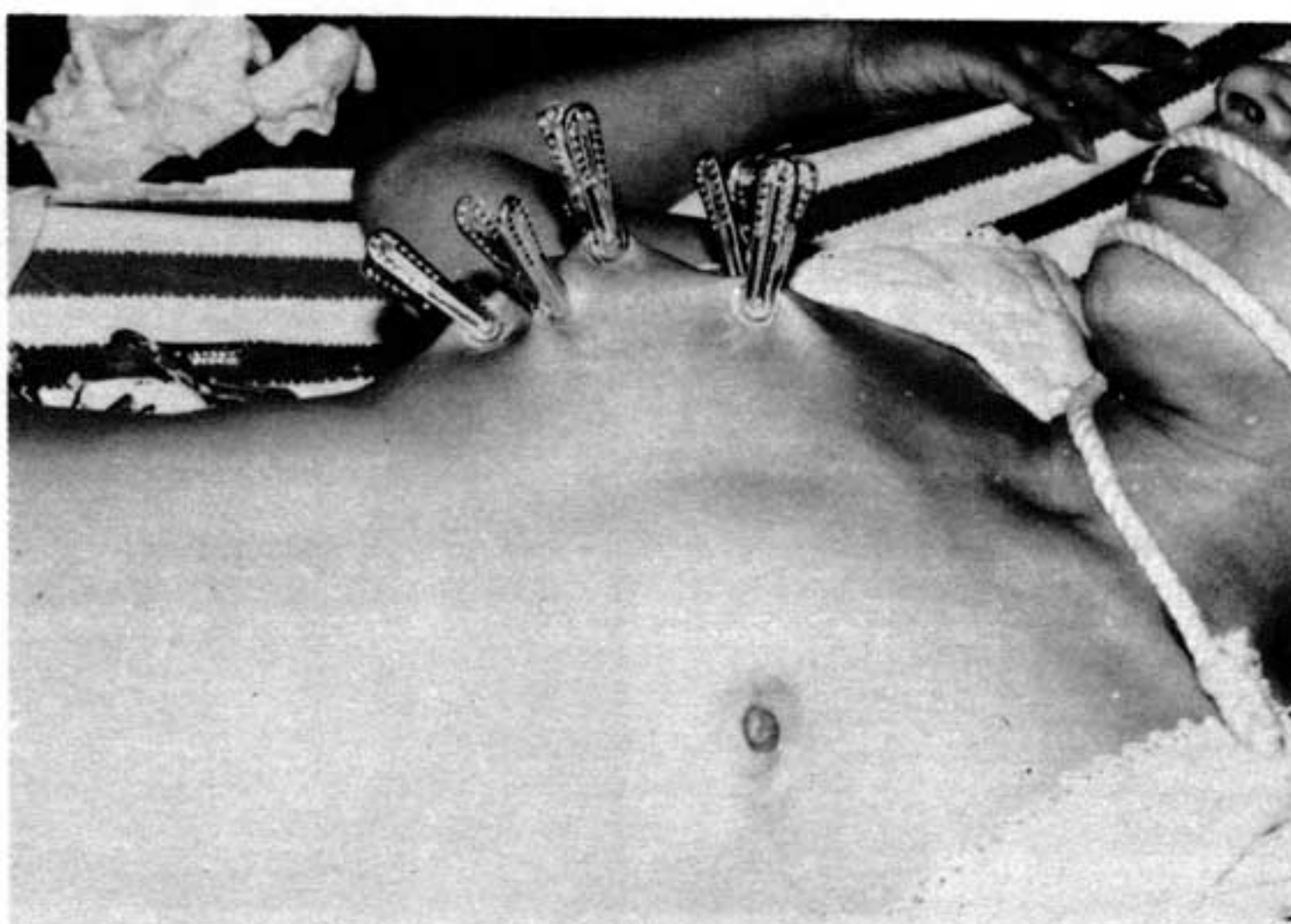
無智で文盲？ に近い私にも参加の場を終生のこしてほしい貴誌に望む。高言拝赦。

「性奴記」がおかしな方向へ進展しそうで、あわてて前稿を読む、では続けます。



さて次は、クリップ責め——

ここで言うクリップとは、日常主婦が洗濯物を干す時と使用する例のもので中位の大きさのもの。「性奴」に施す前にどんなものか自分で試してみる。たいしたことはなさそうそこで某日プレイ中に不意討に乳首とその周辺へやってみた。特にS.E.Xのポイントであ



る右乳首への加虐では、ものすごい悲鳴をあげた。そのわけは人並？ より小さい乳首がクリップにのみこまれそうな感じでつぶされている状態は、心地良い。五分、十分と時が立つにつれ苦痛の感覚は、麻痺してくる様で表情はおだやかになる。

ところが指先ではじいてみると唇を曲げて

呻く。新発見したこと、クリップ責めのウィークポイント、ヘソと恥丘の中間地点がもつとも痛がる。何故だか不明だが泣き所が又一つ出来た。ラビアやクリトリスではさほどの苦痛は表現せず、私はこのクリップ責めが好きである。最たる理由に肌にのこるクリップ跡の生々しさであろうか。その割に一風呂浴び、比較的早く元にもどるのもいろいろ便利である。(フォト⑥⑦)

「性奴」についてもつといろいろと書きたいと思ってペンをとったものの、ここまで来るとハタと止まってしまった。従然に書いてみようとおもいついたのだが、そうするといつのことになるかわからない。表現すべき手段をよく知らないということは情ないことだ。

今日はこの辺でよそう、又いつか気の向いた時に。「性奴」も「私」も「カメラ」も、何もかも変り映えしないがよろしく。

編集室註・手造り器具各種の事例として何葉かのフォトを添付いただいたけれども残念ながら割愛せざるを得なかったこと
鈴井是雄氏並びに読者にお断りしたい。
尚、手造り器具(責め具)類は性奴と別のフォトにしていたたくのも誌上公開のためには一案かと思えます。

メス豚M女初縛体験記

戸田重幸

私とSMフォトとの出逢いは、数年前にさかのぼる。御多聞にもれず「奇ク」誌が、かつて、未だはなやかなりしころ、私も書店でふと眼にとまり、手にとって立読みし、その魅力のとりこになってしまったのが「奇ク」だった。それから毎月、熱心に講読するうち常連寄稿者のH氏が、資料交換、文通の呼びかけをされているのを読み、矢も盾もたまらず、編集部に回送依頼の書簡をしたためた。

持望の返事がきたのは一カ月ほどたってからであつたろうか。しかし、H氏のもとにもかなり多数のアプローチがあつたもののように、本名、住所などは明らかにされず、更に一二月月過ぎたころ、やっと、文通に応ず

る旨の、本名を明されての親書が届いたのである。こうして私とH氏との通信による交際が開始された。主な目的はフォト交換。

私も、それまで、趣味の上で撮りためてきたヌード・フォトをお送りし、H氏からは、ご自慢の、最愛の奥様のSMPフォトが送られてくるようになった。(H氏は「奇ク」誌上でも御夫妻での投稿で、誌面をにぎあわしておられた方である)

ナマのSMフォトを初めて見たときの私の衝動は大変なものだった。SM誌など公刊物の誌上で見るのとは全くちがった世界がそこにはあつた。私も何とかしてこのすばらしい世界に足を踏み入れたい、という欲望が興つ

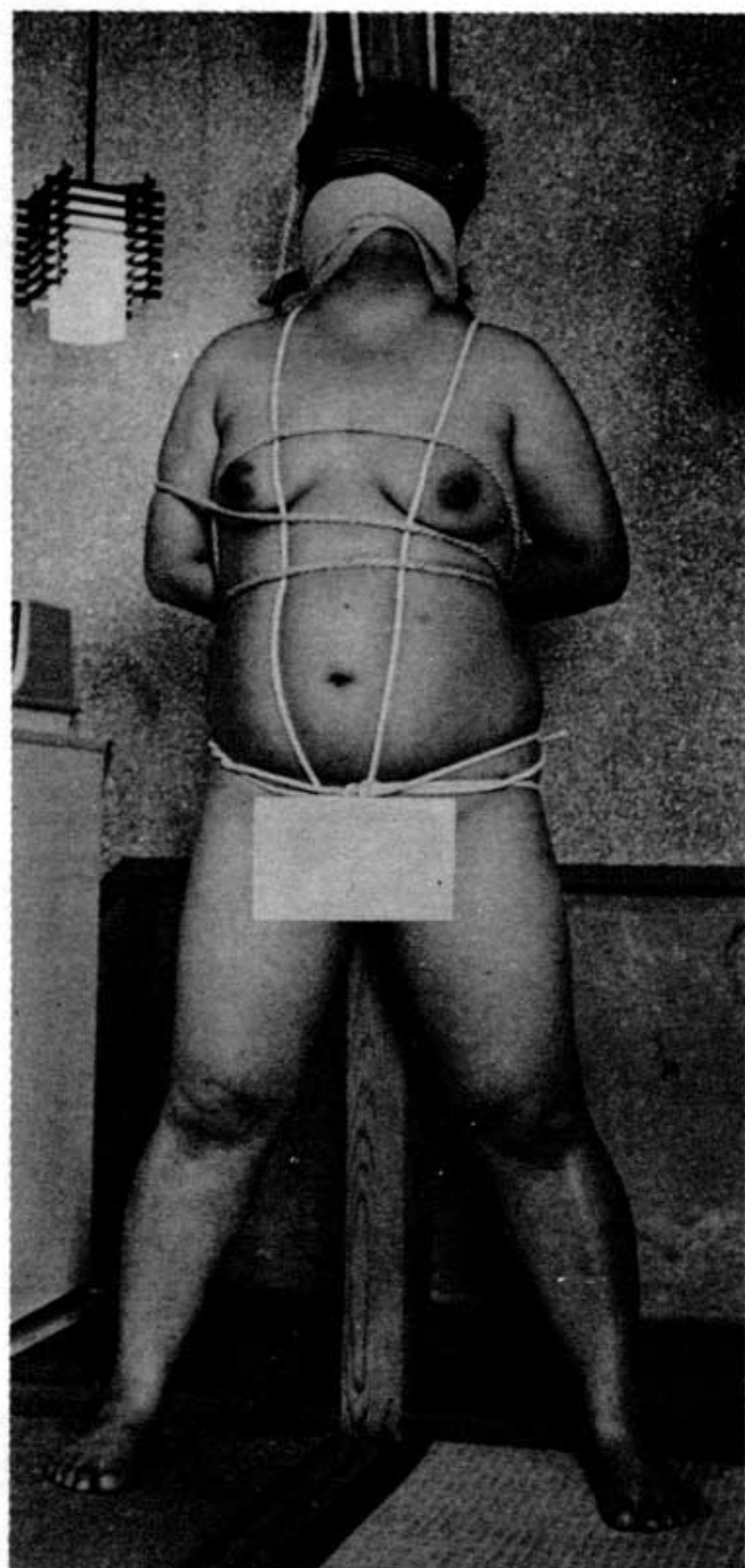
たのだった。

それに、H氏と交換に応えるべきフォトにも、私なりのSMをとり入れたかった。これが、私をSMフォトの世界にひきこまされた動機となった

早速、モデルさがしの段取りとなつたが、おいそれと、すぐに見つかるものではない。当時「奈ク」誌と併読していた「風奇」誌、この雑誌は読者相互の書簡の回送取扱いにその特徴があつたのだが、この「風奇」誌の回送での文通仲間に依頼したところ、謝札の用意があるなら、かなりM化馴教の進んだ女性を紹介しても良い、とのことだった。

こうして、私の初体験、M女メス豚N子のフォト撮影が実現したのである。

それは、初夏の昼下りの一日だった。ある国電の駅前で待ち合わせ、ただちに、近くのラブ・ホテルへと直行した。初夏の太陽がカッと照りつける真つ昼間。私は、カメラ一式、ロープ、それに小道具として前日、ポルノ・ショップで買い求めておいた電動のバイブレーター、薬局で購入した50ccの浣腸器などを詰めこんだ、大きなバッグを手に、午後の明るさが、ラブ・ホテルへ入るのにいささかの



ためらいも感じさせられた。

N子はまったく白メス豚と呼ぶにふさわしい、徹底したM女だった。おそらく、バストとヒップは1メートル近くはあるのではないだろうか。ウエストも75センチ以上。体重も70キロくらい、と思われるキング・サイズ。ラブ・ホテルの一室に納まってからの彼女はいかにも手なれた、完全な飼育ぶりを見せてくれた。

先ず、すぐに着衣を全部脱ぎ去り、一糸まとわぬ全裸になると風呂場に直行した。

私は、その間にカメラのセッティングを手

早く済ませると、室内を物色しながら撮影プランを数カット分、設定してみた。

まず、この柱を利用して立ち縛りからとりかろう。用意してきたロープは10メートルのトゲトゲの出た麻ナワが2本、5メートルのやわらかな綿ロープが2本、これで不足した場合、ホテルのゆかた用の帯やタオルなども動員することにして、以前からぜひ、自分の手で試みてみたかった股間縛り——縄ふんどし——に挑戦してみることにした。

とにかく、今までにヌード・フォト撮影の経験はあっても、SMフォトは初体験。師と

たのむ人もなく、手本は今までに愛読したSM誌のみ、というありさま。被写体を前にして、にわかに心細くなってきた。本当に自分で、M女を縛ったあげく、フォト撮影までできるだろうか？

あれこれと思索しているうちに、彼女は風呂もつかい終り、準備OK、とばかりにこちらへ来る気はい。にわかシバリストも、ままよと、度胸をすえ、まずは10メートルの麻なわを手

「この柱を背にして立つてもらおうか。立縛りからやってみるからね」

と声をかけた。N子は憶することもなく、両手を背に廻すと、

「この手首から縛って」

と早くもM女ぶりを発揮しての哀願口調になる。このひと言がきっかけで、案外スムーズに最初の縄かけが成功した。

私としては、フォト撮影が主な目的で、縛り、SM Pはそのフォトを得るための手段というふうに思っていた。しかしこの瞬間から、私のS性も頭をもたげてきたのだろうか。女体をギュッと縛り上げて見たい、という欲望がムクムクと頭をもたげてきたのである。

グルリと乳房のまわりを一まき、二まき。

「股へ縄ふんどしをかけるんだから、グツと両足を開くんだ！」

自然、私の口調も命令するような調子に変わっていた。

「こう？」

「いや、もっと大きく開け！」

と、必要以上に無理なポーズを強要しながら縄をかけ、グツとしめ上げてみた。

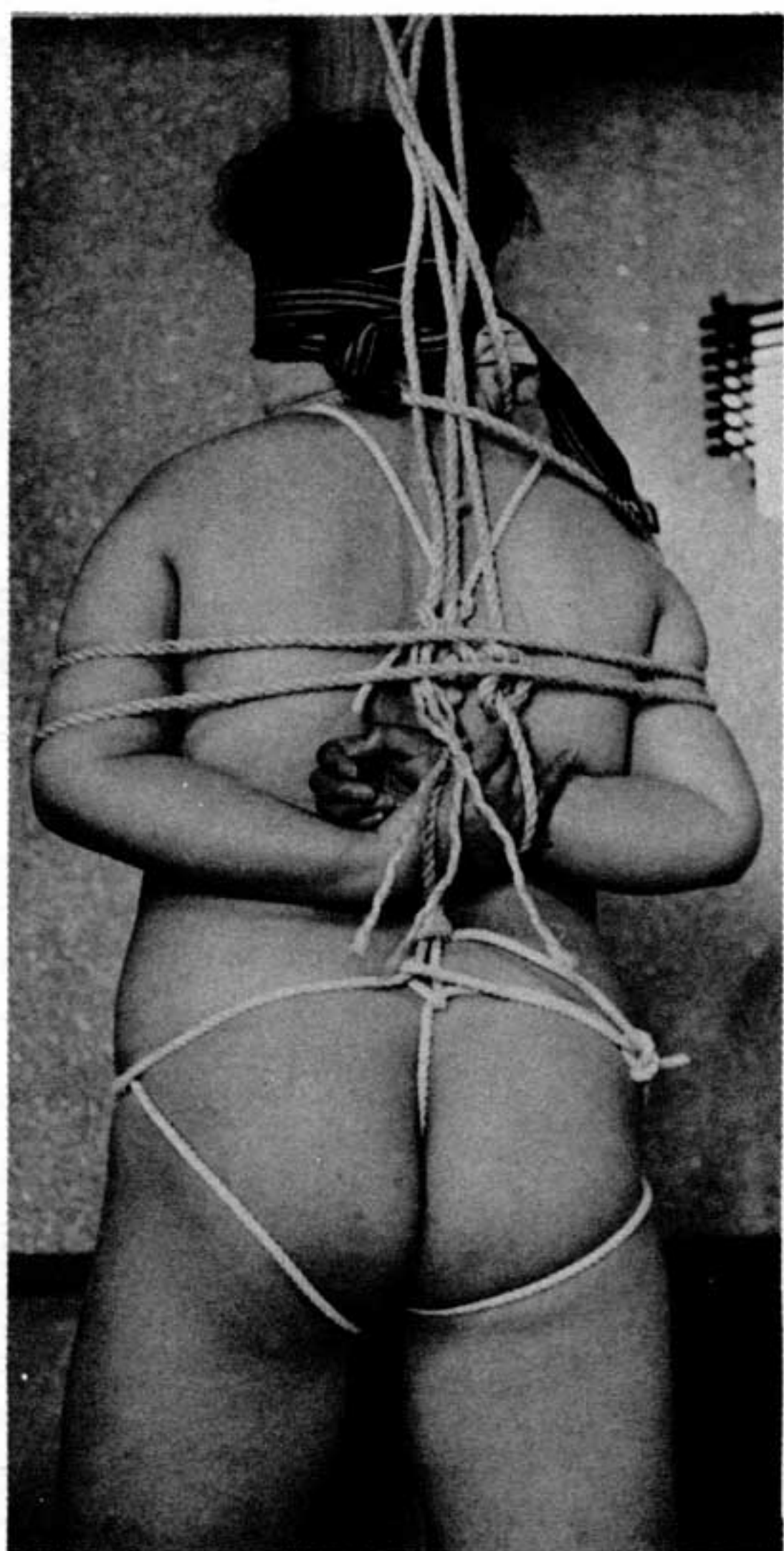
「もっと強くしめても大丈夫よ。もっときついほうが感じるわ」

彼女のほうが、にわかシバリストの私よりはるかに調教されているのだった。一応、柱

にくくりつけ、立縛りの形がきまったところで、カメラのファインダーをのぞいてみる。何となく迫力が不足のような気がする。

私の縛り自体、どの程度まで力を入れていいものやら、まったく手さぐり状態というところで、まだ、まだ充分とは言えない様だし、彼女も、いかにM化飼育馴化の進んだメス豚と言えども、初対面に近いこの私との、こうした状態では、まだ気分も、雰囲気も、全然盛りあがらないようだ。

私も縛りのレッスンを重ねるつもりで、「もう一度、縛りなおすぞ」



と、声をかけた。N子も

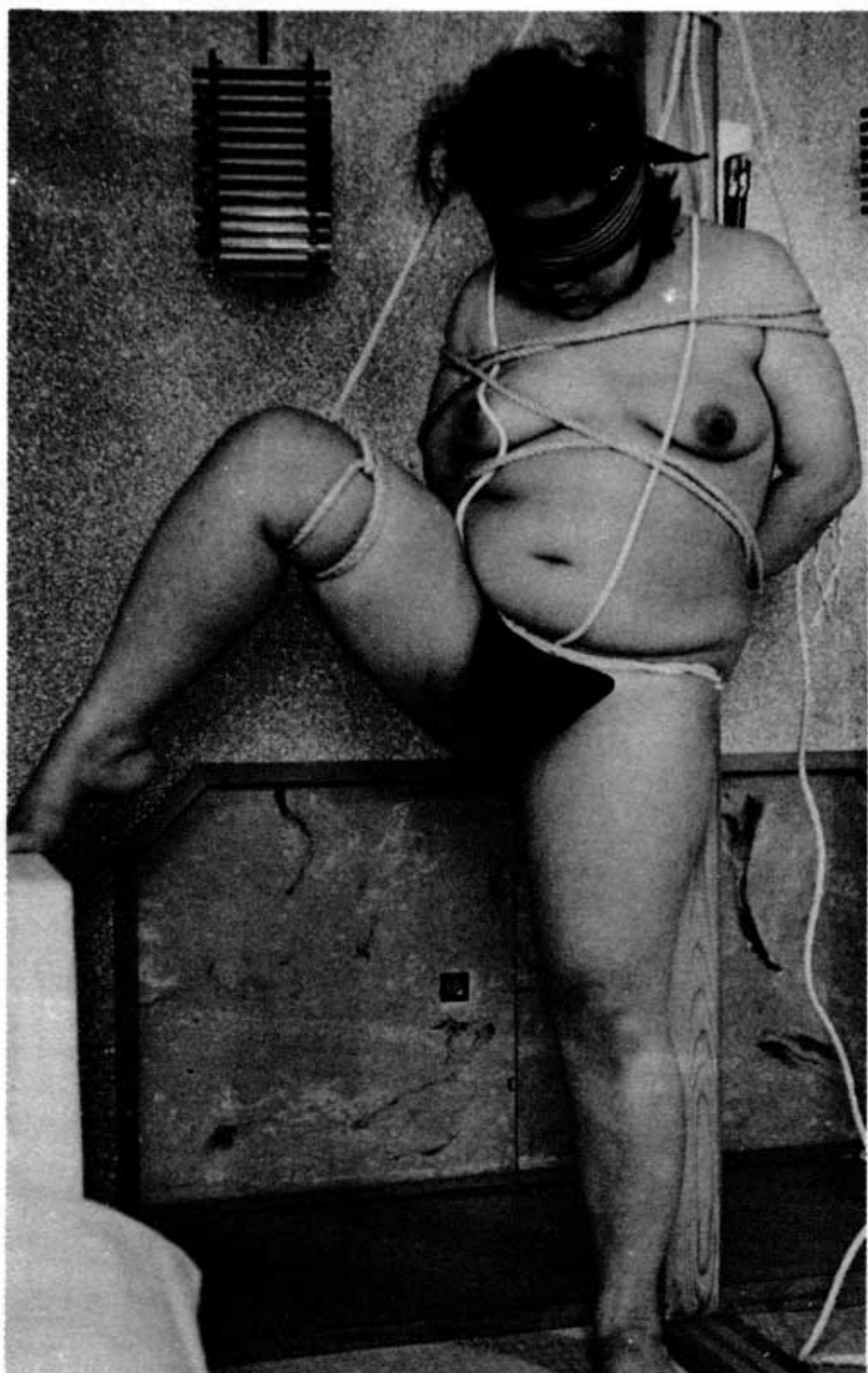
「もっと、ゆっくり、時間をかけていいのよ。その方が、わたしも序々に気分が高まってくるから……」

私は、縛り直す前に、彼女の体をたっぷりペッティングにより、もて遊んでから、時間をかけて、最初より、入念に、要所、要所をきつく締め上げてゆくように留意しようと考えた。大きな乳房をもみしだき、次第に手下の方へともっていった。

うるおってくるのがはつきり感じられる。それと同時に、彼女の体が全体がぐにゃぐにゃとした感じで、とても柔らかくなってきた。「ねエ、さっきみたいに縛ってみて！ お願……い……」

やっと、エンジンが暖まってきたのだろうか。声音も、より一層甘いものになってきている。

こうして、最初のポーズ、立縛り、縄ふんどしのフォトは数枚のシャッターを切ることでできたのだった。全身を写し、近づいて半身像を写し、部分クローズ・アップを撮りと、シャッターをしばらく無言で押し続けた。やがてこのポーズも、撮るべきカットはすべて撮りつくしたつもりで、そろそろ次のポーズ



に移ろうか、と思うタイミングをみすかしたかのように、

「ねエ、あなた、この足の間からお撮りになつてみませんか？」

と彼女のほうから声をかけられたのだ。それは、私の全く考えてもいなかった破廉恥なアングルから撮れ、という要求だった。

「もっと足を開けたほうがいいかしら？」

私が、更に勇気と大胆さでもって、新しい

カメラ・アングルに取り組めたのは言いまでもない。

今度は、そのままの状態、柱に固定したロープだけゆるめて、後向きに、柱を抱かせるようにして、抱束してみた。これはほとんど即座に縛りは完了した。後手に縛った状態と、臀部の割れ目に喰い込んだロープの様子を記録しておきたく思いついたポーズであ

る。前むきのときにした、さるぐつわ、目かくしもそのままである。巨大な尻の割れ目に喰い込むロープを強調しよう、と改めて縄を強く締め直すために、一旦いましめをゆるめてみた。太った体にはロープの痕が、赤紫色にくつきりについており、股間の部分のロープはべつとりとしめりけを帯びていた。

彼女は羞恥責めと、その状態でのシャッター音に特にエキサイトするようで、露骨な言葉で、破廉恥なポーズを要求するほど、喜びが高まるようで、ポーズを重ねるに従って段々、気分が乗ってきたのが、こちらにも手に取るように伝わってくる。

次は、柱を背に後手縛りは変らないが、正面を向かせて、両ひざ、両脚を大きく開かせた、いわゆる開股のポーズをとらせてみた。やはり、目かくしはそのままにしてある。

いざ、カメラをかまえ、そのポーズにアングルを決め、ピントを合わせ、シャッターを押そうとした時だ。あまりの無防備そのものといつてもよい、その姿態に私のほうが、たまらなくなり、無言のまま「おしゃぶり」の奉仕を強要していたのだ。目かくしの安心感が私をそのような行動に走らせたのかも知れない。一瞬、イヤイヤをするようなそぶりを

みせたメス豚だったが、すぐに、やわらかく、ネットリとからみつくように、口中に受け入れてくれた。5分くらい経過しただろうか。彼女も無口。

この、わずかなインターバルが、再び私に猛烈な写欲を湧き上らせる結果になったのである。

柱へ拘束したポーズは、ほぼ充分に撮り終えた、と思った。

室内を見まわすと、丁度、手ごろな椅子が目についた。先ほどの開股のポーズの鮮やかな印象をもう一度、とばかりに、椅子を使って、大きく脚を開けさせて、ロープで固定する。見事に、より迫力ある開股のポーズが再

現された。

こうして一通り撮り終えたところで、ひと息入れることにした。

そのころになると、私も縛りのフォートを撮影する、という初期の目的を達成したので、かなり、気分的にも余裕が出て来た。

彼女も一連の撮影で、グツと親近感を増したらしい。

「ねえ、あなたもお風呂で一汗、流していらつしゃいよ。わたしは、その間、一人でこのバイブを使って楽しませていただくわ」

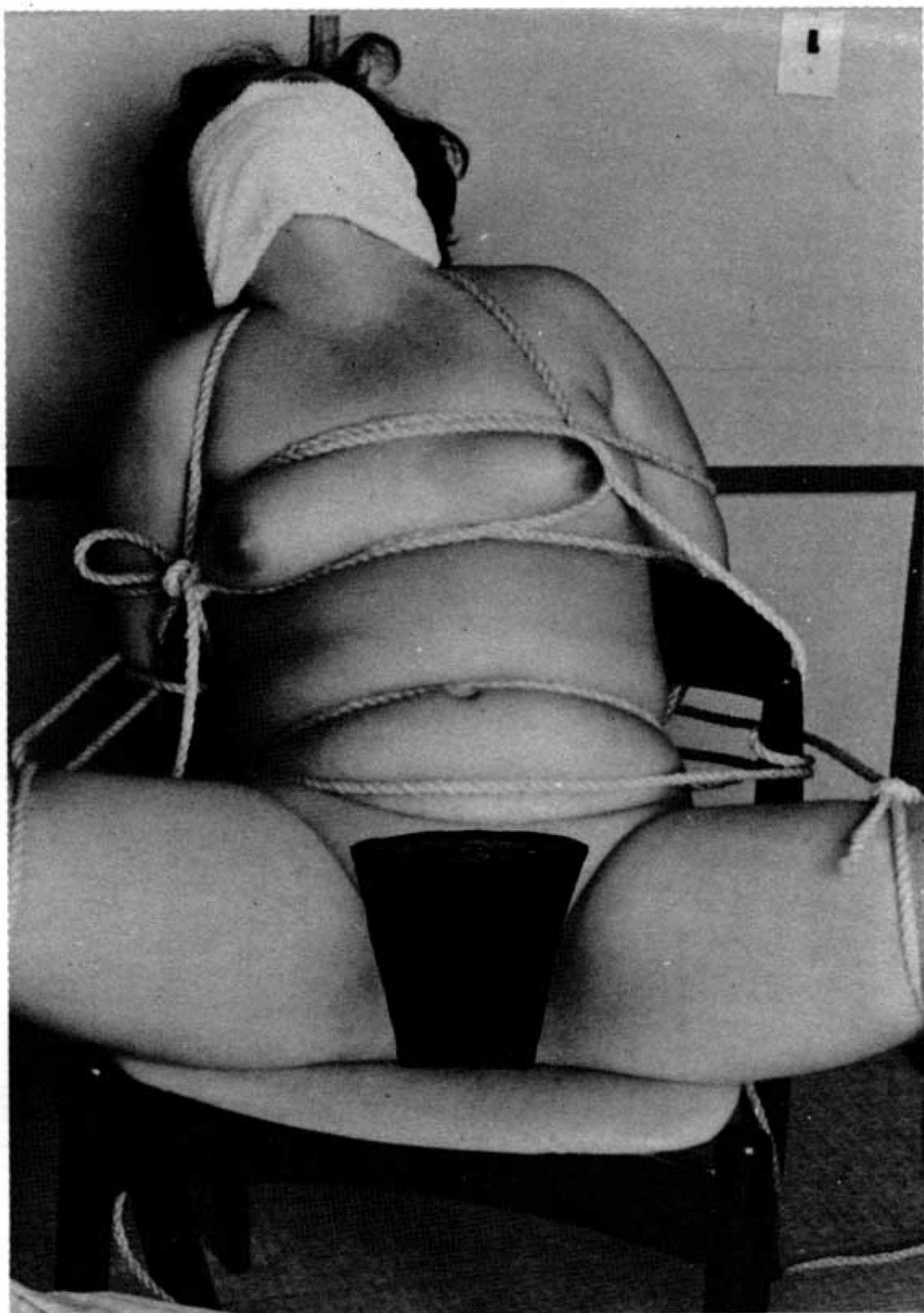
と、私が見せた用意の小道具にも非常な興味を示す。それでは、と私もひと休みするつもりで、風呂場へ向う。ざっと汗を流すだけの烏の行水。ホンの数分に出てみると、彼女は、一人でふとんに寝て、バイブを使いながら、

「ウフン、アハン……」

と一人でもだえている最中だった。

「そのまま続けるんだ！ 写真を撮るから」と続行を命じて、カメラに納めていると、そのシャッター音に、ますます刺激を受けたらしい彼女。

「あなた、これを……あなたの手で……。アア……もっと激しく……」





しばらくは、私もカメラをほうり出して、もだえ狂うN子のために専念しなければならなかった。

ひと落ち着きした、ころあいを見はからって「今度は自分の指でやるんだ!」

とオナニーを強要してみた。そのシーンもちろんフォトに記録する。

「写真を撮られながらのオナニーって、よい燃えるの……」

声もたえだえになりながらの彼女の告白である。

再び、縄のプレーを始める。今度はそのままふとんの上に寝かしておいて、両ひざから、太ももへロープをあけ、大きく開股させる。そして、主にクローズ・アップ・ショットを中心に撮影を続けた。

例によって、シャッター音が重なるにつれまた、M女の本領発揮というところか、見る見る透明な愛液がにじみ出てくるありさまが、はつきりと見てとれる。

「ねエ、拭かないでいい……」

「いや、そのままにしておくんだ! そのまま、撮り続けるぞ!」

こうして、やがてロープ・プレイのアイデアもつき、やや行きづまりを感じてきたのだ

った。

「あなた、浣腸器を用意してきたんでしょう？ だったら、ぬるま湯をアヌスから入れて欲しいワ」

と言う要求が出たのは、そんな時だった。これも私にとっては初体験。どうして良いのやらわからずに、うろたえてしまった、というのが、その時の偽りのない私の実感である。ここでは彼女の指示に従うほかない。

「ぬるま湯を汲んできて。浣腸器でアヌスに注入してくれればいいの」

といって四つんばいになる彼女に、

「こうかい？」

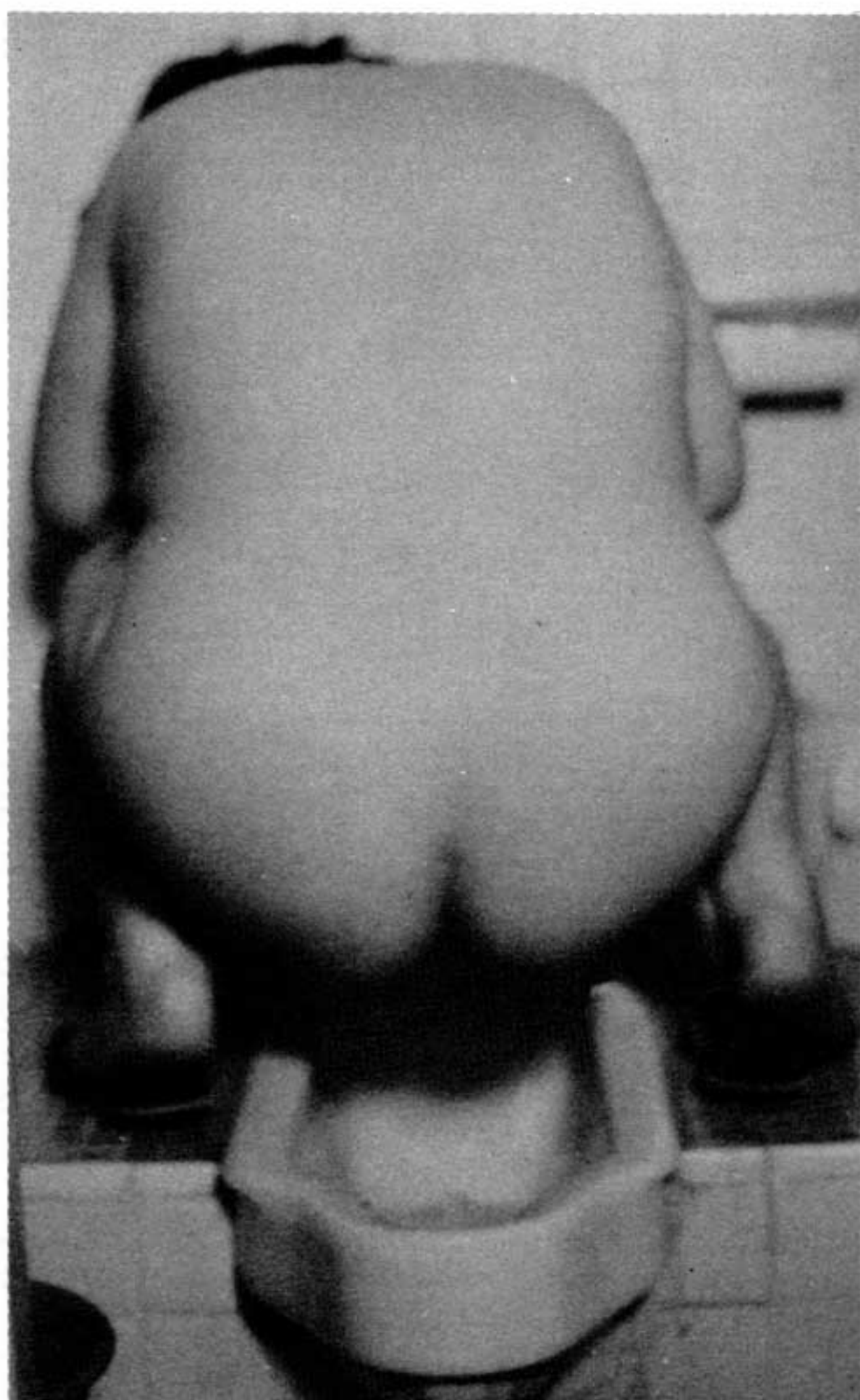
と、おそろ、おそろ一本めを注入してみる

と、彼女、

「もっと、もっとよ」

「いったい、どのくらい入るんだい？」

「とにかく、いいっていうまで入れて大丈夫よ」



50 C Cの小型の浣腸器ではあったが、およそ20回以上、注入し続けたろうか。その作業は、私にとっても楽しいものだったが、なにせ、忙がしすぎて、カメラのほうに全然、手が廻らない。

こんなことなら、三脚、セルフタイマーを用意するんだったなア——と心のなかでぼやいてみたがあとのみつり。浣腸器は私の手をはなれて、アヌスに突きささっていてはくれないのだ。つくづく二人だけのプレーと撮影との両立の限界も思い知らされた。

かなりの回数の注入を終り、彼女の、

「もういいわ、お腹がゴロゴロいつてきたみたい。ホラ、ずい分ふくらんだでしょう」

そうでなくとも、もともと妊婦に近い彼女の腹部が、一リットル以上の温水をはらんで更にふくれあがっている。しかも、四つんばいで、腹部を下にしたままだから、なおさらである。

私は浣腸器などを配して、できるだけ感じを出すようにして撮影をした。そうしているうちにも彼女は便意のがまんが限界にきたらしい。

「ねエ、トイレに行かせて」

「もう少しがまんするんだ。それにトイレも

写真に写すぞ」

「それだけはかんにんして、あの音と匂いを人に知られるのがイヤなの」

「そんなことはかまわんよ。それに、だいいさ、音や匂いは写真には写らないんだから……」などと押問答をつづけているうちに、彼女は、それこそ、カケ足でトイレへ飛びこんでいったのだ。

私は、ストロボを用意すると、トイレの扉を開いた。彼女は内鍵をかける間もなく、排泄をはじめていた。

ストロボが一闪、二閃すると、彼女もやっとな気がついたらしい。やっとな落ちついた感じで用を足しはじめた。最初は、

「ドド……シャ……」

というすさまじい排泄音にまじって、あの独特の匂いが、サツと立ちこめたが、カメラをかまえ、夢中の私は、そんなことは全く気にならず、短いチャンス逃さじ、とばかりに、ストロボがチャージするのがもどかしく感じながら、シャッターを押し続けた。一段落したところで、むこう向きの姿を、こちら向きに変えるように命令して、そのまま排泄を続けさせながらシャッターを切る。

「音と匂いさえ気になさらないのだったら、

べつに写真をお撮りになるのはかまわないの」さっぱりとした顔つきにもどった彼女は、トイレから出てきてそう言うのだった。

このラブ・ホテルに入ってからすでに、四時間半ほどの時間が経過してしまった。そろそろ、きょう準備してきた撮影コンテも、あらかた消化しつくしたことだし、

「このへんで、きょうの撮影は終りにしようか」

「それじゃあ、わたし、もう一度、お風呂に入ってから、服を着るわ」

ということ、再び風呂場へ消えていった彼女。

驚くべきタフさである。紙数の関係もあり五時間ほどにわたるプレイの詳細を全て綴るわけにはいかなかったが、あのトゲトゲした麻縄が、肌に、乳房に、股間にとかなりの強さで喰い込むのを、物ともせず、

「もっと強いほうが感じるの！」

と、完全飼育されたM女ぶり。さらにはより破廉恥なカメラ・アングルを、自ら、指示するということ、喜びを示す、という、私のSMフォト撮影初体験としては、恵まれた条件で、そのスタートを切ることができた

ように思う。

このほど「SUN・AND・MOON」誌編集長、世田氏からのご好意あふれる、おすすめに、私のSMフォト撮影初体験記なるものをまとめてみました。

私の場合、冒頭にも記しましたように、SMプレイは、SMフォトを得るための手段という考えかたが強く、プレイそのものが目的とは言えません。SMマニアの中には私のようなフォト・マニアという形での存在が許されるのかどうか、常に疑問を抱きつつ、数年の時間が過ぎ去ってしまいました。皆様方の御感想や、御意見などお聞かせ願えれば、大変うれしく思っております。

*

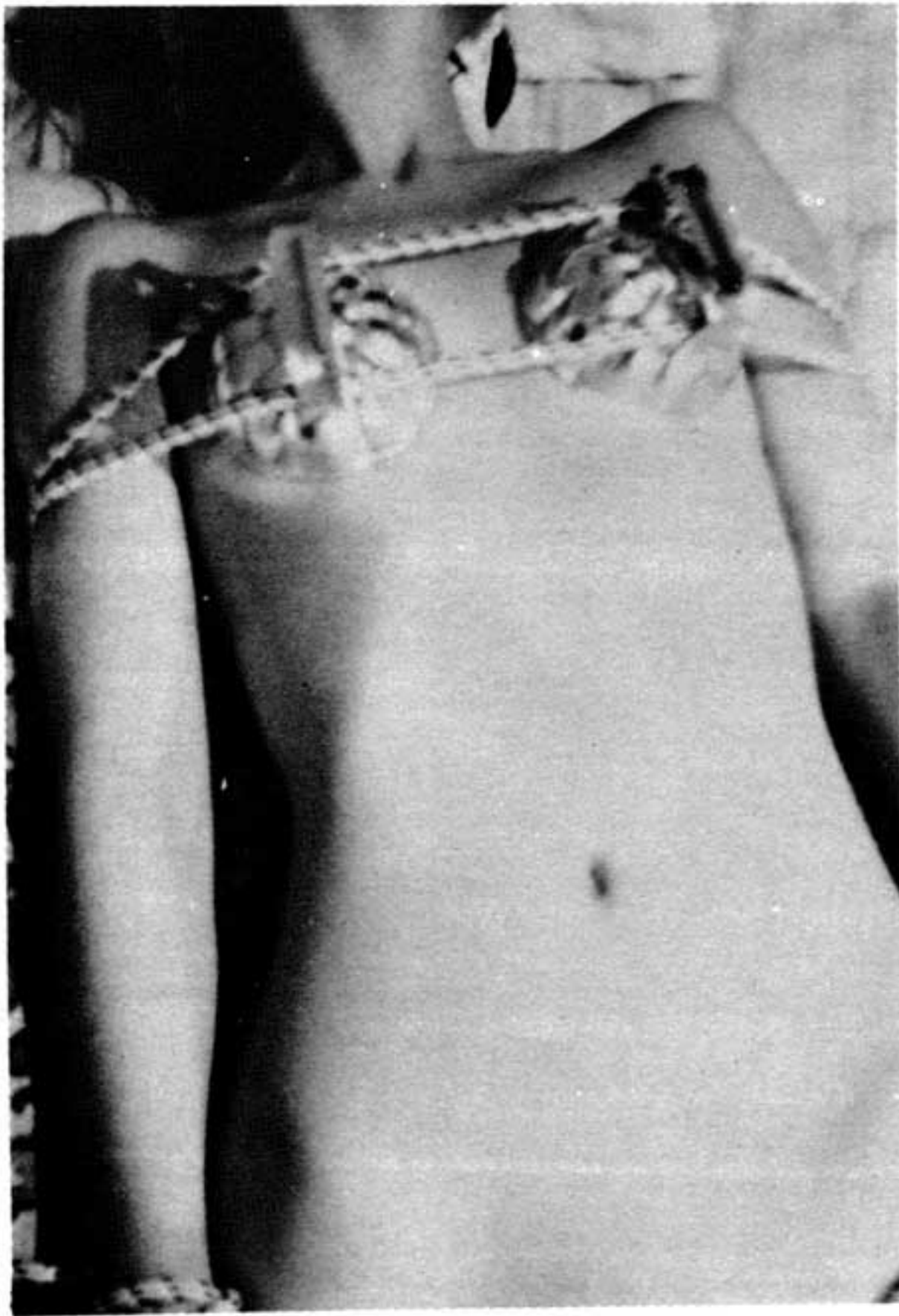
*

*

*

美しき乳房への 弄玩惹起想

志摩紫光



世界中で一番美しいものは女性の裸身である——。と言った哲学者が過去に居たが、正に至言である。

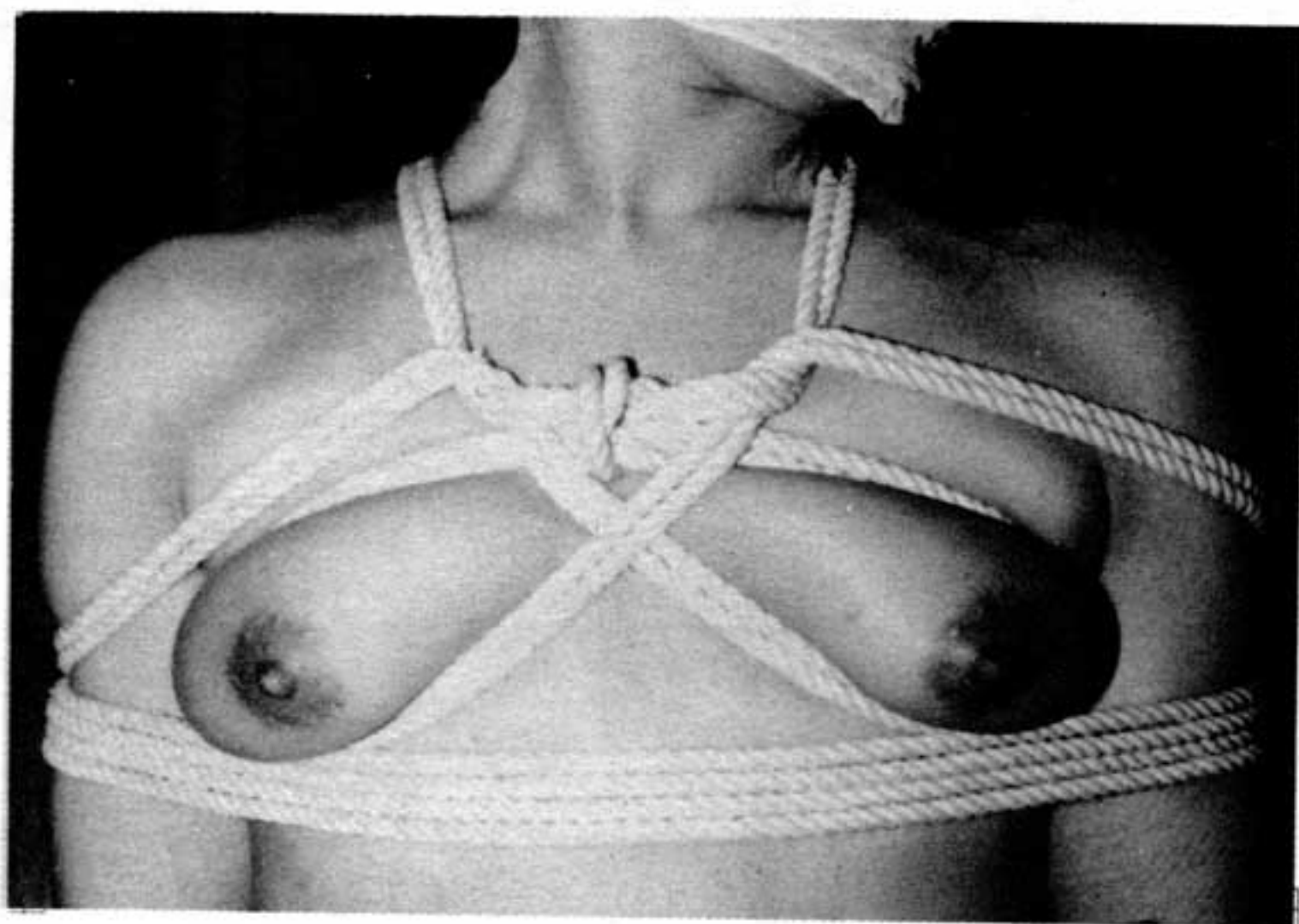
白く、丸味を帯びた女性の裸身はいつ見てもふくよかで美しい。

女性の裸身の中で最も女性らしい部分は、といえば円曲な線を描く乳房ではないだろうか。

愛蔵書の「奇ク」であつたか、「風奇」の別冊であつたのか、記憶に定かではないが、雑誌の中央部に近い位置に掲載されていた写真頁。たしか四頁の見開きで、縄で縛り上げられた乳房のみをピックアップしたものが横長の写真で並んでいたことを思い出す。

一頁に五枚か六枚の写真が縦に並び、そのどれもが乳房をいたぶり、責めあげている縄の表情も生きていたようだ。

乳房を上下から狭み、乳房がその為に飛び出し気味になっているもの。乳房をはさんで上下に縛ってある縄に直角に交差させている縄が、ちょうどマス目のように四角くなり、そのマス目の夫々の中に押しこまれて四角い乳房のような感じの出ている写真。横8の字に縛り上げられ、乳房の張りが乳首にも及んで縛りの強さを無言のうちに証明しているか



のような写真が四頁にわたって掲載してあるのは圧巻だった。惜しむらくは、その掲載誌を引っ越しのドサクサに紛れて何処かへやっってしまったために、今でも書店等を覗いては探しているのだが、今だに再会をしていない。それに影響されたというのでもないが、私が女性を縛り上げるときに一番重要視し、念

入りに真めるのは乳房であり、乳首である。

乳房の構成というか、乳房を形成しているのは脂肪と乳腺で、脂肪が八十五%を占め、乳腺は残りの十五%という配分である。

乳房の機能は母乳としての役割りが大で、子に栄養分を与える唯一の機関でもあり、その為かどうかは不明だが、子に母乳を与える子と子の口が乳首を吸い、子の体温を直接に感じ取ることのできる鋭敏な部分でもある。

我が子を抱き、乳を与えるひとときは女であり、母親であつて良かったと感じるときでもあるというのを聞いても、乳房の果たす役割りが育児に大きく貢献しているのもわかう。

母性本能を感じるのも乳房が大きな役割りを果たしている——という医学者の説にもうなづくことができる。

そうしたことを女性が全く知らないとしても、裸でいた女性が男性の眼や、他人の眼に気付いた瞬間、反射的に自由な手で隠そうとするのは七十%が乳房で、二十%は恥部と乳房を左右の手で履い、恥部のみを隠そうと両手を下腹部にやる女性でも、必ず上半身をよじり、肩や背中を乳房を他の視線から外そうとする——というデータからも、女性にとつ

て乳房は「女性としてのシンボル」であることは間違いない。

観点を変えても、そのことを肯定するような結果になるようだ。

ちなみに、男性が女性を見て「どこに女性を感じますか」という質問に「乳房」と答えたのは百人中五十人。次いで「尻」・「うなじ」・「髪」・「背中」・「足」・「手」と続いている。

「女性を一番最初に見るときに、体のどの部分を見ますか」の質問でも「胸」と答えたのは百人中四十人強。「顔」が二十人強で次いでおり、以下「全身」・「尻」・「腰」「足」がその後を追っている。

女性から見て、異性である男性が注視するのも「乳房」が大きな比重を占めている、つまり「関心も高い部位でもあることが明白な」わけだ。

話しは横道に外れたが、乳房の持つ機能は授乳の為の機能だけではなく、性感としての機能もあることは周知の通りである。女性によって多少の差異はあっても、乳首を中心に乳房全体に性感があり、愛撫等によって性感の度合いが高まれば高まるほど。あるいは、女性自身が気の付かなかった性感帯の部分が

開拓されてくるようになると、乳房が感じる度合いも、激しく、強くなってくる傾向にあるようだ。

何れにせよ、乳房には女性としての機能が集約されているといっても過言ではない。私が女性を縛り、責めるときに必ず乳房に対する責めも行いう理由がそこにある——とはいえない。(全くないわけではないが)

乳房を責めると全員が全員といって良いほど、乳首に変化が起きる。ご存知の方も多いだろうが、乳首が固くなり、乳房全体に鳥肌

のようなポツポツが出てきたり、羽毛等を使つてくすぐり責め等を行うと興奮して、乳房に赤味を帯びてくるなどの変化である。そうした微妙な変化を楽しむ事もさることながら縛りあげた縄目の間から変形した乳房が顔を覗かせ、その乳房に対して、平手で打ちすえたり、乳首を持ってひねり上げたり、洗濯バサミを使つていたぶるほかにも、ローソクを使い、溶けたロウの液を乳首にかけてみることもある。

時には乳房を吸い、乳首が固くなったのを

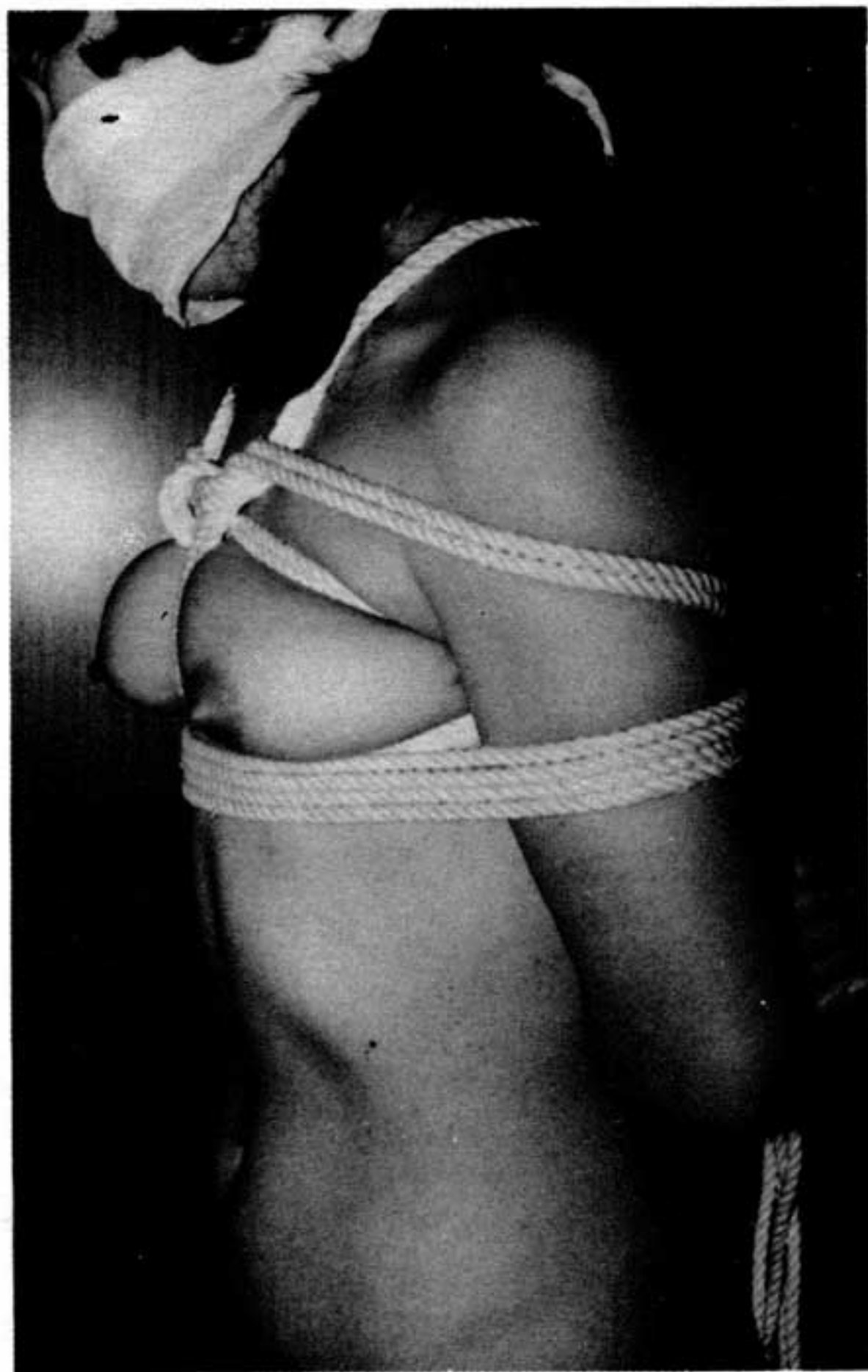
確めてから噛むこともする。女体を責め立てて感じるのだが、腕なり、足なり、肩でも尻でも、縛りあげてしまえば、縄目に沿った凹凸はできるが、その上から鞭等で打ちすえる以外にこれといった責めの方法はない。だが、その点、乳房はどのように縛り上げようとも、ふくらみのある部位だけに、変形しながらも縄目や、縄との縄の間から突き出てくる。それを利用して強く引き出すことや、更に、責め具を付けるなどのこともできる。

責められる女性にしてみても、腕や足に対する責めよりも、乳房に対する責めや恥部に対する責めには怯えや恐怖に近い表情を露わにする。また、痛みに対する反応も、乳房が早いようだ。クリップや洗濯バサミで乳首をはさんだときには一番顕著に現われ、三十分も乳首をはさんだクリップに反応しない女性はいない。

「お願い、とって……乳首以外ならばどこでもいいから、ねエツ、ヤメテ、おねがい」

の声を無視して放置したままに責めた女性の一人はクリップを外した後

「半日以上は乳首が潰れたままで、痛みは四日間も続いてブラジャーの取り外しも神経がピリピリだったわ」



と苦情を言っていたこともある。

それほど敏感であり、責めがいのある乳房を徹底して責め抜いた写真の載ったSM誌にここ二年ばかりお目にかかったことがない。若いモデルが縛られる写真は山ほどあるが、

そのどれもが、乳房への責めを避けているかのように、せいぜい、余り乳房が変形しない程度にしか縛ってないのだ。折角の女性のシンボルでもある乳房が、ただ単のヌード写真の乳房と変わらない表情しか出ていないのはSM誌の名が泣くばかりか「縛り師」といわれる諸先生も所詮は女体に縛が上手に巻けるか否かの点だけで評価されているような気さえしているこの頃である。(失札)

股縄も結構、逆さ吊りも結構、開股も結構だが「なにかそれにだけで終始している」と考えるのは私だけではなからう。

もちろん、責めや縛りは乳房に対してだけではなく、女性の肉体のありとあらゆる部分に施されるものであり、責め方も縛り方も趣向も個人によって差異があることは承知もしているし、理解もしている。かく言う私にしても、乳房へ対する責めに執着し、終始しているわけでもない。吊り責めも、狸縛りも、開股縛りも、海老責め等々、手を変え、品を

変えて縛りと責めを楽しんでいるし、工夫を加えては常用もしている。四十八手裏表の責めを駆使しているとは言わないが、結構多くの縛りや責めを女体に加えているつもりである。

SM誌各誌にしても、それなりの工夫をしているところは理解もできるが、本格的な責めを加えられない、ただのモデル嬢であることが障害になっているのだろう。何か演技での表情、責め方に終わっている感が最近特に強い。

その点奇クの場合は、豊富な若い女性の登場こそなかったが、一人の女性を隔号、二号置き位に登場させ、縛りにしても、責め方にしても工夫をし、緊縛写真効果にのみ終始させてはいない。若干のM性は持っていたにしても、縛られることに喜びを感じ、責められることに生きていることの張りを見出す女性に奇クの巻頭グラビアを飾っていたとは思えない。

だが、何回も縛りに使い、縄に慣れさせ、工夫も加えているうちに、最初は嫌っていた縛りや責めも甘受するようになり、本格的な縛りに耐えていかれるまでになった結果、あたかもM女であるが如き印象を写える。奇ク

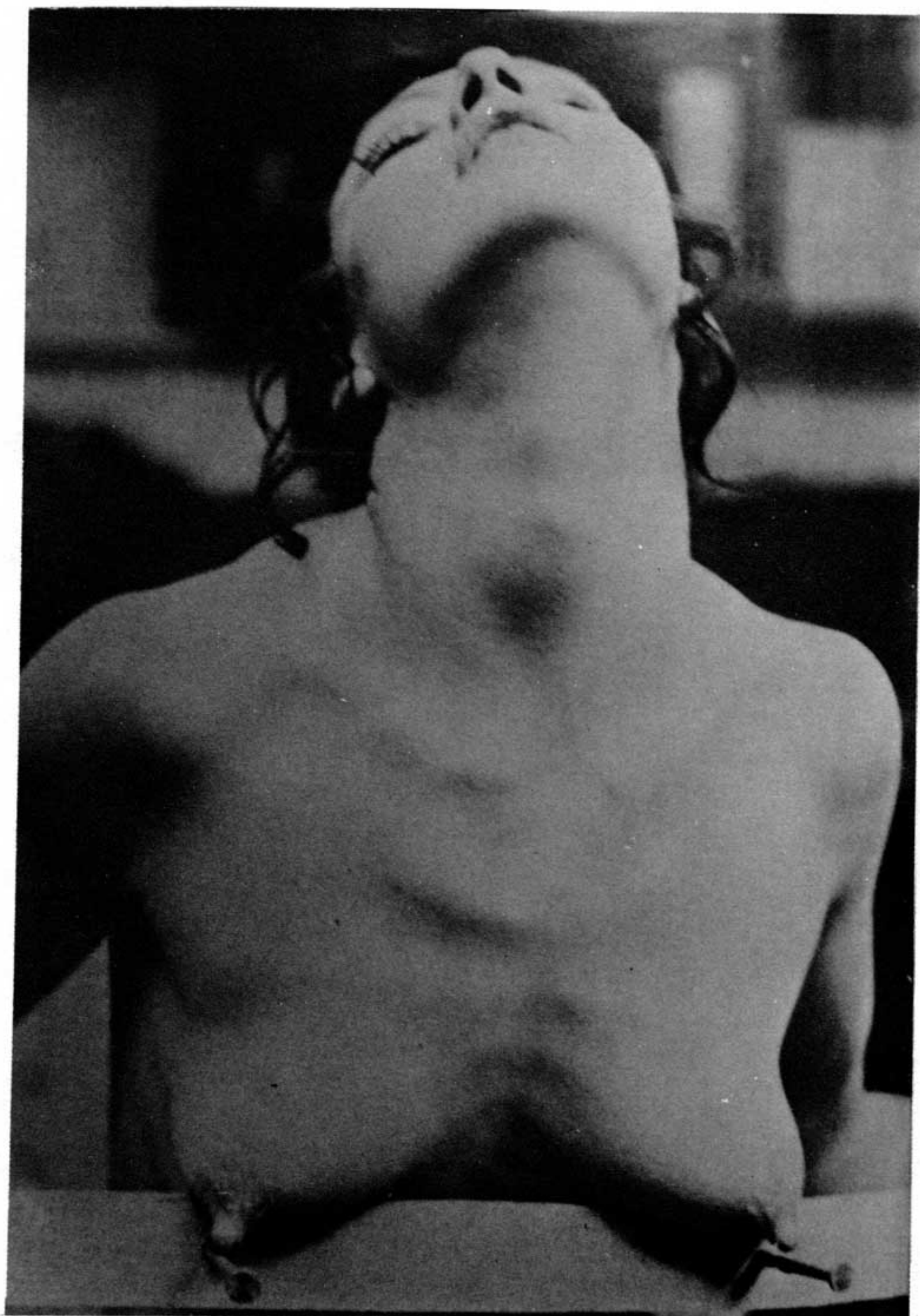
の女性”になったような気がしてならない。

簡略に言えば、調教を施してこそ、M女は形成され、ニセモノではないホンモノの縛りや責めが写真に撮れるのであろうということである。その努力をしていないSM誌が余りにも多すぎるということになる。(そういう方針なのかも知れないが)

毎号毎号登場するモデルは違い、場所や役柄の設定も違ってこそすれ、登場するのはその号限りで終わってしまう。別冊の写真集にしても、その折りに撮影し、掲載しなかった分の中からピックアップし、カラーや白黒で並べているに過ぎない。同じモデルを再度、再々度呼び、前回と違う縛りや責めを加えたものではないのだ。

それでは女性の持っているM性を開拓することもできないだけでなく、縄や責めに馴らせていくこともできないで、結局モデルこそ違え、変わり映えのない縛り写真が続くことになる。まったく出版社の一方的なオシキセ写真が、あたかも本格的SM写真であるかのような印象さえ与えるようになっている現状だ。

初心者やSMプレイの未経験者に対してならばいざ知らず、「経験者にとっては参考にも



北欧ポルノ誌より

役にもたたない本でしかない」のが本音だろう。

やはり、モデルとはいえ、何回も使用することにより、縄や責めに対する偏見、恐れも無くなり、ハードな責めにも耐えられるようになり、体格や顔の表情を上手く生かした縛りや責めが人なりに工夫もできると考える。

その格好な例が奇巧の関谷房子で、「ムチ打ちの房子」の異名が付き、ファンも多かったように、「尻責めの純子」「逆さ吊りの洋子」「水責めの宏子」「責革具の芳江」「削毛の満枝」「浣腸の妙子」のようにその責めにかけてのエキスパートが出るようになれば本格的な「ホンモノのSM誌」になるというのが持論である。

責める人の好みもあろうが、その好みを如何なく発揮できるM女がいなければ夢想の域は出まい。その為にも一人一人、継続して使用し、教育をしていくことが、夢を叶える近道であると確信する。

話しが「乳房」から大分離れてしまったが「乳房責めの一枝」のような異名を付けられるだけの女を教育してみたいのが私の今の夢でもある。とはいっても、一朝一夕にはなるものでもなければ簡単に育ててられるもので

もないのは当然。また、私に乳房責めの意欲を掻き立てるような魅力ある乳房を持った女性を探すのも一苦勞であろうし、万が一にでも見つかったとしても、どのように近付き、M女として、調教を加えていくのか工夫も努力も必要となることは容易に想像がつく。それは今までにM女として縛りや責めを加えた八人の女にしても、乳房責めを課したいという欲望に強くかられる女はいなかったことでも探し、育てる困難さは予測ができる。

私の好む乳房は張りがあって大きめだが、垂れ気味な乳房の大きさではない。強いていえば由美かをるの乳房に近い形をしており、上向きに寝ても、乳房の形が余り崩れないようであれば、より理想的といえる。そういう乳房を持つ女性は運動をしているか、体を動かすことの多い仕事をしている場が多いようだ。幸い人と接することの多い職業柄「いつかは出会えるであろう」との期待を持っているのだが……。

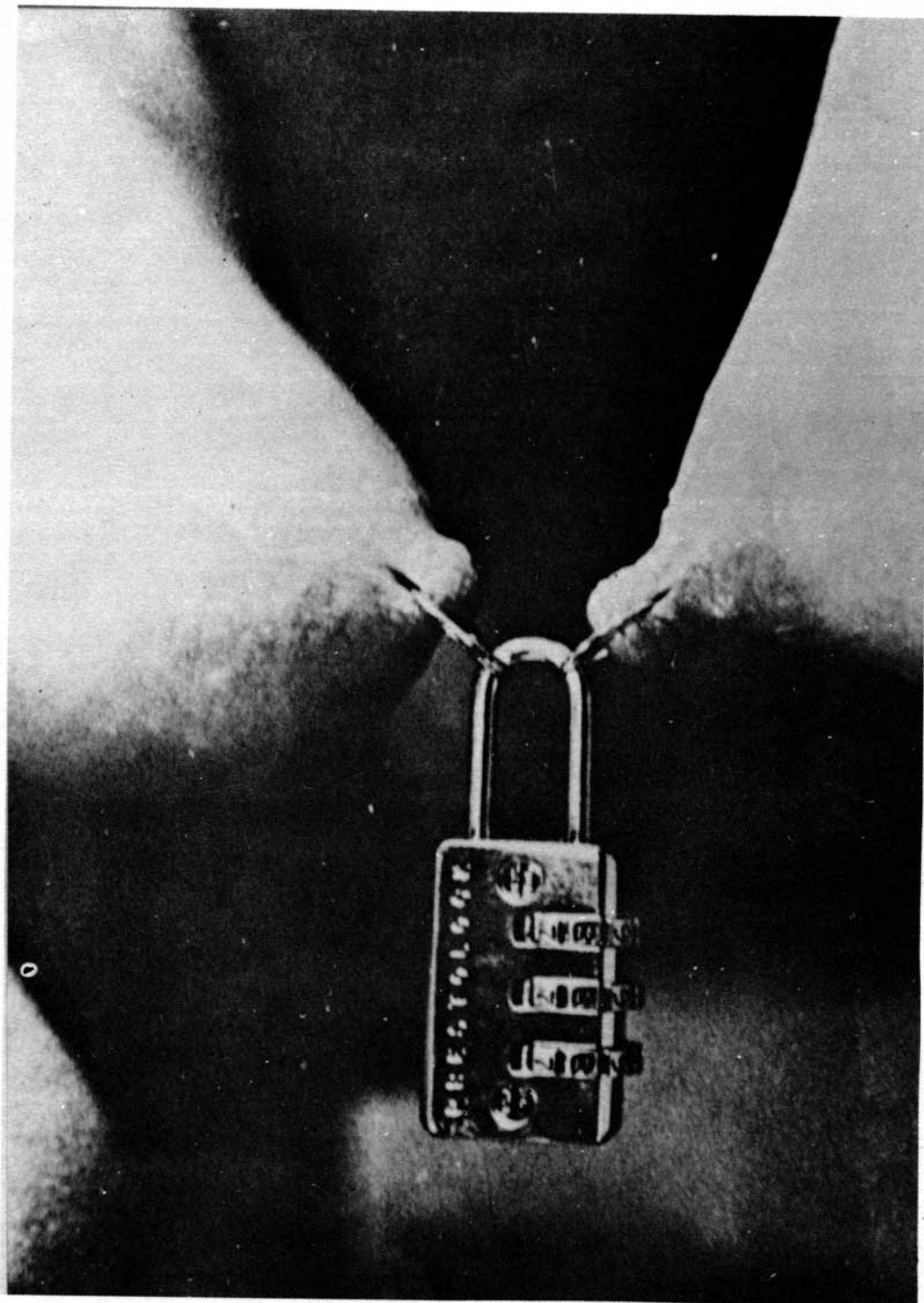
乳房責めに限らず、責めに徹底しているのは外国のようだ。それはポルノ誌と呼ばれる洋書の中にも見出すことができる。論をまっまでもなく「ポルノ自由化の諸外国と違い、恥毛を見せてはいけない、煽情してはいけな

い、ズバリもいけないという規制が強いことがあるから」でもあろうが、性交渉も、複数交渉も、トリプルセックスも実際に行なってはばからないモデルが現存しているだけでも羨しいと思う。SM誌にしても、見せかけではなく、実際にプレイをしている中での写真を撮り、掲載しているだけに生々しい場面が多い。

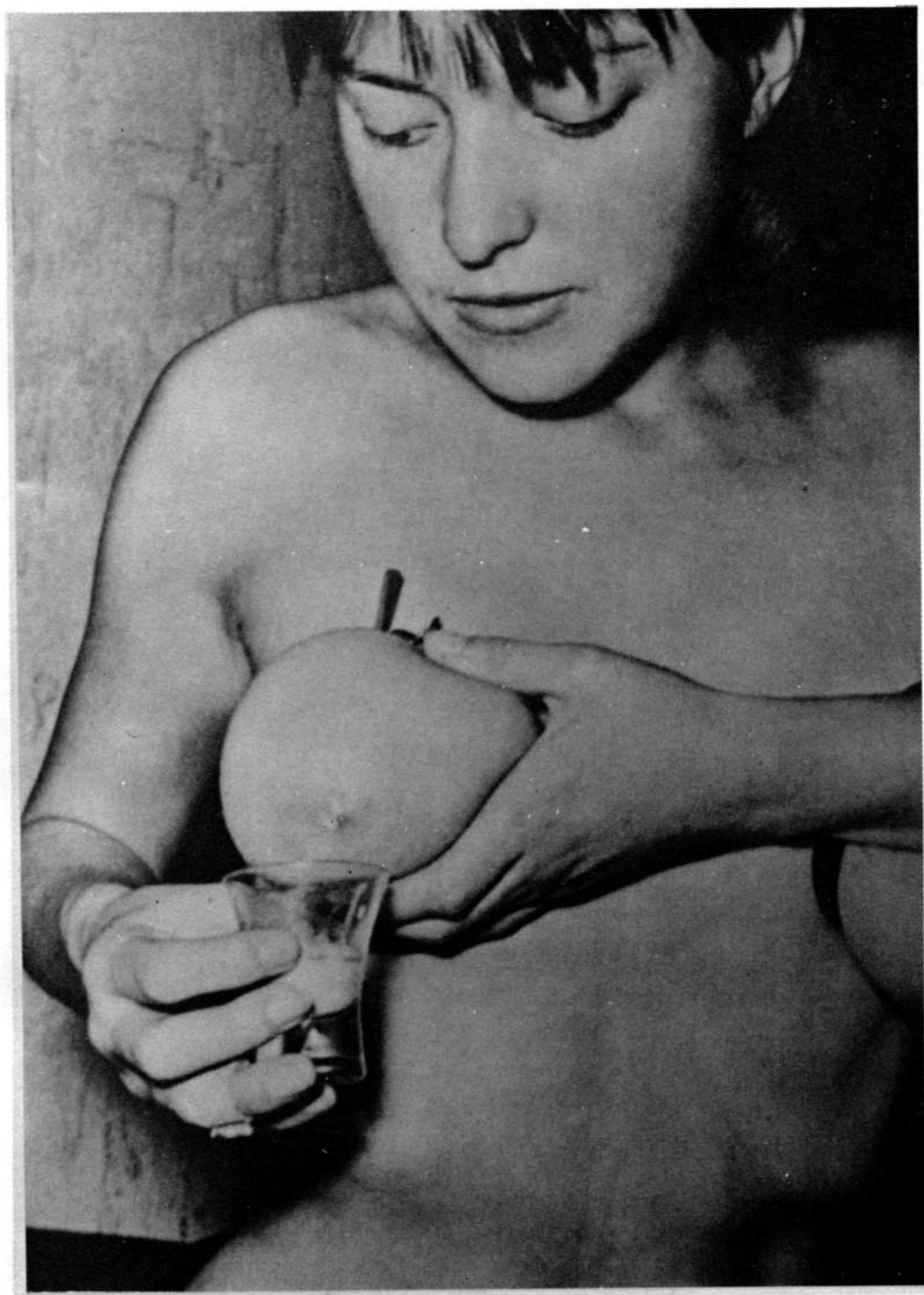
リング装着にしても、拷問具使用にしても然りである。ムチ打ちの跡も黒ぶくれになって、皮下出血している様も本物の印象を強くする。

乳房にしてもさまざまだが、日本人女性に比べれば大きく揺れる乳房を針や責具を使い、いたぶる姿は羨望を覚えさせる程だ。ただ措しむらくは責めや縛りがダイナミックすぎて、日本人的繊細な配慮を、無視していることで、細かな工夫がない点が措しい気がする。

たとえば、動けば乳首やアナル、ヴァギナに結びついていて強じんな鎖なり、ロープが引っ張られ、苦痛を与えるようにして、ムチを打っては、ムチの痛みとそれらの鎖やロープが体の動きに制約を加えるために動くに動けず、動けば痛むような工夫のある写真やS



北欧ポルノ誌より



北欧ポルノ誌より

M誌には出会ったことはない。ムチ打ちならばムチ打ちだけ、針責めは針責めだけ、拷問具使用はそれだけというシーンが多い。

そして最後には口舌奉仕を強いられたり、放尿を受けたりで終わっているのが一連のパターンであるようだ。それでも、日本のSM写真やグラフ誌よりは勝っているので、参考とするケースは多い。中でも緊縛は正に文字通りの緊縛で、日本のSM各誌に時折り見かけられるような縄のたるみや、肉に喰いこんでいないロープを見ることはない。ただ「グルグル巻き」という言葉を地でいったようなロープの多量使用が多いのは抵抗を覚える位で見応えはある。

再々度話しを乳房に戻すが、張りがあり、手の平に包んでも余りある乳房は私でなくとも責めてみたいと思うのではないだろうか。

十分に縛り上げた後、ローソクを女芯に突き立て、固定し、ローソクのロウが流れ落ちるようにしたものを女に見せ、熱さで腰を動かすさまを女の顔に馬乗りになりながらその様子をながめ、女の口に喰わえさせ、両の手で乳房のふくらみと、乳首の固い手応えを確認しながら、柔らかに揉みしごいてみたり、クリップを使い、乳首をはさんだままに乳房

を掴み上げては責めるのも一興ではないだろうか。

または、乳首同士を釣り用のナイロン糸で外れないように縛り、両の乳首がくつつくようにまで引つ張って接近させては糸を結んでみたり、あるいは上下、左右別々の方向に持つていたり、体を「く」の字に曲げさせ、ひざの後へ糸を廻して、足が伸びれば乳首びが引つ張られるようにした後で、くすぐり責めにあわせるのも面白い。

また、張りのある乳房といっても乳首の周囲は柔かく、押すと、胸骨にまで触れることができることは多くの人がご存知だろう。その乳首と乳首の周囲に合った大きさの木でもプラスチックの棒でも良いが、それをあて、それに穴なり、凹みをつけて紐又は細い鎖を巻いて倒れないように工夫した上で、その紐または鎖をブラジャーのように背中へ回して強く絞め、棒が乳房の中央深くに埋没する位にまでなったのを確認して紐なり、鎖りを結んでしまうのもアイデアとしては面白いだろう。

そのほかにも、真空ポンプの力を借りて、乳房がスッポリ包めるような強化ガラスの三角フラスコを用意し、管をつけてポンプに直

結しておいてから、その三角フラスコ（じょうごでもよい）を乳房にあてて、ポンプを作動させると、乳牛の搾乳機よろしく、乳房を吸い出し、三角フラスコの内壁に一分のスキなく密着した三角形の乳房ができる。乳房は膨張し、痛みを伴ってくるので、責めとしての効果も十分にあるようだ。これを応用しようと思えば、掃除機の管を乳首部分にあて、掃除機の吸塵力を利用して引つ張ってみるだけでも、似た効果はある。

こうしたアイデアはまだまだあるが、乳房を責めるにふさわしい女性が現れば、アイデアも更に豊富になるのではないかと、仲々出逢わぬ理想のM女候補を今や遅しと待ち構えている私である。

まちの中のエコー



太った女が好きです

らんまどろ

「サン・アンド・ムーン」四月号買いました。載ってました僕の拙ない絵が！ しかも一頁全部に一枚が!! 本当にありがとうございます。

「サン・アンド・ムーン」が出現した時、奇クの再来だと喜んだのですが、誰かが述べておられたように少し賢い所がありすぎ、それには僕みたいにSMプレイした事のない者には関心があっても近づけないような感じを受けます。そのせいで僕自身SMに興味や関心がありながら、それを絵にして送るのが、おっくうな気がしました。けれどもSM的な絵を描くことに熱意をもってますから、これからもどんどん送りますのでよろしく願います。

僕の絵の創作目標というのは、とにかく小さいときから絵（イラスト、マンガ類）を描くのが好きだったので描いているだけのこと

ですが、SM画については縄にまといつかれた女体の美しさを、縄によってエクスタシーへとみちびかれる悪魔的な悦楽の様を、神秘的にロマンチックに描くことが最大の目標です。これから何年、何十年かかるかわかりませんが、一枚でもよいから描けたらなあと思います。努力します。

だれもが同じことと思いますけれど、SMに関しての希望は、自分の手で早く女性の体に縄をまといつきたい、これだけです。プレイなど未経験者では初めからうまくいくかどうかわかりませんけれど、M的な女性を見つけてアタックしてみたい。その時に女性の肌と縄とが美しさをかもし出す様を絵にしてみたい、と独り悦に入っています。やはり僕は美を重視するのだ！ 芸術家だなア……冗談はおいといて、僕は太った女に縄がまといっているのが最高だと思っています。僕自身

太った女が好きです。もうサン・アンド・ムーンに出現してもいい頃ですよ、奇クの山口艶子のような女性、すばらしいと思いませんか？

独りよがりを書きましたが、サン・アンド・ムーンをできるだけ長く存続させるために（？）微力ながらイラスト面で協力させていただきたいと思います。頑張ってください、応援します。

——若き「芸術家」は「野心」をもって貰いたいと思います。ビ・アンビシャス！乾盃。「大志を抱け！」なんて、綺麗ごとの翻訳を鵜呑みにしないで「野心」で行きましょうや。その野心の中には、生涯の伴

侶にふさわしい異性を獲得するところも含めましょう。ふとつちよさんが好きだという言葉で救われた思いの女性もあることだと思います。でも、いいなア……なんちゃって慌てて結婚しちゃうと、アラ不思議。急に痩せ出す人もいて、世の中ままならぬことが多いものです。気をつけましょう、お互いに。「白豚二号」を引き出すことはプランにあるのですが、「アタクシ、このごろ健康がすぐれませんのよ。すぐ疲れましてエ……そのうちこちらからご返事いたしますわ、ホホホ」となったままです。でも、戸田氏が「メス豚M女初縛体験記」を提供して下さいました。これで一時我慢していて下さい。

（世田）

私は夫婦SMプレイの実践者

千葉 新丸 清

「ハッ」と思って手にしたのがこの雑誌である。——サン・アンド・ムーンの意味が判ら

ず購入したのですが、表紙から察するとSMの読者を対象したものだな、と理解出来た。

巷間にはカラー刷りのSM誌がはびこっているのですが、実のない内容にはいささか幻滅の感がありました。以前の「奇ク」に見られたようなマニアの叫びが全然みられません。私も「奇ク」の廃刊から、なにか本格的なマニア誌が発行される事を陰ながら期待していた一人です。この創刊号を手にとってみると



まあ或る程度満足のいくものであるとの感はします。

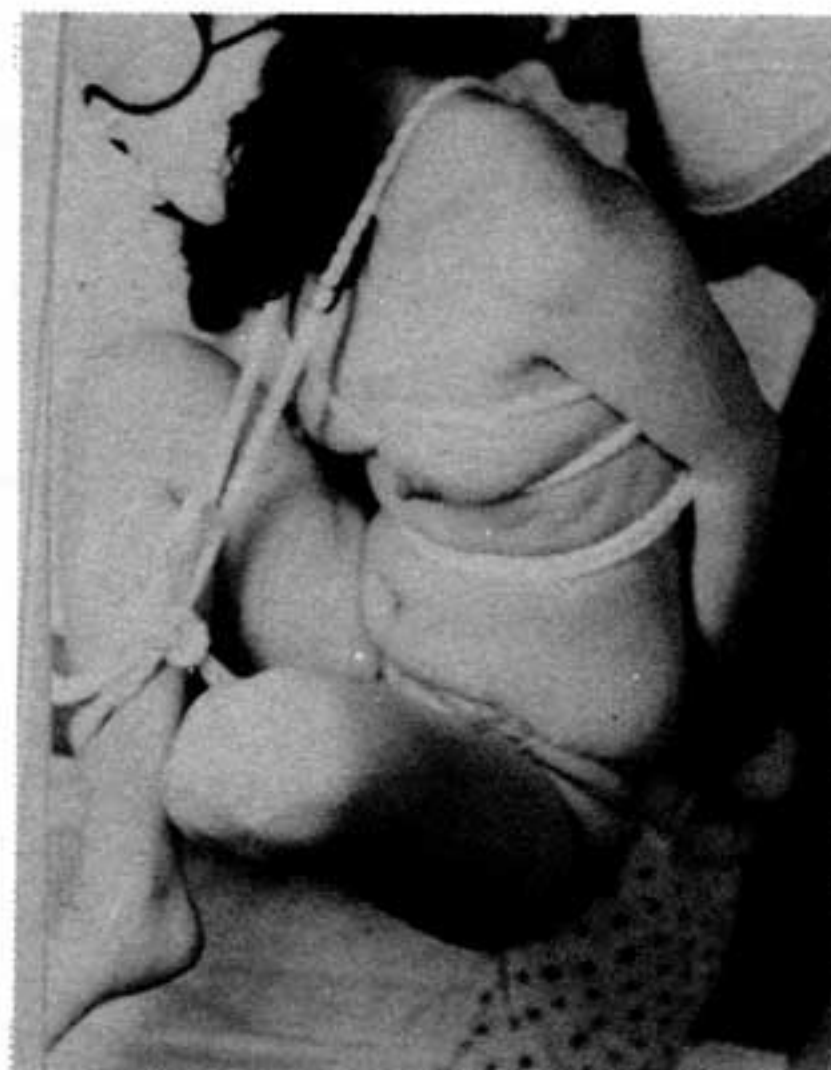
但し、フォトそのものが、どうも目を奪われ、心ときめかすものが少ないと考えるのは私一人でしょうか。

今、私の手許には四冊、それに別冊グラフ誌二冊があります。特に、別冊と本誌との関係ですが、余りにも同一フォトが使用されており残念です。私は矢張り少しでも違ったアングル、バックのフォトを望むものの一人です。また、「ザ・ビーコン」については、ロープをごたごた使っていて、巷間にはらんしているSMグラビアと全く相異しておらず誠に残念に思いました。

本誌の方は折角四号まで発行され、近々月刊誌として軌道に乗るようになると聞いておりますので、末長く続く様に、敢えて苦言を提させていただきます。

さて、私もSMに目覚め自分の妻とのプレイを実践している者ですが、私はあくまでもこのSMはプレイだと思います。お互いの性的高まりへの一手段として行われる事の方が長く続く要因だと考えます。

妻以外にも過去に於いてはプレイしてまいりましたが、安定したSMプレイは信頼関係



の上に成り立つものであり、夫婦プレイが一番よいと思います。

プレイフォトも今では相当量増えました。しかし、どうもマンネリしている様で、「サン・アンド・ムーン」にある様なプレイとならず、望んでいても仲々うまくいきません。今後のプレイ参考という事で、夫婦プレイ実践者とプレイフォト、資料の交換（条件付きで見せ合う）を希望しています。

出来る事なら、この「エコー欄」で呼びかけておられる愛知の鈴井是雄氏とお話したいと思います。

最後に編集室にお願いですが、お便り回送の手続きをよろしく願います。

貴誌の今後の発展を希いペンを置きます。

——「回送手続き」……？ 編集子に宛た貴翰を読了後鈴井氏へ回覧して欲しいということかな。小首をひねった末、回覧のため同封四枚の写真の内二枚を封入して投函しておきました。さて——

「ザ・ビーコン」と「サン・アンド・ムーン」は姉妹誌であって、購読者対象が違います。恐らく「ザ・ビーコン」は眺めて喜ぶ購読者には好かれるでしょう。活字を読むことを知っている「読者」は、SMグラフ誌では結局のところ満足しないのです。

「サン・アンド・ムーン」は「世田を中心とした個人誌」のような内容から出発しました。平均年令三十八九才が寄稿者として並んでいるのです。従って若い世代の参加を求めることから、購読者の中からの反応を待っているところです。相乗効果を成り行きの内に期待しているといえましょう。また、中味を濃くして行きたいと常々考えておりますから、弊誌の主旨である「愛をみつめる」見地から貴夫妻のように実生活の中での愉悦追求をされている方のご登場が望まれるところです。

（世田）

責め写真雑感

稲山民夫

日月舎様。ベトつく畳に東京を覆うこの毎日の雨では吾心はいよいよ急降下の速度を増してゆくばかりです。貴舎は三月号も良ろしく日月好々といった由お喜び申し上げます。雑感が沸いて仕方ありませんのでちよっと記します。

故人の伊藤画伯から色々教えられまして、よくよく思うのですけれども、責めとは痛覚を刺激するものであり、責め写真とはカメラを予定しないドキュメントでなければなりません。勿論演出も必要ですが右の定理を支持する為の縁の下舞的なものでなければその写真を必然的に失敗に終わります。責めを快感感覚を刺激する為の手段として為すのであれば、それは単なる好色漢であって変態性欲(責め)とは何の関係もありません。痛覚とは死への感覚であり、つまり責めとは生死というこの世の最大の存在をかけた厳しい儀式な

のです。しかし自然の妙と申しましょうか、快感の刺激による生への昂揚と責めの死への下降とは極致においてつながってしまうのです。私が長らくブルーフィルム(性交写真)を愛好しておりましたのは、無防備に露出した性器と充血した両性器の感覚の下において万人は演技を許されず肉体のケイレンは無理矢理写真をドキュメンタリーとして作製せしめ



てしまうからです。この性交というのも実に厳やかな人類に永々と為されて来ました儀式なのですから。次に簡単に責め写真をとる上の必要事項を記します。

- 一、モデルに余裕を与えぬ事。
 - 一、モデルの視線をカメラに向けさせぬ事。
 - 一、モデルの視覚は錯乱していなければならぬ。
 - 一、痛覚への刺激であって快感を与えるのは禁物。
- 只し錯乱したる快感の生起したる場合は別。
- 一、髪をかき乱す事。
 - 一、背景としては死のイメージを出す為に廃屋か古い屋敷が良い。新築のホテル等ではまるでイメージが反対であって重々注意を要する。新築の場合はわざと室内を乱し壊すこと。
 - 一、現象の処理は多少暗い仕上がりとし黒と赤を特別に強調すること。真昼間の様な写真処理がしばしばあるがこれもイメージが全く別になってしまう。
 - 一、責める者はこれから為される責めがどういう目的をもったものであるかはっきり明確でなければならぬ。単に二人で楽しむのだったら写真にとる必要は初めからないのだ。

責めにもその目的と種類に色々あり写真にとる以上多少の研究意識がなければつまらぬポルノ曲的なものになってしまう。

伊藤画伯の責め写真が何故かくも凄いのか、それは氏の責めに対する態度が既に凡人の我々とは違うのだが、思うに写真家がかなり優れていたとつくづく感じ入ってしまうのです。とりとめもなく書きましたが、サン・アンド・ムーン誌はやっぱりいいですね。市場販売では最高の出来ですし、初心の企画が貫かれているのがすばらしいです。おしむらくは世界に恥じない風俗草紙や奇クの如き雑誌が

現在皆無であることです。

それでは今後の「責め」の健闘をお祈り致しまして失礼させていただきます。乱筆をお許し下さい。

——弊誌は「責めの研究誌」ではないのです。ご自身が晴雨翁に傾倒され研究されたのであれば今後そのお作品をご発表下さい紙幅をさいて記載させていただきます。但し、故人は故人ゆえの過去の人ではなく日月の光りの及ぶ世界でも「過去」であると私は断言しておきます。

(世田)

第四号の読後感

千葉大塚 啓

出そいで出ない第四号がやっと出てホッとしたり、嬉れしかったりで、私と同じ気分の人が大勢居たことでしょう。4葉では売っている店がないので、何回も東京まで出掛けた

りして、発行所に交通費を要求したいくらいのものです。

さて、まず四号全体の印象は、皆さんそれぞれ勝手なことを云っているなということ

す。自分の好きなことは、皆も好きでなくては怪しからん、わからん奴は馬鹿者だ、といった論調は一寸どうかと思いますが、それでも、他の雑誌ではこんな勝手気儘なことは云わせてもらえないので、まあまあ結構とおきましようか。

第三号で私の希望した、投書家やモデル嬢(?)に名前をつけようという意見は、かなり取り上げて頂いたようで嬉れしく思います。もう一步徹底して欲しいものです。特に写真については撮った人とモデル名を是非つけて欲しいものです。

森山周一氏の提案された資料室は実現したら素晴らしいと思います。写真や雑誌だけでなく、SMプレイ用具なども集めると面白いのですが。大きな道具は仲々大変としても、青木茂氏の『アブノーマルセックスライフ』に登場したような小道具の類を集めたらどうでしょう。読者のなかには、仲々プレイの機会に恵まれず、ひそかに小道具を自作して、いつの日かそれを使う日を夢みている人も居ると思います。そう云う人に自慢の小道具を提供してもらい、編集部で試用テストして報告するというのはグッドアイデアと思うのですが。

ビーコン一号は、美しく可愛いモデルに恵まれて綺麗な写真が多くて結構です。まあ迫力の点で佐野みさ子さんのものにやや劣りますが、これはモデルの故ではなく、繩師の責任でしょう。あまり綺麗にばかり撮っている、他のSM誌とあまり変らなくなることを恐れます。モデルが良いだけに大事に育ててスターにしてもraitaiいものです。も

つともスターになると、東てる美のように縛られなくなってしまうかな。
本の判型は、S&M本誌と同じか、ビーコンの半分の大きさでよいと思います。自宅の書棚に飾っておく本なら大きくて厚い方がいいのですが、こっそりしまつて置くのに、やたらに大きいのは本当に困ります。大きくした方が値段の高いことをまぎらわせられると考えたら大間違いです。水増しのない良い写真ばかりなら、ページ数が少なくても、判型

が小さくても値段なぞ一向に気にならないものです。写真を変に大小とりまぜて妙な具合に配列したり、二頁にまたがらせたりするのは大変迷惑です。一頁に一枚づつにして、そのわきにモデル名、撮影者名、簡単なコメントなどを書くだけが最も良いのです。売る立場より買う方の立場で考えて作つて頂かないとビーコンの将来は危いはず。

ビーコンに対する採点が辛くなりましたが他誌と違ったものを作つてもらいたい一心で悪意のない所を御理解下さい。

——逆らうことが好きな人間と思われても支障がありますので、誌上では言葉少なにしておきます。「資料室」について記すなら、図書に限る、と狭義にとらえてはおりません。或る時期の「人間社会」の博物館（資料収集保存歴史館）ぐらいにしたいという野望もありますが、ワイセツ物陳列の「罪悪視」が存在する現状では設置・運営もむずかしいでしょう。法律が問題というより「人心」です。「サン・アンド・ムーン」誌は国立国会図書館に納本提出しておきますから、その点では、「ポルノ出版社」ではないという意識を出しています。



お願い……

川崎

尾山勇治

待望の「サン&ムーン」第三号。奇ク誌が休刊して以来、久方振りにホンモノに巡り会えた感じがしました。

特に圧巻は佐野みさ子さんでした。どのような苛酷な仕打ちをしても黙って受容するみさ子。そんな彼女を自由にできるレポーター並びに世田氏を本当に羨しく思います。

「代理妻」とか「奴隷牝」とか呼ばれていま

すが、彼女は僕にとってはまさに「被虐の天使」です。

そこでお願ひがあります。次回またはいつか、彼女を縛る時、是非小生を同席させて下さい。出来れば小生の手で彼女を自由に弄びたいところですが、プレイ経験の少ない小生のこと、縄さばきも思うにまかせず、彼女に不快な思いをさせては申し訳がありませんの

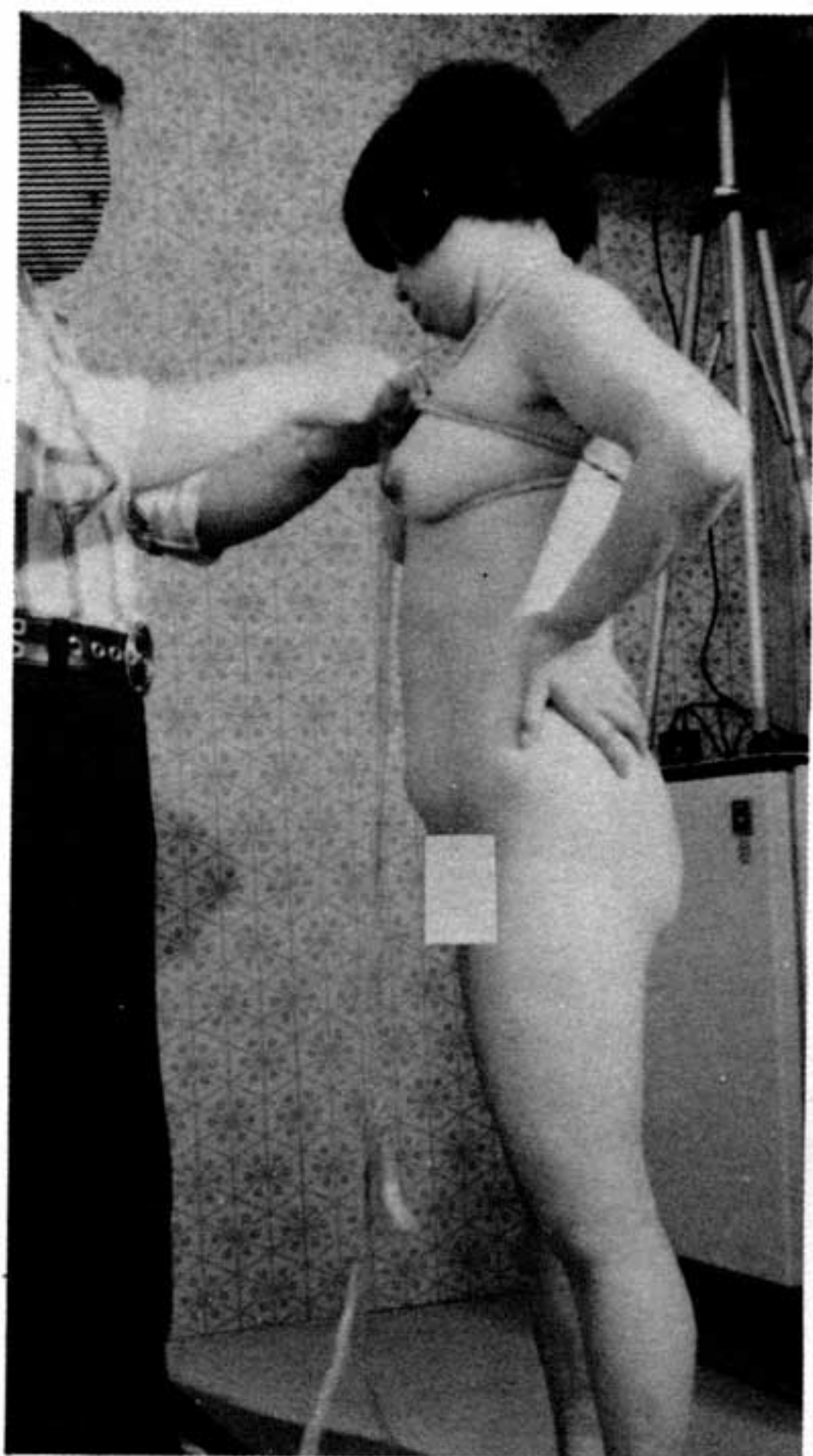
で、助手でもレポーターでも結構です。小生の趣味は山登り。特にロッククライミングの真似事などをしております。その道具（ザイル・ピッケル・カラビナ等）を使うと、かなり面白い責めができるのではないかと考えております。

申し遅れましたが、小生は川崎市に住む三十二才の男性。身長一七〇糎、体重六十二斤……S的傾向が幼時より強く、そのためかどうか未だに独身です。何卒よろしく御願ひします。貴誌の御発展を祈ります。

——ロッククライミングは体験の積み重ねと慎重さ、忍耐も必要な筈です。その山男がどうして平地で同じ修練をしないのでしょうか。女性を「責める」のではなく「攻め」てごらんなさい。山を征服する意気を女に向けるなら「独身」の断りは不必要になることでしょう。

次回撮影の際には、貴男が「王侯」のなりで「女奴隷」を騎る姿が写角に納ってよいのであれば、未来妻の調教体験に役立つよう、出席していただきましょう。それを尻込みするようではアタッカーの資格もありません。

世田



本誌バック・ナンバー

創刊一号 品切れ

二号 品切れ

三号 品切れ

四号 残部僅少

五号 残部僅少

直接ご注文の場合は

定価・千二百円

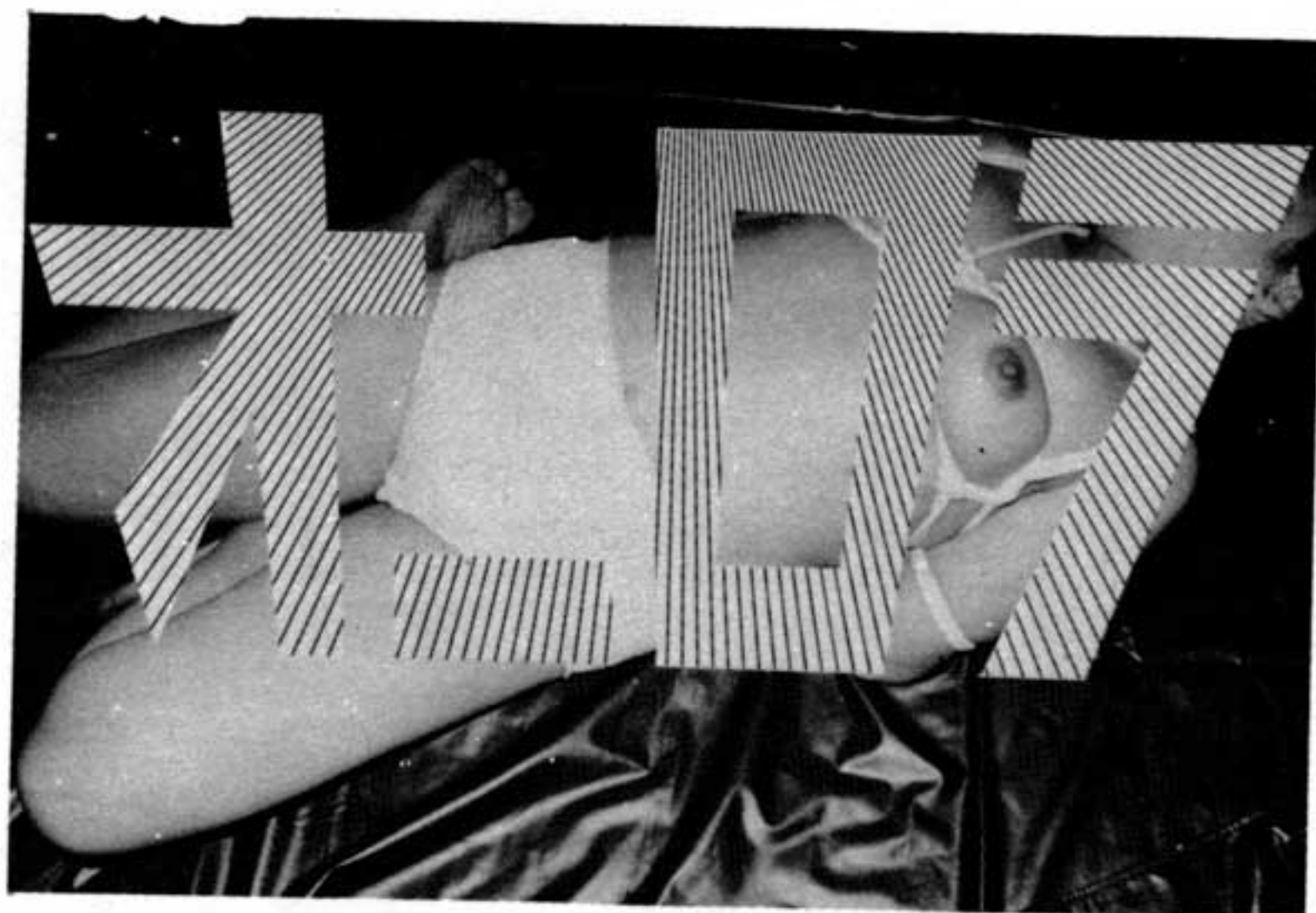
送料・百円

但し二冊以上ご注文
の場合は送料不要

〒一〇一

東京都千代田区西神田
一―四―13新神田ビル
エド・プロダクツ





前号に発表したことが直ちに反響がうまれ、次号原稿締切りまで「掲載希望文」が届くとは考えられないが、編集の浦戸君から「オーロラ」欄の空きを埋めるようせつつかれる

ものがものだけに無制限な組織拡大はしたくないという本音もあることなのだ。実践家たちの隠忍自重の一面もまたお分りいただけるかと思う。

羽目になった。言い分は「モデル文を示すいい機会ではないか」との提案でもあり、まずは一例として、世田に関わるグループ紹介を試みることにした。といっても、直接関与している愛好者集団ではない。私を除く自称「会員」たちはこれから「会結成」をして仲間集めを試みるか……と思いはじめた程度。某「会員」は「あんたが代筆してくれるなら仲間のことを書いてもいいよ」と及び腰。

つまりは、仲間をふやして楽しみたいが、

世田（私）は、ここでは彼等（自称「会員」たち）のお手伝いをしていいる。美味のある手伝いなのだ。会員の写した写真のネガをスライドに転写して、居ながらにして資料の蓄積が果せるわけ。奉仕と余碌がバランスよくとれているのである。或る日の会合のスナップは世田は止むを得ず素顔のままで、他は黒くつぶした。現在、構成員はその三名

『巴の会』

★山県 登 建築事務所経営

横田 信紀 シナリオ作家

大井 志朗 医師（医博）

★アマチュア小型映画（八ミリ）の製作発表を通じて互いに知り合い交流。

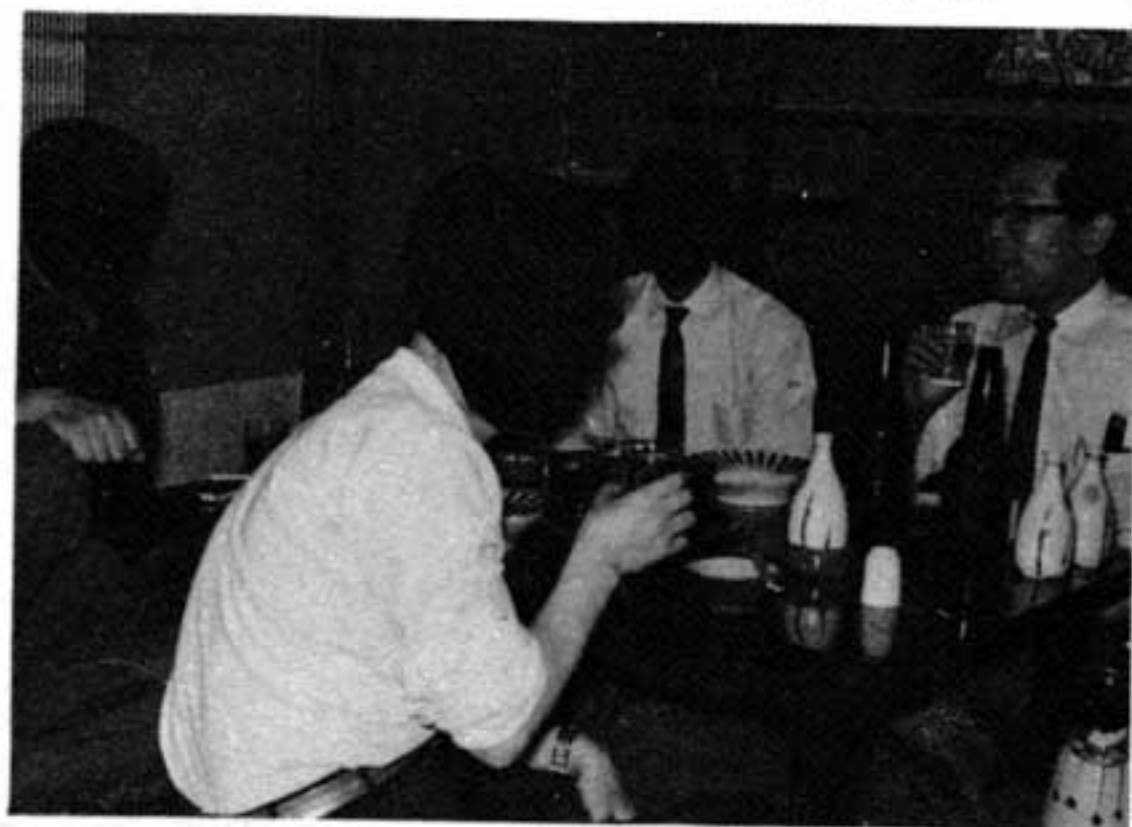
★共通点はスクリーンに投写して作品鑑賞し合ったこと。従って「緊縛写真」も印画紙に焼付けたアルバムは持たず、スライドによる資料交換が目的である。

★同席交歓会は年二回程度。その間は文通によって新作交換を続ける。

★会員加入者への希望
自撮影ネガを有し、スライド化して相互交換できる人に限る。

★連絡責任者 横田信紀

「私たちは「サン・アンド・ムーン誌」が末長く存続されることを希っていますが、日々の暮らしの中でも紳士的に交際できる方との接触を希望しています。初回連絡は『日月舎』を通じてお願いします」



代理妻 みさ子

佐野 正

私は代理妻みさ子を所有する主人の佐野正です。奇クではみさ子の肉体を辻村さん、ロマン派生さんにお貸しました。夫以外の男性の前で全裸にされて縛られた上にセックス責めを受けるみさ子は、いつまでも皆様の良き代理妻でありたいと思っています。

みさ子も三十才後半に入りました。脂ものりきっています。女として今が最高の責め時です。近々私の責め写真を発表出来ることと思います。S M 同好者のご希望にそいたいと思います。



モデルのアルバイト希望

前田美沙子

私の友だちにS M 誌の縛り写

います。

真のアルバイトをした人がいて、報酬を聞くと羨しく思いました。でも、彼女ほど大胆にはなれません。それで勝手なお願いですが、貴舎で撮影会（公開の）をされるご予約がございましたら、お呼び出し下さいませんかでしょうか。露骨なポーズを強いられたい、公刊誌の写真ページに使われない撮影でしたら、強い緊縛でも長い時間耐えられると思

もし、イラストレーターの多貫様にご紹介いただけるのであれば、個人的に絵のモデルとしての専属をお命じいただきたいと思っています。来年の「六月の花嫁」になりたい二十二才：その思いを遂げるために「愛の巣」作り資金が欲しいのです。



変収脚起



お蔭様でこの一年無事でした。

小誌を、出してすぐ休刊するこ
とも、発禁・取調べの浮き目に
も合わず長らえて来られた、と
いうことで。

それらは、「創刊の序」でも申し
上げた約束ごとの、履行であり
証左といえると思います。今後
もより一層ご期待に添い得る誌
面作りを心掛けて参りたいと思
います。ただ、いかんせん弱小
な日月舎のこと、灯を掲げてい
るのが今のところ精一杯で一月
も早く全国に散在しておられる
実践家に、小誌の存在を気付い
ていただきたいものと考えてい
ます。僅少な部数であっても確

実に売り切れて、自然、直接発
売元に予約購読を申し出ていた
だくのが入手のための最上策と
なるような「座右の書」の一つ
に育てたくもありますし、そう
なるために標榜だけの「読者が
作る雑誌」でありたくないもの
です。

本号巻頭の「渡部好美特撮記」
はいかがでしたでしょうか。こ
れは前号の「縛絆特報」の逆を
行く、本誌側の「挑戦」です。

「M女」といえば、オールラン
ド・セックス・プレーヤーと観
念づけてしまった「風俗誌」へ、
緊縛陶酔・被虐恍惚の実検から
アンチテーゼを勘考するための

ものでした。渡部夫人への攻撃
的セメ(加虐)で、肉体の愛撫
弱点刺激を付加しないで被虐堪
能が叶うことが確認されたので
す。「M女」という定冠詞づきの
婦人を侮蔑したのでも玩弄した
のでもありません。秘計は一に
幻想打破にたったの「挑戦」そ
のものでした。「六号のメイン
だ」といった事が災いしてか、
邑内氏は慎重或いは緊張の余り
にか、期待の原稿は締切に間に
合いませんでした。ご本職が原
稿書きとは縁のないことなので
やむを得ません。予告と違った
ことに編集子が代って読者各位
にお詫び致しておきます。

「太陽と月」がご夫婦の愛情生
活を濃密なものへと焚きつけた
ことになるのでしょうか。一の
瀬氏夫人はオメデタとのこと……
このニュースにさぞや中宮栄氏、
長期に亘る『妊孕美』取材を希
望し我れ勝ちになると思いきや、
密着して記録出来る夫君にはか

なわないと諦念顔。記録の空白
埋めが叶い、今また別の空白が
埋りつつあると、その方へ関心
をわざと反しているようです。
それは何かという問いに

「海を越えてウタマロを尋ねて
来る白人女性に、ひょっとして
ボンデージ(緊縛)トライが可
能になるようで……今はチャン
ス待ち」との返事。碧眼の婦人
にアタックしたがって国を飛び
出す士人が多い中で、悠然と飛
来を待つ気分は無上感かもしれ
ません。

「西の市」が済んで、師走から
新年へかけての静けさを取り戻
した神域近くにお住いの方から
「いよいよですね」と「先き」
をせっつくお便りです。人生の
途上で愉悅の時期を迎え、その
足跡を記して行くお考えのよう
です。「愛」は深大なものです。